



Title	親世帯と子世帯による多世帯居住に関する研究-物理的距離の選択と調整につながる知見の創出-
Author(s)	北山, 千穂
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/96091">https://doi.org/10.18910/96091</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 博士学位論文

親世帯と子世帯による多世帯居住に関する研究  
-物理的距離の選択と調整につながる知見の創出-

北山千穂 (平岡)

2023年12月

大阪大学大学院工学研究科



## 目次

<b>第1章 序論</b>	1
1. 研究の背景	3
2. 研究の目的	8
3. 関連する既往研究	9
4. 論文の構成	13
5. 用語の定義	14
<b>第2章 親世帯と子世帯の同居・隣居・近居</b>	17
1. はじめに	19
2. 研究の方法	20
3. 回答者の属性	21
4. 居住開始時のエリア選択と提案世帯	22
5. 居住時の相互交流・扶助	25
6. 将来に対する見通しとその理由	27
7. まとめ	29
<b>第3章 同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離</b>	31
1. はじめに	33
2. 研究方法	34
3. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係	40
4. 親子・末子年齢別の心理的距離、生活的距離の実態と関連性	43
5. 生活シーンから見る生活的距離と心理的距離	52
6. まとめ	56
<b>第4章 同居する親世帯と子世帯の収納・物品の共用による相互扶助・交流</b>	57
1. はじめに	59
2. 研究方法	60
3. 収納の共用	63
4. 物品の共用	68
5. まとめ	71
<b>第5章 結論</b>	73
1. 各章で得られた知見	75
2. 多世帯居住のための住宅計画に向けた提言	79

3. 多世帯居住検討のためのフローの提案	82
4. 今後の課題	87
謝辞	91
研究業績	92

# 第1章

## 序論

---

1. 研究の背景
2. 研究の目的
3. 関連する既往研究
4. 論文の構成
5. 用語の定義



## 1. 研究の背景

### 1-1. 多世帯居住に注目すべき理由と多世帯居住の範囲

少子高齢化が問題となる中、高齢者の単独世帯や共働き世帯の増加、生涯未婚率の上昇により、少人数世帯は増加していくと考えられる。従来の社会インフラとしての同居家族に頼った暮らしがベースとなった社会では、見守りや子育て、日常生活支援など、世帯人員の減少に伴い発生する問題が重要な社会課題となっている。解決策として、公共・民間によるサービスが整備されつつあるが、依然、相互扶助が必要な状況が続いている。平成28年6月2日に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」では、子育てや介護について世代間でお互いの暮らしを助け合い、健やかに安心して暮らせる環境づくりとして三世代同居や近居を推進している（図1-1）。

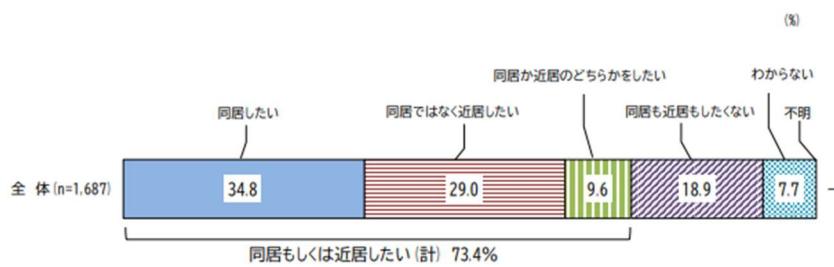
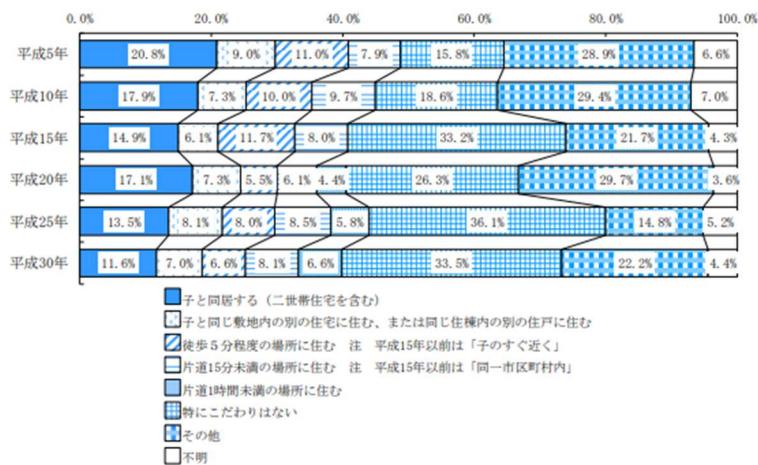


図1-1 ニッポン一億総活躍プランにおける三世代同居や近居の推進<sup>1-1)</sup>

## 参考文献

- 1-1) 内閣府：令和元年版少子化社会対策白書 全体版、内閣府HP（参照2021年10月12日）<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s2-1-3.pdf>

多世帯居住の選択肢として、同一住戸に住まう同居、隣接する住戸に住まう隣居、日常的に行き来できる距離に住まう近居が挙げられる。内閣府による「高齢者の住宅と生活環境に関する調査」では、子どもとの同居や近居の意向について、73.4%が同居や近居をしたいと回答しており（図1-2）、親子で近くに住みたいと考えている人が多い。また、国土交通省住宅局による「住生活総合調査」では、高齢期における子との住まい方（距離）の希望について、同居を含む片道1時間未満の場所に住むことを希望する割合は4割程度と経年による大きな変化がない。一方、「子と同居する」は総じて減少しており、平成5年の20.8%から平成30年の11.6%となっている（図1-3）。これらのことから、同居以外の多世帯居住への需要も相対的に高まっているといえよう。

図1-2 子どもと同居や近居の意向<sup>1-2)</sup>図1-3 高齢期における子との住まい方（距離）の希望<sup>1-3)</sup>

同居・隣居・近居からなる多世帯居住は、親世帯と子世帯がつながって暮らす住まい方として、互いに助け合いながら暮らせるなど利点が多いことから、注目すべき居住形態である。

#### 参考文献

- 1-2) 内閣府：平成30年度 高齢者の住宅と生活環境に関する調査結果（全体版），p83，内閣府HP（参照 2022年8月26日）<https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h30/zentai/pdf/s2.pdf>
- 1-3) 国土交通省住宅局：平成30年住生活総合調査結果, p94, 国土交通省HP（参照 2022年8月26日）<https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/content/001358448.pdf>

多世帯居住は独立した複数の世帯が近くに居住する居住形態であるが、その内容は多世帯居住する相手世帯との①続柄、②物理的距離の組み合わせにより多岐にわたる。続柄、物理的距離において、考えられるものを以下に記載し、整理する。

①続柄：多世帯居住する相手世带は血縁に限らず、友人など一定の関係性が構築されている相手を想定する場合もある。

血縁の場合においても、親世帯や子世帯、叔父、叔母、甥、姪、兄弟姉妹など、続柄は多様である。

②物理的距離：多世帯居住する相手世带との居住地の物理的距離が近い順に、同居、隣居、近居が挙げられる。

同居は同一の住居内に居住することであるが、共用エリアを持つか否か、またはその程度により物理的距離にグラデーションが存在している。また、物理的距離は住まいの分離度で調整され、世帯間の距離<sup>注1-1)</sup>に影響を与えている。

別居の場合でも隣接する建物に居住する隣居、一定の時間距離内<sup>注1-2)</sup>に住む近居<sup>注1-3)</sup>が存在する。

本研究での、物理的距離と居住形態、住居形態、敷地条件の関係の定義と多世帯居住として扱う範囲を図1-4に示す。



図1-4 多世帯居住に関する物理的距離の概念

#### 注釈

- 注1-1) 世帯間の距離とは、親世帯と子世帯が暮らしを一緒にする程度として本研究で位置づけるものである。心理的、生活的、物理的といった3つの暮らしの側面があり、それぞれ、交流や生活支援などの生活的距離、空間の共用度などの物理的距離、気遣いの程度や一体感などの心理的距離として捉えられる。
- 注1-2) 時間距離とは、交通手段に関わらず、住宅間の行き来にかかる時間を単位とした距離のことである。
- 注1-3) 近居は、住居は異なるものの日常的な往来ができる範囲に居住すること。時間距離の定義は研究により異なるが図1-2においては、国土交通省「親子近居・同居世帯に対するウェブアンケート調査」<sup>1-4)</sup>で使用されている定義である、「片道1時間以内」を採用している。

#### 参考文献

- 1-4) 国土交通省、”高齢期の住宅選び替えにおける呼び寄せによる入居または近居・同居に関する実態把握・課題の検討”，<https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/content/001381206.pdf>，（参照2023-10-20）

続柄や物理的距離の組み合わせにより、その実態は大きく異なると考えられる。多世帯居住の中でも、続柄と物理的距離を明確に区分し、研究を進めることが必要である。

## 1-2. 多世帯居住における課題点

多世帯居住は、暮らしの一部を融合することで互いに助け合いながら暮らすことが可能になる。一方で、赤平・大嶋（2002）は、三世代同居において、母親は「母・妻・娘」と世帯内での役割が増すことにより、心理的ストレス反応を生じており、母親や子供に心理的ストレスを与えない三世代同居を実現するには、世代間での価値観や生活リズムの違いを認めたうえで、物理的にも精神的にも適度に自立しながら共存していくことが必要であるとしている<sup>1-5)</sup>。暮らしの融合が進むことで、相手世帯の嫌な面を見てしまったり、プライバシーが侵害されたりと問題が生じれば、多世帯居住が継続できなくなることも想定される。

多世帯居住において、生活を融合することにより生じる相互扶助や交流といったメリットは、一方で、生活の融合が進みすぎると心理的ストレスやプライバシー侵害などのデメリットに転じる、という特徴があるといえよう。

デメリットを最小限に抑え、メリットを最大化するためには、多世帯居住開始時の物理的距離選択<sup>1-4)</sup>が重要であると考える。なぜならば、物理的距離は、親世帯と子世帯の生活の融合を、相手世帯の生活に踏み込みすぎない程度に調整する重要な要素であると筆者は考えているためである。

多世帯居住検討の際には、相手世帯との続柄に応じて、物理的距離を選択することが必要であるが、隣居は同居と迷った末に選択される<sup>1-6)</sup>ことが示唆するように、生活者が、多世帯居住を開始した後に発生しうる相手世帯との関係性や暮らしの変化についてあらかじめ予想し、適切な物理的距離を選択することは難しいだろう。物理的距離の選択は、同居・隣居・近居の住居選択の時点、そして同居を選択した場合は、住まいの分離度を基本とするゾーニング検討の時点で発生する。住まいの分離度やゾーニングは間取りにおいて規定されるため、間取りを検討する住宅設計は、物理的距離調整の一手段であると筆者は考えている。物理的距離の選択は、物理的距離を調整する手段である住居形態の選択や住宅設計に影響を与える要素であるといえよう。

---

### 注釈

注 1-4) 多世帯居住における物理的距離は、同居の場合は住まいの分離度、別居の場合は住居間の距離により規定するものである。

### 参考文献

- 1-5) 赤平理紗、大嶋巖：三世代同居と母子の心理的ストレスの関係についての基礎的調査、こころの健康、Vol. 17, No. 1, pp. 57-65, 2002. 6 (DOI : <https://doi.org/10.11383/kokoronokenko.u1986.17.57>)
- 1-6) 上和田茂、青木正夫、船越正啓、大久保健志：隣居型戸建て親子二世帯住宅に関する研究 - その1敷地・住宅条件と隣居化の要因 - , 日本建築学会大会学術梗概集, pp. 191-192, 1996. 7

多世帯居住を検討する上で、相手世帯との関係性の変化を予測できず、適切な物理的距離を選択できないことは、多世帯居住を推進する上でのハードルであるといえる。多世帯居住を開始する時点で相手世帯との物理的距離を選択できるような知見の創出と発信が必要である。

また、多世帯居住推進の観点では、多世帯居住の暮らしの価値を生活者に伝えることも課題である。内閣府の「少子化対策に関する意識調査報告書」において、同居もしくは近居することになった理由に対して、同居は「同居もしくは近居したほうが住居費や生活費が安く済むから」、近居は「たまたま近くに住むことになったから」が最多となっている（図1-3）。現状、多世帯居住は経済面を主目的として選択された住まい方であり、暮らしの価値の視点から積極的に選択されている住まい方ではないといえる。自ら希望して選ぶ住まい方として、多世帯居住が暮らしの選択肢として残り続けるためには、暮らしの価値の発信も同時に必要になるといえるだろう。

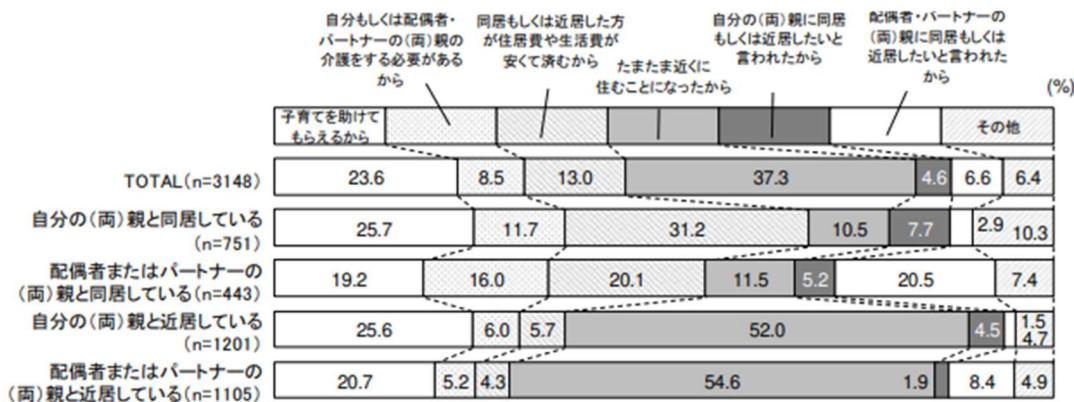


図1-5 同居もしくは近居することになった理由／現在の住まい方 <sup>1-7)</sup>

## 参考文献

- 1-7) 内閣府：平成30年度 少子化社会対策に関する意識調査【全体版】(PDF版), P108, 内閣府HP, (参照2023年10月23日) <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h30/zentai-pdf/pdf/s4.pdf>

## 2. 研究の目的

以上のことから、多世帯居住を検討する世帯にとって、相手世帯との関係性や続柄により適切な物理的距離が選択できるような知見と物理的距離の調整につながる住居選択・住宅設計のノウハウを提供することが必要であると考える。

本研究では多世帯居住の中で最も数が多い注 1-5) 親世帯と子世帯の組み合わせによる多世帯居住（以下、親子居住）に着目する。本研究では、相互扶助や交流といったメリット、世帯間の摩擦のようなデメリットの物理的距離による変化を把握し、メリットを最大化し、デメリットを最小化する、多世帯居住のための住宅計画の知見をまとめることを目的とする。住宅計画とは、親子居住の物理的距離の選択や調整を含むものである。

そのために、本研究では、①物理的距離別の住まい方の比較、②同居における世帯間の距離、③同居における交流と相互扶助の観点で調査研究を行う。物理的距離別の住まい方の比較では、住居形態の選択に向けた知見構築を目的とし、親子居住の選択肢として現れる同居・隣居・近居といった、物理的距離の違いによる暮らし方の差を把握する。そのうえで、親世帯と子世帯の物理的距離の取り方が最も制限される同居に着目し、住宅設計ノウハウにつながる知見構築を目的として、世帯間の距離の視点からライフステージによる差を把握する。同居における交流と相互扶助の観点では、実際の住宅設計に落とし込めるよう、既往研究において知見が構築されている空間や生活行為の共用に追加する視点として物品や収納の共用について深堀する。なぜならば、相互扶助や交流を行う上で、人の行き来と同時に物品の行き来も考えられることから、収納はゾーニング同様、住宅設計上重要な要素となると考えているからである。これらの知見は親子居住を促進する際に、生活者が物理的距離や世帯間の距離、実際の住宅計画を検討する際に参考となる知見である点で意義があると筆者は考えている。

また、多世帯居住の暮らしの価値把握を目的とし、相互扶助・交流に着目することで、円滑な相互扶助・交流を促進できる場の要素を明らかにし、多世帯居住の利点最大化につながる知見を得る。これらは、生活者へ発信することで、多世帯居住が積極的に選択される住まい方となり、多世帯居住促進につながる知見にもなると考える。

### 注釈

注 1-5) 同居・隣居・近居のうち、他の世帯類型との比較が可能な同居を取り上げる。令和 2 年度国勢調査において、核家族以外の世帯類型のうち、親子同居は、核家族以外の世帯類型の過半である 57.8%を占めており、親子+他の親族同居の 6.6%と合わせると、64.5%となる。平成 7 年度からの経年で見ても、親子同居は経年で割合が減じているもの常に最多である。



### 3. 関連する既往研究

本研究では、親子居住について①物理的距離別の住まい方の比較、②同居における世帯間の距離、③同居における交流と相互扶助の観点で調査研究を行っているため、「同居・隣居・近居の住まい方の差や各々の特徴」「同居における世帯間の距離とその側面」「同居における相互扶助」の3種類に分類し、既往研究を紹介する。

#### 3-1. 同居・隣居・近居の住まい方の差や各々の特徴

大久保ら（1996）は、親子二世帯の居住形態を同居型、隣居型、別居型と区分し、隣居型を同居型と別居型の両者の長所を兼ね備えた居住形態として捉えている<sup>1-6) 1-8)</sup>。例えば、隣居居住者に対するアンケート調査結果によると<sup>1-6) 1-8)</sup>、隣居は同居よりも「独立性」が高まり互いに気を遣わなくて済むこと<sup>1-6)</sup>、別居よりも「協力や交流」が可能になること<sup>1-8)</sup>がメリットとして挙げられる。以上のことより、隣居は同居における過干渉などのデメリットを解消し、近居よりも協力・交流しやすい住まい方と捉えることもできよう。

一方で、隣居は同居と迷った末に選択される<sup>1-6)</sup>ことが示唆するように、親世帯と子世帯の住居における物理的距離の選択は容易ではないと推察される。生活者にとっては、住居の条件が異なる同居、隣居、近居やそこでの住まい方は未知のものであろう。

既往研究では、同居・隣居・近居のうち2者の住まい方の違いを実態把握により明らかにしたものは、同居と近居の比較を主として複数見受けられる。例えば、隣居は同居よりも、育児協力における留守時の孫の世話や送り迎えといった行為がなされることが少なく、それは隣居の空間や生活の共同の程度の低さに起因するとされている<sup>1-9)</sup>。また、先述のように、隣居は近居よりも「生活上の干渉性」が強まることが欠点であるとされている<sup>1-8)</sup>。

また、近居と同居の居住意向<sup>1-10)</sup>や交流、相互サポート<sup>1-9~1-10)</sup>を比較した既往研究においては、隣居は近居とまとめて分析されることが多く、隣居の特性は明らかにされていない。本研究では同居、隣居、近居それぞれについて実態を把握して比較する点で独自性がある。

---

#### 参考文献

- 1-6) 上和田茂、青木正夫、船越正啓、大久保健志：隣居型戸建て親子二世帯住宅に関する研究 - その1 敷地・住宅条件と隣居化の要因 - , 日本建築学会大会学術梗概集, pp. 191-192, 1996. 7
- 1-8) 大久保健志、青木正夫、上和田茂、船越正啓：隣居型戸建て親子二世帯住宅に関する研究 - その2 親子両世帯の生活交流と隣居の評価 - , 日本建築学会大会学術梗概集, pp. 193-194, 1996. 7
- 1-9) 松本吉彦、入沢敦子、添田昌志、任智顯：近居と同居における「孫教育」の比較 親子ネットワーク居住の実態調査（1）, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 219-220, 2010. 7
- 1-10) 金由羅、藤岡泰寛、加藤仁美、山口剛史、大原一興：郊外住宅団地における親族近居世帯の外出行動の特徴に関する研究 - 親族近居世帯間の相互支援に着目して - , 日本建築学会計画系論文集 第81卷第728号, pp. 2163-2172, 2016. 10

### 3-2. 同居における世帯間の距離とその側面

世帯間の距離に心理的・生活的・物理的な側面があることは、親子同居に関する既往研究からも見て取れる（図1-6）。心理的側面は、家庭内の権威<sup>1-13)</sup>やプライバシー意識<sup>1-14)</sup>などであり、二世帯同居の場合、子世帯妻のストレスが核家族よりも増すといったストレス要因の存在がある<sup>1-5)</sup>こと、息子夫婦同居よりも娘夫婦同居の方が融合志向が高い<sup>1-13～1-14)</sup>ことなどが示された。生活的側面は夕食や準備の共同<sup>1-9) 1-13～1-14)</sup>や育児協力<sup>1-14～1-15)</sup>、交流頻度や内容<sup>1-14)</sup>などであり、小学生以下の孫の世話をについて夕食融合の方が多いこと、息子夫婦よりも娘夫婦の方が育児・家事協力が進んでいる<sup>1-13～1-14)</sup>こと、親世帯の家事サポートにより妻の就業率が増加する<sup>1-16)</sup>ことなどが示された。物理的側面は、共用空間の種類や量<sup>1-12)</sup>、個人空間のニーズ<sup>1-13) 1-16)</sup>などであり、子世帯の続柄によって親世帯リビングと寝室の接続に変化があるなど平面構成へ影響が及ぶ<sup>1-12)</sup>ことなどが示されている。

先に挙げた既往研究の多くは、子世帯や親世帯の特定のライフステージにおける世帯間の距離の実態を明らかにしたものと言える。本研究では経年変化視点をふまえたライフステージによる世帯間の距離の違いに着目する点で独自性がある。

本研究では、世帯間の距離は心理的・生活的・物理的距離により構成されるものと定義する。また、心理的側面は気遣いの程度や一体感などの心理的距離、生活的側面は交流や生活支援などの生活的距離、物理的側面は空間の共用度などの物理的距離として取り扱う。

### 3-3. 同居における相互扶助

既往研究では、親子同居世帯における相互扶助に関して、親子同居における空間の共用や、家事や育児といった具体的な生活行為の共同が着目されており、それらには交流を伴うことが示唆されている。空間の共用は、相互扶助そのものとして捉えられることは少ないが、生活行為の共同<sup>1-13) 1-16)</sup>や気遣い<sup>1-16～1-17)</sup>の背景として重視されており、これらの知見は空

---

#### 参考文献

- 1-11) 大和礼子『オトナ親子の同居・近居・援助 夫婦の個人化と性別役割分業の間』学文社, 2017年
- 1-12) 近藤知奈美、松本吉彦、安達匡、鈴木毅、松原茂樹、木多道宏：生活空間の繋がり方の分類と同居家族の影響 - 二世帯住宅における親世帯に関する研究その2 - , 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1105-1106, 2014. 9
- 1-13) 任智顕、添田昌志、松本吉彦、入澤敦子：二世帯同居における家事協力・集約と居場所 親子ネットワーク居住の実態調査（2）, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画II, pp. 221-22, 2010. 9
- 1-14) 黒木美博、松本吉彦：息子夫婦・娘夫婦同居による育児・家事協力の違い 二世帯同居スタイル実態調査（2）, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画II, pp. 107-108, 2008. 9
- 1-15) 松本吉彦、伊藤香織、添田昌志、古賀繩子：共働き・親同居による生活リズムの違い 子育て家族の住まい方調査（2）, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画II, pp. 3-4, 2009. 8
- 1-16) 入沢敦子、大井絢子：二世帯住宅の住まい方と空間に関する研究（その2）, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 269-270, 1994. 9
- 1-17) 近藤知奈美、松本吉彦、安達匡、鈴木毅、松原茂樹、木多道宏：二世帯住宅の親世帯の生活空間に関する研究（建築計画）, 平成26年度日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系, pp. 49-52, 2014. 5

間の共用に向けた二世帯住宅提案につながるものである。例えば、夕食を一緒にとる場合は親世帯専用スペースや共用スペースで取ること<sup>1-13)</sup>、息子同居の場合は娘同居に比べ母と妻の共用に対する気遣いが高いこと<sup>1-16)</sup>、などである。

生活行為の共同については、家事育児協力の実態<sup>1-13～1-14) 1-9)</sup>に着目したものが多く、娘夫婦同居の方が両世帯の育児・家事協力が強いこと<sup>1-14)</sup>、同居の場合は孫の世話を日常的に協力していること<sup>1-14) 1-9)</sup>などが明らかにされている。これらは、相互扶助の方法を踏まえて二世帯住宅を計画する上で重要な知見である。

既往研究では、生活行為の共同による空間の共用や共用空間、空間や生活行為の共同による交流についての言及が進んでいる。一方で、収納・物品の共用やそれに伴う交流に着目したものはみうけられず、その実態が明らかにされていない。さらに、物理的側面を取り扱う既往研究（図1-6）では、共用する空間として居室は着目されているが、居室に付随し、物品の保存には欠かせない収納に着目したものは見られなかった。本研究は、収納・物品の共用やそれに伴う交流に着目し、空間や生活行為の共同・共用に関する知見を深めることにつながると考える。



図1-6 親子同居に関する既往研究のテーマ分布

---

**参考文献**

- 1-9) 入澤敦子、松本吉彦、添田昌志、任智顯：近居と同居における「孫教育」の比較 親子ネットワーク居住の実態調査（1），日本建築学会大会学術講演梗概集E-2, pp. 219-220, 2010.9
- 1-18) 入澤敦子、大井絢子：二世帯住宅の住まい方と空間に関する研究（その1）-二世帯住宅の親世帯の生活実態と住まいに関する調査-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1, pp. 241-242, 1993.9
- 1-19) 松本吉彦、黒木美博：親世帯の片親化と夕食の独立・融合 二世帯同居スタイル調査（1），日本建築学会大会学術講演梗概集E-2, pp. 105-106, 2008.9
- 1-20) 安達匡、松本吉彦、近藤知奈美、鈴木毅、松原茂樹、木多道宏：家族構成・交流状況別の親世帯の住要求に関する研究 -二世帯住宅における親世帯に関する研究 その1-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1103-1104, 2014.9
- 1-21) 井村理恵、松本吉彦、添田昌志：築30年二世帯住宅における在宅介護の実態 -二世帯住宅の長期的評価 その1-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1287-1288, 2015.9
- 1-22) 熊野勲：家族関係の変化と住まい～二世帯住宅と共働き家族住宅研究を通して～, URBAN HOUSING SCIENCE, pp. 32-39, 1994.2
- 1-23) 川嶋杏奈、佐藤将之、松本吉彦、安達匡：二世帯住宅における孫の居場所からみた祖父母と孫の関わり方についての考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1051-1052, 2015.9
- 1-24) 笹本剛、志田正男：二世帯住宅における住み方の評価に関する研究～親子二世帯の「生活の場の分離度」と「要介護者の有無」からの分析～, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-2, pp. 19-20, 2006.9
- 1-25) 入澤敦子、大井絢子：二世帯住宅の住まい方と空間に関する研究（その2）-都市部における親子同居住宅の世帯間分離に関する親世帯母・子世帯夫と妻の意識の違いと住まいの在り方-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E, pp. 269-270, 1994.9
- 1-26) 清水安子：二世帯住宅における平面構成の成り立ち 住宅金融公庫融資住宅の場合, 日本建築学会論文報告集, 第334号, pp. 165-173, 1983.12
- 1-27) 中野明：二世帯住宅の平面構成に関する研究, 平成7年度日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系, 第35巻, pp. 333-336
- 1-28) 西山邦子、岡河貢：住宅誌における二世帯住宅の傾向と特徴について, 日本建築学会中国支部研究報告集, 第27巻, pp. 577-580, 平成16年3月
- 1-29) 本間博文、砺波恵子：住宅誌による三世代同居家族の平面型の変遷に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第60巻, 第477号, pp. 53-61, 1995.11
- 1-30) 松本吉彦、入澤敦子、添田昌志：築30年二世帯住宅の親世帯部空きスペースの活用実態 -二世帯住宅の長期的評価 その3-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1349-1350, 2016.8
- 1-31) 塩野敬子、足立佑実、松本吉彦、庁志宮、小林秀樹：用途転用による二世帯住宅の活用実態の事例について -二世帯住宅における余剰空間の活用実態の関する研究 その1-, 日本建築学会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1169-1170, 2012.9
- 1-32) 松本吉彦、井村理恵、添田昌志：築30年二世帯住宅の孫世帯による継承の実態 -二世帯住宅の長期的評価 その2-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1289-1290, 2015.9
- 1-33) 松原小夜子、室雅子：未（非）婚成人と親との同居生活の実態と住要求 -成人同居期の住まい像を探る-, 住宅総合研究財团研究論文集, No.34, pp. 421-432, 2008
- 1-34) 下川美代子、松本吉彦：親子同居家族の関係性と住まいに関する研究 -同居家族に生じる「別々の家に住んでいる感覚」と自立意識、世帯間交流、建物分離度の実態 -, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp. 1151-1152, 2017.3

#### 4. 論文の構成

本論文は全5章からなる（図1-7）。その内容は、親子居住の全体をとらえるため物理的距離を広く対象とした章（第2章）、親子居住のうち同居に着目した章（第3章、第4章）に大別する。

第1章は、序論として、多世帯居住推進の必要性と、多世帯居住の種類や課題点、本研究の目的を述べる。また、本研究の観点から関連する既往研究を紹介する。

第2章は、親子居住を広く捉え、物理的距離が異なる同居・隣居・近居を検討段階の進め方、実際の住まい方、継続性について比較することで、生活者が親世帯と子世帯の物理的距離選択時に参考となる知見について述べる。

第3章、第4章では、多世帯居住の暮らし方や住まいのあり方を探る研究の第一歩として、多世帯居住のうち最も物理的距離が近く、親子同居の継続が難しいと考えられる、同居に着目する。

第3章では、同居する親世帯と子世帯の自立と共存のバランスのとり方につながる、暮らしを一緒にする程度である「世帯間の距離」に着目する。世帯間の距離の3つの暮らしの側面である心理的、生活的、物理的側面に対し、経年変化視点をふまえたライフステージによる変化を親世帯・子世帯それぞれの観点からとらえる。

第4章では、空間・生活行為の共同・共用に対する既往研究の知見を補完する視点として、親子同居世帯の相互扶助・交流につながる、収納と物品の共用に着目する。収納や物品の共用は共用自体が相互扶助であり、交流を伴うと筆者は考えている。相互扶助と交流の実態を把握し、円滑化に寄与する収納計画について考察する。

第5章では結論として、各章で得られた知見をまとめ、多世帯居住における親子居住検討時の検討事項や物理的距離選択、同居における世帯間の距離、収納計画について提言を行う。

親子居住			
	同居	隣居	近居
第2章	親世帯と子世帯の同居・隣居・近居	<ul style="list-style-type: none"> <li>・検討段階の進め方</li> <li>・実際の住まい方</li> <li>・継続性</li> </ul>	
第3章	同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心理的・生活的・物理的側面</li> <li>・親子比較</li> <li>・ライフステージによる経年変化</li> </ul>	
第4章	同居する親世帯と子世帯の収納・物品の共用による相互扶助・交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収納の共用</li> <li>・物品の共用</li> </ul>	
第5章	結論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子居住検討時の検討事項</li> <li>・親世帯と子世帯の物理的距離の選択方法</li> <li>・同居における世帯間の距離、収納計画</li> </ul>	

図1-7 本論文の構成

## 5. 用語の定義

本研究で使用する用語を以下に定義する。

### (1) 多世帯居住に共通する用語

- ・多世帯居住 : 独立した複数の世帯が近くに居住し、互いに行き来するなど、関係性をもって暮らす居住形態。
- ・親子居住 : 親世帯と子世帯の組み合わせで多世帯居住しているもの。
- ・同居 : 戸建て住宅にて同じ棟に、集合住宅にて一つの住戸に他世帯と居住すること。親世帯と成人している子、もしくは子の世帯が同居している場合、生計を別にしているか否かに関わらず、別世帯として扱う。
- ・隣居 : 同一敷地内の別棟もしくは隣り合う敷地の家に住む、もしくは集合住宅の隣接する住戸に住むこと。
- ・近居 : 親世帯と子世帯の住まいが別々で、日常的に行き来できる距離に住むこと。近居における距離の定義は研究により異なるが、本研究では、隣居との条件が近い近居として、交通手段に関わらず住宅間の行き来にかかる時間（以下、時間距離）が15分以内の近居を扱う。
- ・親子同居 : 親子居住のうち、親世帯と子世帯が同居しているもの。
- ・世帯間の距離 : 親世帯と子世帯が暮らしを一緒にする程度のこと。心理的、生活的、物理的といった3つの暮らしの側面があり、それぞれ、心理的距離、生活的距離、物理的距離として捉えられる。
- ・心理的距離 : 親世帯と子世帯の気遣いの程度や一体感のこと。
- ・生活的距離 : 親世帯と子世帯の間で行われる、交流や生活支援、相互扶助のこと。
- ・物理的距離 : 別居の場合は住居間の距離、同居の場合は空間の共用度などの住まいの分離度で表現される、親世帯と子世帯の距離のことである。
- ・住宅計画 : 親子居住の物理的距離の選択や、住居選択・住宅設計を含む、住宅検討～居住開始の各過程を指す。

### (2) 同居する住居に関する用語

- ・完全共用 : 同居のうち、寝室以外はすべて共用であるもの。
- ・部分共用 : 同居のうち、水回りや玄関、リビングなど、各々専用している空間・設備があるもの。
- ・完全分離 : 同居のうち、空間・設備を各々の世帯が専用しており、共用エリアがない（ただし、コネクティングドアで一部つながっているものも含む）もの。
- ・住まいの分離度 : 同居世帯との共用空間の多寡を示しており、共用空間の多い順に、「完全共用」「部分共用」「完全分離」に分類する。

- ・共用エリア : 同居世帯との共用空間として計画された領域のこと。
- ・専用エリア : 一世帯の専用空間として計画された領域のこと。



## 第2章

### 親世帯と子世帯の同居・隣居・近居

---

1. はじめに
2. 研究の方法
3. 回答者の属性
4. 居住開始時のエリア選択と提案世帯
5. 居住時の相互交流・扶助
6. 将来に対する見通しとその理由
7. まとめ



## 1. はじめに

1-1 で示したように、多世帯居住の選択肢として、同一住戸に住まう同居、隣接する住戸に住まう隣居、日常的に行き来できる距離に住まう近居が挙げられる。本章では、物理的距離を親世帯と子世帯の住居間の距離として扱う。物理的距離は、同居が最も近く、隣居、近居の順で遠くなる。隣居は同居と迷った末に選択される<sup>2-3)</sup>ことが示唆するように、生活者にとっては、住居の条件が異なる同居、隣居、近居やそこでの住まい方は未知のものであろう。そのため、適切な物理的距離の選択のためには、3者を比較して検討できる知見が必要だと筆者は考えている。その知見は、生活者の物理的距離の選択を円滑にし、ひいては、多世帯居住の推進につながると考えられる。

多世帯居住の物理的距離を検討する際には、検討段階の進め方、実際の住まい方、継続性といった、居住開始前から将来を見通した知見が役立つだろう。そこで、本章では、検討段階の進め方として居住開始時のエリア選択と提案世帯、実際の住まい方として居住時の相互交流・扶助、継続性として将来に対する見通しとその理由に着目し、同居、隣居、近居の3者間で比較する。これらの結果から、生活者が親世帯と子世帯の物理的距離選択時に参考となる知見を得ることを目的とする。

---

### 参考文献

- 2-3) 上和田茂、青木正夫、船越正啓、大久保健志：隣居型戸建て親子二世帯住宅に関する研究 - その1 敷地・住宅条件と隣居化の要因 - , 日本建築学会大会学術梗概集, pp. 191-192, 1996. 7

## 2. 研究の方法

### 2-1. アンケート調査の概要

多世帯居住をしている人を対象にWebアンケート調査を実施した。調査は2本実施し、調査①では他世帯と同居する世帯を対象とし、調査②では親族世帯と隣居、近居する世帯を対象とした。本章では、親世帯や既婚の子世帯と同居、隣居、時間距離15分以内の近居（以下、近居）をしている人を対象に分析を行う。調査概要を表2-1に、分析対象となるサンプルとサンプル数を表2-2に示す。

表2-1 調査概要

調査①	
調査方法	インテージ株式会社のアンケートパネルを使用したWebアンケート調査
調査対象	親世帯や子世帯もしくは親族・友人と同居する世帯（N=1270）
調査内容	属性、住居形態、同居を始めた経緯・理由、同居の暮らしの見通し、同居世帯との交流の実態と理想形、同居の暮らしの評価、介護・受け継ぎの意向、回答者とその配偶者の性格、価値観（計40問）
調査期間	事前調査 2019年12月17日～2019年12月24日 本調査 2019年12月25日～2019年12月27日

調査②	
調査方法	インテージ株式会社のアンケートパネルを使用したWebアンケート調査
調査対象	親族と隣居・近居しており、隣居・近居世帯と月に2～3回以上顔を合わせる機会のある人（N=2426）
調査内容	属性、住居形態、隣居世帯の敷地・共用部・行き来・住まい計画時の理由、隣居・近居を始めた経緯、隣居・近居の暮らしの見通し、隣居・近居世帯との交流の実態と理想形、隣居・近居の暮らしの評価、介護意向、回答者の性格、価値観（計46問）
調査期間	2020年6月23日～2020年6月29日

表2-2 対象サンプルとサンプル数

調査①		性別	サンプル数	
世帯カテゴリー	子世帯の家族形態			
親子同居	カップル <sup>*1</sup>	男性	111	889
		女性	113	
	ファミリー <sup>*2</sup>	男性	111	
	(末子:未就学)	女性	105	
	ファミリー <sup>*2</sup>	男性	109	
	(末子:小学生～高校生)	女性	107	
	ファミリー <sup>*2</sup>	男性	113	
	(末子:大学生～社会人)	女性	120	
			224	
			216	
調査②				
居住距離	世帯カテゴリー	性別	サンプル数	
隣居	親子	子世帯の家族形態		
		カップル <sup>*1</sup>	男性	545
			女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:未就学)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:小学生)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:中学生～高校生)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
近居 時間距離 15分以内	親子	(末子:大学生～社会人)	女性	600
		カップル <sup>*1</sup>	男性	
			女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:未就学)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:小学生)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
		(末子:中学生～高校生)	女性	
		ファミリー <sup>*2</sup>	男性	
*1 カップル:夫婦から成る世帯 *2 ファミリー:夫婦と子どもから成る世帯				

### 3. 回答者の属性

回答者の属性を以下に示す。

親世帯と子世帯の割合と平均年齢（図2-1）をみると、隣居で子世帯の回答が最も多く83.7%である。回答者の平均年齢は、同居、隣居、近居のうち、隣居は親世帯で最も高く63.8歳、子世帯で最も若く48.0歳である。割付により、子世帯のライフステージの分布は均一であり、同居、隣居、近居で類似である。

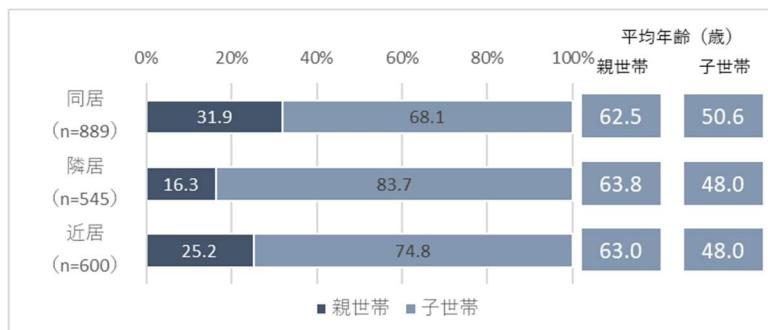


図2-1 親世帯と子世帯の割合と平均年齢

居住地（表2-3）は、関東、京阪神で分布に大きな差が見られた。関東では隣居が14.5%と、同居6.0%、近居7.2%よりも多い。京阪神では、近居が19.3%、隣居15.6%、同居8.4%と物理的距離が遠いほど多く分布している。

住居形態（表2-4）は、持ち家の割合がいずれの物理的距離でも最多で、同居、隣居で9割を超える、近居で8割程度である。同居、隣居は持ち家の中でも一戸建てがほとんどであるが、近居では持ち家のうち2割程度が集合住宅である。近居は同居や隣居に比べて賃貸住宅居住者の割合が高く23.2%である。

表2-3 居住地

	N	居住地分布 (%)									
		北海道	東北	関東	京浜 一都三県	北陸	東海	京阪神	中国	四国	九州
同居	889	3.5	10.6	6.0	19.0	8.0	11.5	8.4	5.4	3.0	6.0
隣居	545	2.4	5.3	14.5	17.8	7.3	16.3	15.6	6.8	5.9	8.1
近居	600	4.5	7.7	7.2	18.8	6.2	14.2	19.3	6	3.3	12.8

表2-4 住居形態

	N	住居形態の分布 (%)												
		持家	賃貸住宅						その他					
			一戸建て			集合住宅			新築 (マンションなど)	中古 (マンションなど)	一戸建て	集合住宅		
同居	889	92.9	88.9	75.3	7.9	5.8	4.0	3.1	0.9	7.1	2.7	2.8	0.3	1.2
隣居	545	92.5	91.0	79.6	3.3	8.1	1.5	1.3	0.2	7.5	4.0	2.2	0.2	1.1
近居	600	76.8	62.8	40.7	12.2	10.0	14.0	9.0	5.0	23.2	3.5	18.3	1.0	0.3

## 4. 居住開始時のエリア選択と提案世帯

本項では、居住開始時のエリア選択と同居、隣居、近居を提案した世帯から、集まって暮らす住まい方を始める際のきっかけづくりや場所選びの条件などを把握する。

### 4-1. エリア選択

居住開始時のエリア選択について、親世帯と子世帯いずれかの世帯に近い位置に移動したのか、全く新しいエリアに双方移り住んだのかを見る（図2-2）。「親世帯が住んでいるエリア」は同居で49.3%、隣居で60.7%、近居で40.8%と最多であり、隣居で特に多い。「子世帯が住んでいるエリア」は物理的距離が近くなるほど多く、同居で21.9%である。近居は「親世帯も子世帯も住んでいるエリア」が27.2%と他より多い。

多世帯居住は同居、隣居、近居いずれの物理的距離でも親世帯の家の近くに子世帯が住居を移し、今の住まい方を始めているケースが多い。しかし相対的に、隣居は親世帯のエリア選択傾向、同居は子世帯のエリア選択傾向、近居は新エリア選択傾向があるといえよう。それぞれの住居形態を踏まえると、隣居は、親世帯のエリア選択傾向に加え、持家一戸建ての割合が高い（表2-4）ことから、親世帯の土地内あるいは隣接地に住戸を建築して居住しているパターンが比較的多いと推察される。同居は、子世帯居住エリア選択傾向に加え、持家一戸建てが多い（表2-4）ことから、子世帯が呼び寄せ、建築した二世帯住宅が一定数存在すると考えられよう。近居は、新エリア選択傾向に加えて、賃貸住宅が多い（表4）ことから、賃貸住宅を活用して新しいエリアに住み替えるパターンもあると推察される。

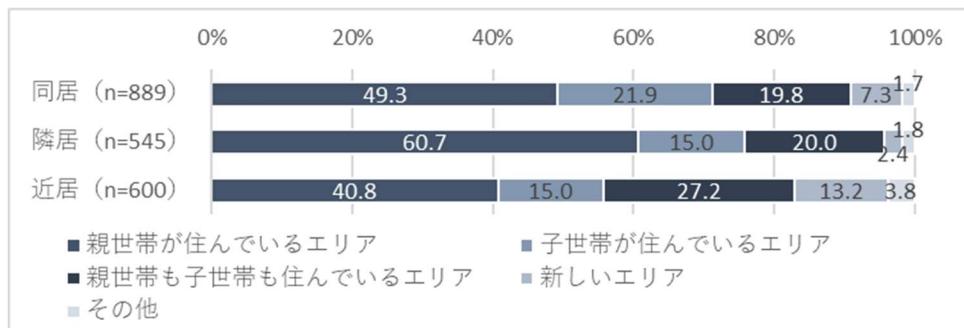


図2-2 エリア選択

表2-4 住居形態（再掲）

N		居住形態の分布 (%)												その他	
		持家	一戸建て						集合住宅			賃貸住宅			
			一戸建て			注文住宅	建売住宅	中古	集合住宅		新築 (マンションなど)	中古 (マンションなど)	一戸建て	集合住宅	
同居	889	92.9	88.9	75.3	7.9	5.8	4.0	3.1	0.9	7.1	2.7	2.8	0.3	1.2	
隣居	545	92.5	91.0	79.6	3.3	8.1	1.5	1.3	0.2	7.5	4.0	2.2	0.2	1.1	
近居	600	76.8	62.8	40.7	12.2	10.0	14.0	9.0	5.0	23.2	3.5	18.3	1.0	0.3	

#### 4-2. 提案した世帯

今の物理的距離での住まい方を提案した世帯（図2-3）は、物理的距離が遠くなるほど子世帯から提案した割合が高く、近居で34.3%である。特に近居は子世帯からの提案である割合が親世帯からの提案である割合の倍以上を占めている。近居は、後述する介護想定がされている割合が同居や隣居と比較して少ないとことから、子世帯が親世帯によるサポートを期待して子世帯主導で進んでいる状況が示唆される。賃貸住宅居住者が多く（表2-4）、居住開始の際の金銭的負担が少ないことも、子世帯からの提案が多い一因であろう。

親世帯から提案した割合は同居、近居では15%程度であるが、隣居は29.2%と他より多い。同居は「その他」が多いが、もともと同居していたとの回答がほとんどである。同居、近居は半数程度が自然に今の距離での住まい方を始めているが、隣居は、親世帯もしくは子世帯による提案型の方が多い。隣居は持家居住者が多い（表2-4）ことから、新たに住宅取得を要すと考えられ、住宅計画段階で親世帯もしくは子世帯から明確な提案があったと推察される。

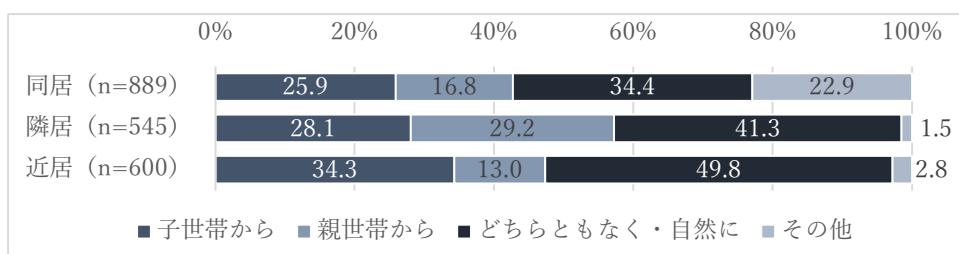


図2-3 今の物理的距離での住まい方を提案した世帯

提案した世帯別のエリア選択（図2-4）について、親世帯や子世帯から提案のあったケースに着目し、提案する世帯がエリア選択に影響するかをみる。いずれの提案であっても「親世帯が住んでいるエリア」を選択する割合が最も多い。同居、隣居、近居すべてで、親世帯から提案した場合は子世帯が提案した場合よりも「親世帯が住んでいるエリア」の選択割合が高くなっている。ただし、隣居は「親世帯が住んでいるエリア」の選択割合が親世帯から提案した場合は73.6%であるのに対して、子世帯から提案した場合は52.3%と大きく差がみられ、提案する世帯によって居住地選択が異なる傾向にある。親世帯が提案する場合は親世帯のエリアを選択し、子世帯が提案する場合は子世帯のエリアを選択しており、双方からの呼び寄せが行われていると推察される。

同居、隣居、近居いずれにおいても親世帯のエリア選択が中心ではあるものの、隣居は子世帯の提案で子世帯が住んでいるエリアを選択するなど、子世帯による呼び寄せが見られた。

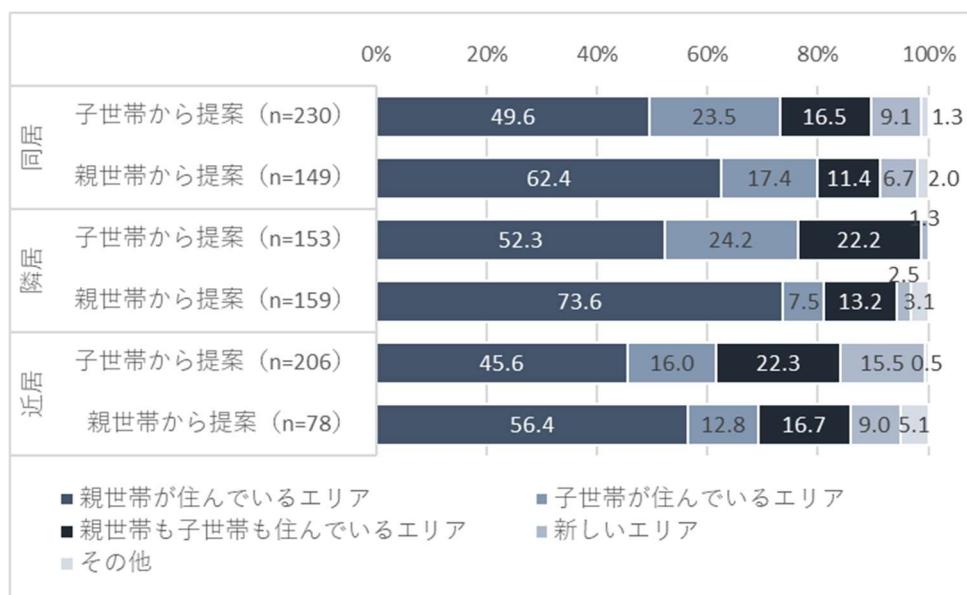


図2-4 提案した世帯別のエリア選択

## 5. 居住時の相互交流・扶助

本項では、親子居住をする中での相手世帯との関わりをみるために、親世帯と子世帯の交流や介護想定に着目する。親世帯と子世帯の交流内容として一緒にいる時に一緒にしていることを把握する。介護想定については、今の物理的距離での住まい方を始める際の介護想定を把握する。なぜなら、相互扶助の一つである介護についての想定の有無が親世帯と子世帯の関わり方に影響を及ぼすと考えられるからである。さらに、介護想定に関する親世帯と子世帯の合意の有無を把握するために話の有無についてみる。これにより、介護というセンシティブな会話ができる関係性を構築しているかを推察できると考える。

### 5-1. 一緒にいるときに一緒にしていること

一緒にいるときに一緒にしていること（図2-5）を見ると、「調理の下ごしらえをする」を除いたすべての項目で隣居が同居や近居よりも回答割合が小さい。隣居は同居や近居よりも一緒にしていることが少なく、親世帯と子世帯の生活行為の独立性が高いと言えよう。隣居は同居、近居よりも独立した住まい方を実現しうると考えられる。

団欒系では、「テレビや映画を見る」「食事する」は同居で隣居、近居よりも多く、それぞれ58.8%、75.3%である。同居は日常生活と一緒にしているといえよう。近居は「お茶をする（46.2%）」で同居や隣居より高い。食を目的として、あえて自宅から近居世帯の住居へ移動していることから、イベントごとと一緒にしていると推察される。

家事系では、食事に関連する日常的な家事である「調理の下ごしらえをする」は同居で多く、約2割である。家事サポートとも捉えられる「片付けや掃除をする」について、物理的距離別にみると同居で最も多く24.5%である。隣居、近居では「調理の下ごしらえをする」よりも回答割合が高く15%程度と約3倍である。同居は日常生活の共有、隣居や近居はサポートの観点で生活行為を共有していると推察される。

子ども系では、「子どもと遊ぶ」は同居、隣居よりも近居で多く27.8%であり、「子どもの世話をする」は隣居、近居よりも同居で最も多く2割を超える。同居と近居は子どもを中心としたサポートを受けていると考えられるが、中でも近居はイベント的な要素が強いといえる。

交流内容として、同居は日常行為を共有しており、幅広いサポートを受けていると言えるが、隣居は同居よりも独立性が高い。近居は、イベントを中心として交流していると考えられるといえよう。

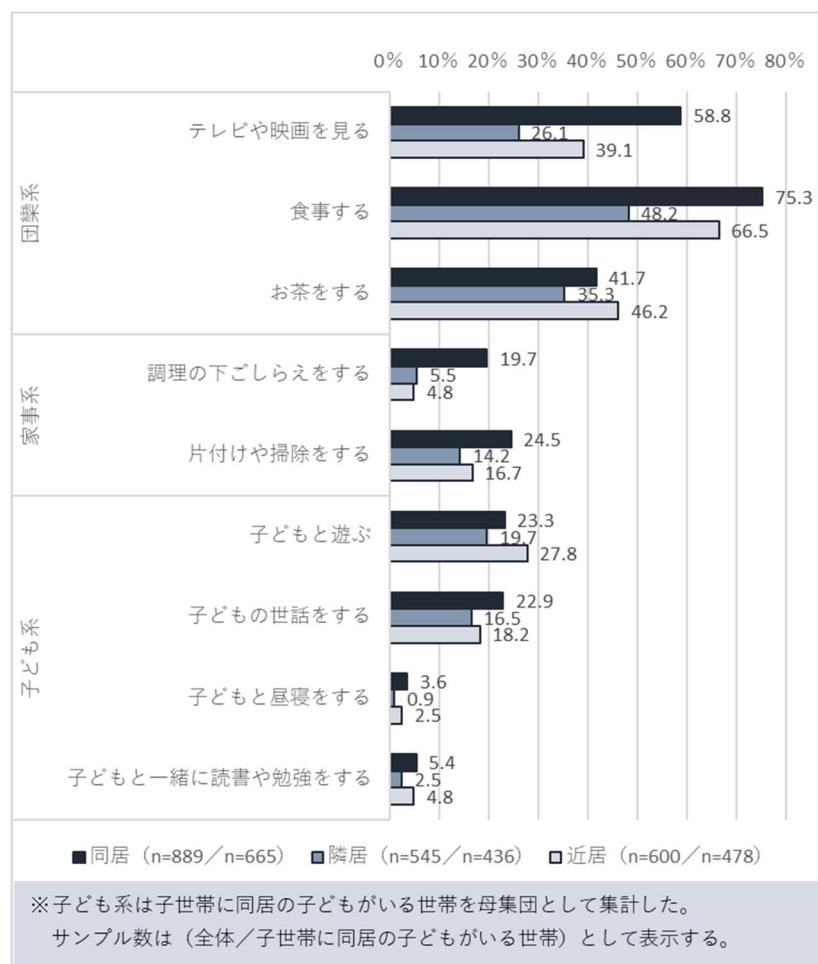


図2-5 一緒にいるときに一緒にしていること

## 5-2. 介護想定

今の物理的距離での住まい方を始めた際の介護想定（図2-6）についてみると、物理的距離が近いほど介護を想定しており、同居で59.0%、隣居で56.0%、近居で42.5%である。物理的距離が開くほど、介護想定がされていないことが分かる。親世帯と子世帯の認識をすり合わせる機会の有無を把握するために介護想定について話をしている割合をみると、同居で39.2%、隣居で24.8%、近居で22.7%と、同居で多い。同居は日常行為を一緒にしていることから、対話が多く生まれている結果であるといえよう。

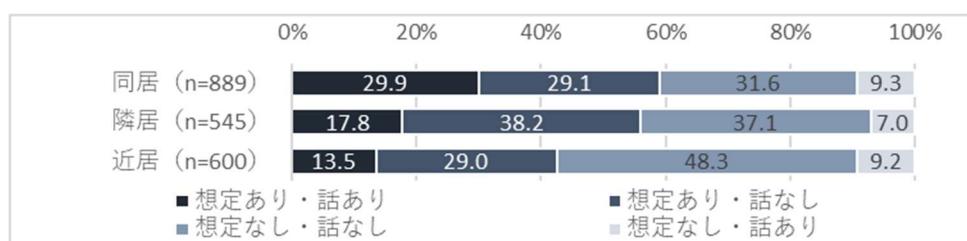


図2-6 今の物理的距離での住まい方を始めた際の介護想定

## 6. 将来に対する見通しとその理由

本章では、一時的な居住形態ではなく、長期間存在する住まい方としての安定性があるかを見るため、今の物理的距離での住まい方を続ける想定期間やその理由について述べる。

### 6-1. 今の住まい方を続ける見通しとその理由

今の物理的距離での住まい方を続ける想定期間（図2-7）は同居、隣居、近居で差は見られなかった。「期間はわからないが、できるだけ長く」と回答した人に着目してその理由を見ると（図2-8）、「自分もしくは同居・隣居・近居世帯が生きている間は」は物理的距離が近いほど回答割合が高く、介護想定と同様の傾向が見られた。「関係が良好な間は」は同居で多く27.3%であり、隣居、近居の4倍程度である。同居では、同居世帯との関係性の維持が隣居、近居よりも重要であることが示唆された。隣居と近居で聴取した「家を移る予定がないから」<sup>注2-1)</sup>では隣居で54.0%と、近居よりも高い。隣居で住居を変更する想定がされていないのは、持家居住者が多い（表2-4）ことからも、所有していた土地や住宅に居住している<sup>注2-2)</sup>ことが影響していると推察される。

隣居は同居、近居と今の住まい方を続ける想定期間は同様であるが、その理由で差が見られた。隣居は家を移る予定はなく、同居は同居世帯との関係性次第である。隣居は世帯間の関係性に依らず現在の住宅に永住する想定であるため、隣居は同居よりも継続性が高い。近居は隣居よりも賃貸住宅居住者が多く（表2-4）、住居を変更する想定があることから、隣居は近居よりも継続性があると考えられる。以上のことから、同居、隣居、近居の中で隣居が最も継続性が高い住まい方であると考えられる。

#### 注釈

注2-1) 調査①において、その他の回答における自由記述として「後継ぎ」や「引っ越す予定がない」が見られたが、選択肢として設定しておらず、同居については「家を移る予定がないから」を数値で表すことはできない。

注2-2) 今の距離で暮らし始めた理由として、隣居と近居で聴取した「土地や家があったため」は隣居で44.3%、近居で15.9%であり、隣居は、元々所有している土地内に住宅を建築していると考えられる。

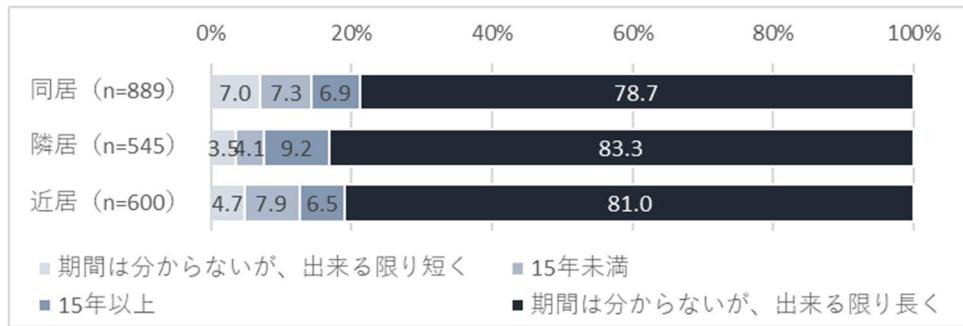


図2-7 今の物理的距離での住まい方を続ける想定期間

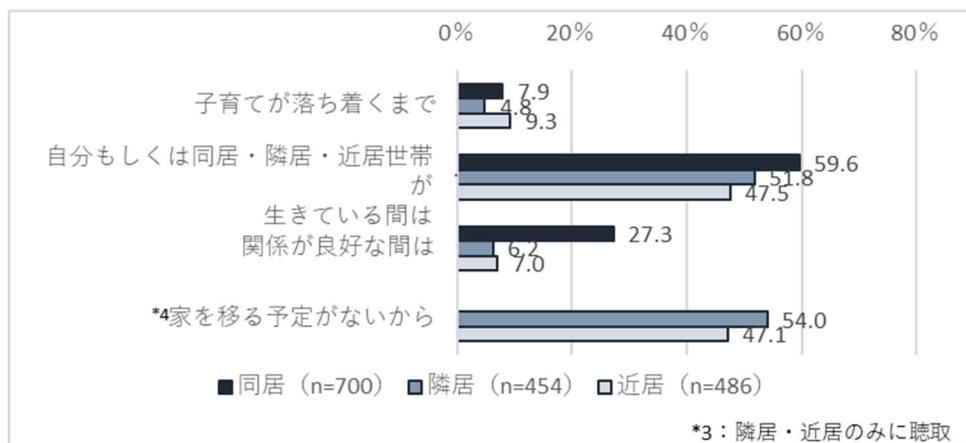


図2-8 今の物理的距離での住まい方を続ける想定期間の理由

表2-4 住居形態（再掲）

N			居住形態の分布 (%)												その他	
			持家	一戸建て			集合住宅			賃貸住宅			一戸建て			
				注文住宅	建売住宅	中古	新築 (マンションなど)	中古 (マンションなど)		マンション・アパート・公園など	社宅・寮など		マンション・アパート・公園など	社宅・寮など		
同居	889	92.9	88.9	75.3	7.9	5.8	4.0	3.1	0.9	7.1	2.7	2.8	0.3	1.2		
隣居	545	92.5	91.0	79.6	3.3	8.1	1.5	1.3	0.2	7.5	4.0	2.2	0.2	1.1		
近居	600	76.8	62.8	40.7	12.2	10.0	14.0	9.0	5.0	23.2	3.5	18.3	1.0	0.3		

## 7. まとめ

本章では、同居、隣居、近居における居住開始時のエリア選択と提案世帯、居住時の相互交流・扶助、将来に対する見通しとその理由について、3者との差を明らかにした。それぞれの特徴や傾向を以下にまとめます。

### (1) 居住開始時のエリア選択と提案世帯

いずれの物理的距離も親世帯が住んでいるエリアを選択しており、場所選びは親世帯を中心とした選択になっているといえる。今の物理的距離での住まい方の提案は同居や近居で子世帯の方が多い、隣居で子世帯と親世帯が同程度である。提案世帯別に居住開始時のエリア選択をみると、隣居は子世帯の提案で子世帯が住んでいるエリアを選択するなど、子世帯による呼び寄せが見られた。

### (2) 居住時の相互交流・扶助

同居は日常行為を共有しており、隣居は同居、近居よりも独立性が高く、近居はイベントを中心とした交流が比較的多い傾向が確認された。介護想定については物理的距離が開くほど介護想定がされておらず、親世帯と子世帯の介護想定に関する合意は特に同居でされている。

### (3) 将来に対する見通しとその理由

今の物理的距離での住まい方を続ける想定期間は同居、隣居、近居すべてでできる限り長く続ける想定であった。ただその理由は同居と隣居、近居で異なり、同居は関係が良好な間であるが、隣居と近居では住宅取得の観点から転居理由がないことが挙げられる。隣居は世帯間の関係性に依らず、現在の住宅に永住する想定であるため、近居や同居よりも継続性が高いと考えられる。

以上の結果を踏まえて、生活者が物理的距離選択時のヒントになるように、同居・隣居・近居の特徴や注意点を述べる。

- a) 同居は、日常的な交流のある住まい方であり、介護想定が必要になるだろう。継続性のある住まい方にするためには、世帯間の良好な関係の構築が重要になるだろう。相手世帯と日常的な交流が生じやすいことから、相手世帯との関係性が良好な場合に適していると言える。
- b) 隣居は、エリア選択の制約があるが、親世帯と子世帯の独立した住まい方が可能である。また、世帯間の関係に依らず自宅に住み続けられる継続性がある住まい方であるといえる。土地取得の余裕があり、相互扶助を見据えつつ、相手世帯と一定の距離を保ちながら居住したい場合に適していると考えられる。

- c) 近居は、賃貸住宅で実現しやすいため、親世帯と子世帯それぞれの負担が少ない形で始められる住まい方であると言える。交流についてはイベントごとが中心であるが、子世帯が親世帯のサポートを期待していることも特徴である。子世帯サポートを含むイベント的な交流を求めている場合に適しているといえよう。

## 第3章

### 同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離

---

1. はじめに
2. 研究方法
3. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係
4. 親子・末子年齢別の心理的距離、生活的距離の実態と関連性
5. 生活シーンから見る生活的距離と心理的距離
6. まとめ



## 1. はじめに

本章では、多世帯居住の暮らし方や住まいのあり方を探る研究の第一歩として、多世帯居住の同居に着目し、そのうち、最も占める割合が高い親子同居に着目する。親世帯と子世帯の同居では、元々独立して暮らしを営んでいた世帯どうしが暮らしを一緒にしていくことになる。その際、親世帯と子世帯は、良好な関係での同居の暮らしを形成するため、暮らしを一緒にする程度をすり合わせて調整しながら、自立と共存のバランスを取っていると推察される。暮らしを一緒にする程度は多様な側面により構成されており、総合的に捉える必要があるものである。本稿では、暮らしを一緒にする程度について実態を把握し、構成を明らかにするため、暮らしを一緒にする程度を「世帯間の距離」と定義し、着目する。

世帯間の距離には心理的、生活的、物理的といった3つの暮らしの側面があり、それぞれ、交流や生活支援などの生活的距離、空間の共用度などの物理的距離、気遣いの程度や一体感などの心理的距離と捉えられる。親世帯と子世帯が同居する住まいのあり方を検討するにあたり、親世帯と子世帯の世帯間の距離に着目する必要があると筆者は考えている。

本章では経年変化視点をふまえたライフステージによる世帯間の距離の違いに着目する。なぜなら、親子同居では、同居開始時から経年により、子世帯のライフステージや家族形態が大きく変化するため、長期間の二世帯同居に耐えられる住まいとするためには、ライフステージによる変化を把握することが重要だと考えたためである。また、息子同居では母と妻の間で部屋の分離希望の割合に差がある<sup>3-1)</sup>など、親世帯と子世帯の認識のずれが既往研究で指摘されていることから、親世帯と子世帯、双方の観点からの分析が必要である。

本稿の目的は、世帯間の距離を構成する心理的距離、生活的距離、物理的距離の3者の関係を明らかにすること、親子同居における子世帯のライフステージごとの、親世帯側、子世帯側それぞれからみた心理的距離・生活的距離を把握することである。それは、適切な世帯間の距離を実現する住まいにおいて配慮が必要な点を明らかにするための基礎的な知見になると考えられる。

---

### 参考文献

- 3-1) 入沢敦子、大井絢子：二世帯住宅の住まい方と空間に関する研究（その2），日本建築学会大会学術講演梗概集，建築計画，pp. 269-270, 1994.9

## 2. 研究方法

アンケート調査にて定量的に親子同居における3つの距離の全体像・実態を把握した後、インタビュー調査により定性的に生活シーンにおける行為と気持ちから心理的距離と生活的距離の関係を見た。

本章の構成は以下のとおりである。本項では、研究方法、調査概要、分析対象を示す。3項以降の各項の構成、対象とする距離と使用する調査結果を図3-1に示す。3項では、アンケート調査結果を用いて、世帯間の距離を構成する心理的距離、生活的距離、物理的距離の概念と3者の関係について整理する。4項では、アンケート調査結果から、完全共用型の二世帯同居世帯を対象として物理的距離の影響を除いた上で、心理的距離、生活的距離それぞれを示唆する要素について実態を把握する。親世帯と子世帯の差、ライフステージによる差について考察する。物理的距離は親世帯と子世帯の別、ライフステージによる影響を受けない一方、心理的距離、生活的距離に影響を与えるため、物理的距離を固定することで、心理的距離、生活的距離の考察に注力した。5項では、インタビュー調査結果より、心理的距離と生活的距離の関係を生活シーンから考察する。6項ではまとめとして、世帯間の距離を構成する心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係や、ライフステージごとの親世帯と子世帯の心理的距離・生活的距離についての考察と、世帯間の適切な距離を実現する住まいにおいて配慮が必要な点を示す。

	心理的距離	生活的距離	物理的距離	使用する調査結果
3. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係		概念・関係性整理		
4. 親子・末子年齢別の心理的距離、生活的距離の実態と関係性	4-1 ・実態 ・親子比較 ・ライフステージ比較	4-2 ・実態 ・親子比較 ・ライフステージ比較		アンケート調査
5. 生活シーンから見る生活的距離と心理的距離	・生活シーン ・生活実態と行為に関係する気持ち			インタビュー調査
6. まとめ	・親世帯と子世帯の世帯間の距離についての考察 ・世帯間の適切な世帯間の距離を実現する住まいにおいて配慮が必要な点			

図3-1 3章の構成

### 2-1. アンケート調査の調査概要と回答者属性

本節では親世帯や子世帯と同居する二世帯同居家族に対して、子世帯の家族形態別の傾向を定量的に把握するため、可能な限り最大の標本にアクセスするために、Web調査を採用した。

### (1) 調査概要

親世帯や子世帯と同居する全国の二世帯同居家族を対象に、暮らしの実態と意識に関するアンケート調査を実施した(インテージ株式会社アンケートパネルを使用したWeb調査)。3万名を対象にした事前調査により、親子同居、親子以外の親族同居、親族以外の同居をしている人を抽出した。抽出したそれぞれの母集団から、親子同居は子世帯の家族形態別にサンプル数を割り付け、親世帯と同居する子世帯(以下、子世帯)、子世帯と同居する親世帯(以下、親世帯)の回答者数がなるべく均等になるように、各200件のサンプル数を目安に本調査を行った。調査概要を以下に示す。

- ・調査対象：多世帯で同居しており、同居世帯と一定以上の交流(月に2~3回以上顔を合わせる機会)のある全国の男女(N=1263)。  
世帯カテゴリーと回収サンプル数を表3-1に示す。
- ・調査内容：属性、住居形態、同居を始めた経緯・理由、同居の暮らしの見通し、同居世帯との交流の実態と理想形、同居の暮らしの評価、介護・受け継ぎの意向、回答者と回答者の配偶者の性格、価値観(計40問)
- ・調査期間：事前調査 2019年12月17日～2019年12月24日  
本調査 2019年12月25日～2019年12月27日

回答者を子世帯の末子年齢で区切ることにより、同じくらいの年齢の孫もしくは子と同居している親世帯と子世帯を抽出し、ライフステージによる変化を親世帯と子世帯で比較できるように分類した。本稿では、子世帯の家族形態がファミリーの世帯(子世帯、親世帯それぞれの、ファミリー(未就学)(以下、未就学)、ファミリー(小中高)(以下、小中高)、ファミリー(大学生、社会人)(以下、大学生、社会人)を足してN=663)を対象に分析を行う(図3-1)。

なお、本稿では、アンケート調査結果の分析において、心理的距離・生活的距離の関係性については、相関分析(Pearsonの積率相関分析)により分析している。物理的距離と心理的距離・生活的距離の関係性、本稿で定める世帯カテゴリーごとの詳細な特徴をクロス集計を用いて整理し、カテゴリー間の有意差を検証するために、感覚尺度ではPearsonのカイ二乗検定および調整済み残差分析を用いた。なお、標本数が少なくPearsonのカイ二乗検定ではコクランの定理に抵触する場合は、Fisherの正確性検定を用いて有意差を分析した。検定の結果、有意差のある項目に限り、図表内に示している。

---

### 参考文献

- 3-2) Cohen, J『Statistical Power Analysis for the Behavioral Science, 2nd edn』Lawrence Erlbaum Associates, 1988

表3-1 世帯カテゴリーとサンプル数

	世帯カテゴリー	性別	サンプル数		
			子世帯の家族形態	親子区分	
親子同居	シングル*	子世帯	男性	50	104
		子世帯	女性	54	
		親世帯	男性	55	107
		親世帯	女性	52	
	カップル**	子世帯	男性	84	179
		子世帯	女性	95	
		親世帯	男性	26	41
		親世帯	女性	15	
親子同居	ファミリー*** (末子:未就学)	子世帯	男性	57	108
		子世帯	女性	51	
		親世帯	男性	53	107
		親世帯	女性	54	
	ファミリー*** (末子:小学生～高校生)	子世帯	男性	53	106
		子世帯	女性	53	
		親世帯	男性	55	109
		親世帯	女性	54	
親子同居	ファミリー*** (末子:大学生～社会人)	子世帯	男性	105	211
		子世帯	女性	106	
		親世帯	男性	8	22
		親世帯	女性	14	
	親子以外の親族同居	子世帯	男性	53	102
		子世帯	女性	49	
		親世帯	男性	31	67
		親世帯	女性	36	
	親族以外の同居 ※同棲カップルは除く				1263

\*シングル：単独世帯 \*\*カップル：夫婦から成る世帯 \*\*\*ファミリー：夫婦と子どもから成る世帯

■■■：本稿における分析対象

## (2) 回答者属性

回答者の年齢（表3-2）は、末子年齢に合わせて平均年齢も分布も、高齢側へ推移する傾向がある。

居住地は（表3-3）、関東地方が最多で約3割、次いで中部地方が約2割である。2015年度の国勢調査結果の親子同居世帯の地域居住の分布と比較すると、本調査回答者は関東地方で多く、中部地方で少ないが、他エリアでは分布に差はない。

住居形態は（表3-4）、「持家／一戸建て」が最も多く8割を超えている。

延床面積を加重平均でみると（表3-5）、全体では137.8 m<sup>2</sup>である。子世帯は「わからない」と把握していない割合が約4割である。孫の末子年齢別にみても傾向は特に見られない。住居形態別にみると、「持家／一戸建て」が最も広く加重平均で143.4 m<sup>2</sup>、集合住宅や賃貸は100 m<sup>2</sup>よりも狭い。住まいの分離度別でみると、分離度が高いほど延床面積が広い傾向があった。

表3-2 回答者の年齢

1段目 度数 2段目 横%		TOTAL	~20	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70~74	75~	平均年齢
全体	1263 100.0	0 0.0	2 0.3	3 0.5	14 2.1	54 8.1	56 8.4	84 12.7	112 16.9	110 16.9	111 16.7	117 17.6	0 0.0	0 0.0	53.8	
子世帯の家族形態																
未就学	108 100.0	0 0.0	2 1.9	2 1.9	12 11.1	42 38.9	24 22.2	20 18.5	3 2.8	1 0.9	2 1.9	0 0.0	0 0.0	0 0.0	39.9	
小中高	106 100.0	0 0.0	0 0.0	1 0.9	2 1.9	11 10.4	24 22.6	29 27.4	27 25.5	9 8.5	2 1.9	1 0.9	0 0.0	0 0.0	47.0	
大学生・社会人	211 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.5	1 3.3	7 14.2	30 33.2	70 28.4	60 15.6	33 4.7	10 0.0	0 0.0	0 0.0	54.5	
親世帯の家族形態																
未就学	107 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.9	4 3.7	11 10.3	25 23.4	35 32.7	31 29.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	60.7	
小中高	109 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.9	1 1.1	35 10.1	62 32.1	0 56.9	0 0.0	0 0.0	64.2
大学生・社会人	22 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.0	4 4.5	4 0.0	13 18.2	13 59.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	63.7

凡例： ■ 全体+15Pt以上 ■ 全体+10Pt以上 ■ 全体+5Pt以上 ■ 全体-5Pt以下 ■ 全体-10Pt以下

表3-3 居住地

2015年度国勢調査		本調査		1段目 度数 2段目 横%	TOTAL	持家／ 一戸建て	集合住宅	持家／ 一戸建て	集合住宅	賃貸／ 集合住宅	賃貸／ 集合住宅	その他
	N	%	N	%								
全国	3149508	100.0	663	100.0	663	583	28	22	22	3.3	3.3	8
北海道	84905	2.7	22	3.3	1000	87.9	4.2	3.3	3.3	3.3	3.3	1.2
東北地方	443847	14.1	79	11.9	108	95	4	5	2	2	1.9	1.9
関東地方	737619	23.4	219	33.0	1000	88.0	3.7	4.6	4.6	1.9	1.9	1.9
中部地方	821716	26.1	139	21.0	106	93	3	4	5	4.7	4.7	0.9
近畿地方	428551	13.6	77	11.6	100	87.7	2.8	3.8	3.8	4.7	4.7	0.9
中国地方	213254	6.8	46	6.9	211	195	3	4	6	2.8	2.8	3
四国地方	102974	3.3	30	4.5	100	92.4	1.4	1.9	1.9	2.8	2.8	1.4
九州地方	316642	10.1	51	7.7	107	93	8	3	3	0	0	0

表3-4 居住形態

1段目 度数 2段目 横%		TOTAL	持家／ 一戸建て	集合住宅	持家／ 一戸建て	集合住宅	賃貸／ 集合住宅	賃貸／ 集合住宅	その他
全般	子世帯の家族形態								
子世帯	未就学	108	95	88.0	3.7	4.6	1.9	1.9	1.9
小中高	106	219	193	90.0	9.0	10.0	10.0	10.0	10.0
大学生・社会人	211	139	100	87.7	2.8	3.8	4.7	4.7	4.7
親世帯	未就学	211	195	3	4	6	2.8	2.8	2.8
小中高	200	92.4	1.4	1.9	1.9	2.8	2.8	2.8	2.8
大学生・社会人	22	19	1	1	1	4.5	4.5	4.5	4.5

表3-5 延べ床面積

1段目 段数	2段目 横%	TOTAL	40m <sup>2</sup> 未満 (約12坪未満)	40 (約12坪未満)	50 ~60m <sup>2</sup> 未満 (約15~18坪)	60 ~70m <sup>2</sup> 未満 (約18~21坪)	70 ~80m <sup>2</sup> 未満 (約21~24坪)	80 ~90m <sup>2</sup> 未満 (約24~27坪)	90 ~100m <sup>2</sup> 未満 (約27~30坪)	100 ~120m <sup>2</sup> 未満 (約30~36坪)	120 ~150m <sup>2</sup> 未満 (約45~60坪)	150 ~200m <sup>2</sup> 未満 (約60坪以上)	200m <sup>2</sup> 以上 (約60坪以上)	わからぬ い	加重平均 (m <sup>2</sup> )			
全體		663 100.0	2 0.3	11 1.7	9 1.4	21 3.2	21 3.2	22 3.3	44 6.6	63 9.5	77 11.6	124 18.7	84 18.7	12.7	18.5 27.9	137.8		
子世帯の家族形態																		
子世帯 未就学		108 100.0	0 0.0	3 2.8	3 2.8	6.5 5.0	7 5	3 1	1 0.9	2.8 2.8	9 8.3	9 9.3	10 12.0	13 10.2	4.5 41.7	129.6		
子世帯 小中高		106 100.0	1 0.9	2 1.9	4 3.8	1 0.9	5 4.7	1 0.9	5 4.7	7 6.6	7 9.4	10 17.9	19 17.9	6 5.7	4.5 42.5	131.1		
子世帯 大学生・社会人		211 100.0	1 0.5	4 1.9	1 0.5	7 3.3	2 0.9	5 2.4	13 6.2	20 9.5	23 10.9	23 20.9	44 10.9	31 20.9	60 14.7	60 28.4	144.0	
子世帯の家族形態																		
親世帯 未就学		107 100.0	0 0.0	2 1.9	1 0.9	4 3.7	4 3.7	3 2.8	3 2.8	11 10.3	8 7.5	8 12.1	13 28.0	30 14.0	15 14.0	16 15.0	141.6	
親世帯 小中高		109 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 1.8	6 5.5	11 10.1	9 8.3	15 13.8	19 17.4	19 15.6	17 16.5	17 16.5	18 11.0	12 11.0	135.7	
親世帯 大学生・社会人		22 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.5	1 0.5	3 13.6	4 18.2	4 9.1	2 4.5	1 4.5	1 13.6	3 31.8	7 31.8	128.7
住居形態																		
住居 持家／一戸建て		583 100.0	2 0.3	9 1.5	9 1.5	11 1.9	10 1.7	9 1.5	9 1.5	43 7.4	58 9.9	73 12.5	123 21.1	83 14.2	83 14.2	153 26.2	153 26.2	143.4
住居 持家／集合住宅		28 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	6 21.4	8 21.4	8 28.6	1 3.6	1 3.6	2 7.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	4 14.3	83.1	
住居 賃貸／一戸建て		22 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.5	4 4.5	4 4.5	4 18.2	0 0.0	1 4.5	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	14 63.6	95.6	
住居 賃貸／集合住宅		22 100.0	0 0.0	2 9.1	0 0.0	3 13.6	4 18.2	1 4.5	1 4.5	0 0.0	2 9.1	1 4.5	0 0.0	0 0.0	0 0.0	9 40.9	9 40.9	78.8
その他		8 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 12.5	1 12.5	0 0.0	1 12.5	0 0.0	1 62.5	148.3	
分離度																		
完全共用 <sup>(注1)</sup>		430 100.0	2 0.5	7 1.6	5 1.2	19 4.4	15 3.5	15 3.5	15 7.9	34 9	46 5.2	73 12.1	73 17.0	39 17.0	123 9.1	123 28.6	130.9	
部分共用 <sup>(注1)</sup>		172 100.0	0 0.0	3 1.7	3 1.7	0 0.0	5 2.9	3 1.7	5 2.9	9 7.6	13 12.8	22 21.5	37 18.0	31 18.0	46 26.7	46 26.7	149.7	
完全分離 <sup>(注1)</sup>		61 100.0	0 0.0	1 1.6	1 1.6	2 3.3	1 1.6	1 1.6	1 1.6	4 6.6	4 6.6	3 6.6	14 4.9	14 23.0	14 23.0	16 26.2	151.9	

※加重平均は40m<sup>2</sup>以下を40m<sup>2</sup>、200m<sup>2</sup>以上は200m<sup>2</sup>、他は選択肢の中央値として計算

凡例：

■ 全体+15Pt以上■ 全体+10Pt以上■ 全体+5Pt以上■ 全体+1Pt以上■ 全体-10Pt以下

## 2-2. インタビュー調査の概要

心理的距離と生活的距離の関係を定性的にみるため、親世帯や子世帯と同居する二世帯同居世帯の女性を対象に、生活シーンにおける行為や気持ちに関するインタビュー調査を実施した。調査概要を以下にまとめた。

- ・調査方法 : インタビュー調査
- ・調査対象 : 親世帯または子世帯と同居する、以下の条件を満たす女性 (N=8)。  
対象者プロフィールを（表3-6）に示す。
  - ・関西（大阪、京都、兵庫、奈良）または関東（東京、神奈川、埼玉、千葉）在住
  - ・戸建て二世帯住宅居住
  - ・親世帯から見て孫がいる、同居目的が「親の介護」でない
  - ・二世帯同居を始めてから3年～10年程度
- ・リクルート方法 : 機縁法
- ・調査内容 : 二世帯同居の経緯、二世帯間でのエリア分けと空間の使い方、人間関係、二世帯同居のメリット・デメリット
- ・調査期間 : 2019年6月29日、2019年7月6日

表3-6 インタビュー対象者プロフィール

No.	住まいの分離度	住居情報		家族形態				年齢	
		築年数	同居期間	世帯区分	続柄	同居家族			
						親世帯	子世帯		
1	完全共用	10年	10年	子世帯	息子世帯	母	妻、夫、孫2人（中学生）	41歳	
2	完全共用	10年	10年	子世帯	娘世帯	母、父	妻、夫、孫2人（中学生、小学生）	43歳	
3	完全共用	25年	4年くらい	親世帯	息子世帯	母、父	妻、夫、孫1人（未就学）	68歳	
4	完全共用	8年	6年6か月	親世帯	娘世帯	母	妻、夫、孫2人（小学生、未就学）	64歳	
5	完全分離	10年	10年	子世帯	息子世帯	母、父	妻、夫、子1人（大学生）	50歳	
6	完全分離	10年	10年	子世帯	娘世帯	母	妻、夫、子2人（大学生）	52歳	
7	完全分離	23年	7年半	親世帯	息子世帯	母、父	妻、夫、孫2人（小学生、未就学）	70歳	
8	完全分離	38年	6年	親世帯	娘世帯	母、父、娘	妻、夫、孫2人（中学生、小学生）	65歳	

※同居家族のうち、被験者本人は太字とする。

### 3. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係

本項では、同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離を構成する、心理的距離、生活的距離、物理的距離について、それぞれの概念を整理し、アンケート調査結果から3者との関係性を分析、整理する。

#### 3-1. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の定義と指標

心理的距離、生活的距離、物理的距離の定義と示唆する項目を表3-7に示す。心理的距離が近い、つまり、近い関係性にあると感じるほど、相手への気遣いが減少すると考え、気遣いの程度を指標とする。気を使わない方が同居世帯との関係性が良く、同居の暮らしの満足度が高くなると考えられる<sup>注3-1)</sup>。生活的距離が近い、つまり、生活行為を一緒にする程度が多いと、一緒に過ごす時間の割合も高くなると考え、同居世帯と一部もしくは全員で一緒に過ごす時間の割合を指標とする。物理的距離が近い、つまり共用部分が多いほど住まいの分離度が低くなると考え、住まいの分離度を指標とする。これらの指標を用いて、3者の関係を整理する。

表3-7 心理的距離・生活的距離・物理的距離の定義と示唆する項目

定義		本稿で対象とする項目	選択肢	
心理的距離	気遣いの程度や 一体感	気遣いの程度	4段階	1. 気を遣わない、2. やや気を遣う、 3. あまり気を遣わない、4. 気を遣わない
		気遣いのタイミング	複数回答	
生活的距離	交流や生活支援	一緒に過ごす時間の割合	5段階	1. いつも一緒にいる、2. 一緒に別々が7:3くらい、 3. 一緒に別々が半々くらい、 4. 一緒に別々が3:7くらい、5. いつも別々にいる
		一緒に過ごす時間の割合の理想	5段階	1. いつも一緒にいる、2. 一緒に別々が7:3くらい、 3. 一緒に別々が半々くらい、 4. 一緒に別々が3:7くらい、5. いつも別々にいる
		一緒にいるときに一緒にしていること	複数回答	
物理的距離	空間の共用度	住まいの分離度	3段階	1. 完全共用、2. 部分共用、3. 完全分離

#### 注釈

注3-1) 本章では、心理的要素の補完として同居世帯との関係性、同居の暮らしの満足度と気を遣う程度の相関を確認している。気を使う程度と同居世帯との関係性、同居の暮らしの満足度で相関がみられ、それぞれ  $r=0.390$ ,  $p=0.000$ ,  $r=0.457$ ,  $p=0.000$  である。同居世帯との関係性と同居の暮らしの満足度は強い相関があり、 $r=0.706$  ( $p=0.000$ ) であった。気を遣う程度が低いほど同居世帯との関係が良く、同居の暮らしの満足度が高い。

	気を遣う程度	同居世帯との 関係性	同居の暮らしの 満足度
気を遣う程度	1	.390**	.457**
同居世帯との関係性	.390**	1	.706**
同居の暮らしの満足度	.457**	.706**	1

\*\*. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

#### 【各項目の指標】

気を遣う程度: 1. 気を遣わない 2. あまり気を遣わない 3. やや気を遣う 4. 気を遣う

同居世帯との関係性: 1. 良い 2. まあ良い 3. あまりよくない 4. 良くない

同居の暮らしの満足度: 1. 満足している 2. まあ満足している 3. あまり満足していない 4. 満足していない

### 3-2. 心理的距離と生活的距離の関係

心理的距離と生活的距離の関係について相関分析を行った。一緒に過ごす時間の割合と気遣いの程度では弱い正の相関がみられ、 $r=0.218$  ( $p=0.000$ ) である。因果関係の向きは規定できないが、気を使わない人ほど一緒に過ごす時間が長い、あるいは一緒に過ごす時間が長い人ほど気を使わないと見える。

### 3-3. 物理的距離と心理的距離・生活的距離の関係

物理的距離は、同居開始時に住まいの間取りにより規定されるため、変更が容易でないことから、因果関係の要因として位置付け、心理的距離、生活的距離との関係性を探る。物理的距離と心理的距離についてクロス集計した結果、住まいの分離度が低いほど「気を遣う」の回答割合が高い（表3-8）が、有意な差は得られなかった（ $\chi^2(6)=11.217$ ,  $p=0.082$ ）。物理的距離が直接的に心理的距離に影響することは確認できなかった。

物理的距離と生活的距離についてクロス集計した結果、住まいの分離度が低いほど、一緒に過ごす時間の割合が大きく（表3-9）、有意差が見られた（ $\chi^2(8)=66.938$ ,  $p=0.000$ ）。完全共用では「いつも別々にいる」「一緒に別々が7:3くらい」が有意に少なく、「いつも別々にいる」は部分共用、完全分離では有意に多い。物理的距離が近いほど、生活的距離が近いことが確認された。

表3-8 住まいの分離度別気遣いの程度

住まいの 分離度		TOTAL	気を使う程度			
			気を遣う	やや 気を遣う	あまり気を 遣わない	気を 遣わない
完全共用	N	432	67	143	169	53
	%	100.0	15.5	33.1	39.1	12.3
部分共用	N	172	19	57	79	17
	%	100.0	11.0	33.1	45.9	9.9
完全分離	N	61	6	24	18	13
	%	100.0	9.8	39.3	29.5	21.3

表3-9 住まいの分離度別一緒に過ごす時間の割合と残差分析

住まいの 分離度		いつも 一緒にいる	一緒に別々が 7:3くらい	一緒に別々が 半々くらい	一緒に別々が 3:7くらい	いつも 別々にいる
		%	度数	期待度数	調整済み残差	
完全共用	%	41.7	13.0	18.8	16.2	10.4
	度数	180.0	56.0	81.0	70.0	45.0
	期待度数	146.2	51.3	77.3	89.6	67.6
	調整済み残差	5.8	1.2	0.8	-3.9	-5.0
部分共用	%	18.0	11.0	16.3	32.6	22.1
	度数	31	19	28	56	38
	期待度数	58.2	20.4	30.8	35.7	26.9
	調整済み残差	-5.1	-0.4	-0.6	4.4	2.7
完全分離	%	23.0	6.6	16.4	19.7	34.4
	度数	14	4	10	12	21
	期待度数	20.6	7.2	10.9	12.7	9.5
	調整済み残差	-1.9	-1.3	-0.3	-0.2	4.2

■:期待値よりも有意に高い ■:期待値よりも有意に低い

### 3-4. 心理的距離・生活的距離・物理的距離の関係

物理的距離、生活的距離、心理的距離の関係について図3-2にまとめる。生活的距離と心理的距離は互いに正の影響を与える可能性がある。物理的距離は生活的距離に影響を与え、住まいの分離度が低いと一緒に過ごす程度が高くなっていることから正の影響を与えていえるといえる。物理的距離と心理的距離には直接的な関係は見られないが、生活的距離を介して心理的距離に影響を与える可能性がある。物理的距離が自由に変更できる新築やリフォームは、生活的距離や心理的距離に起因するニーズを反映させる契機と捉えることができよう。

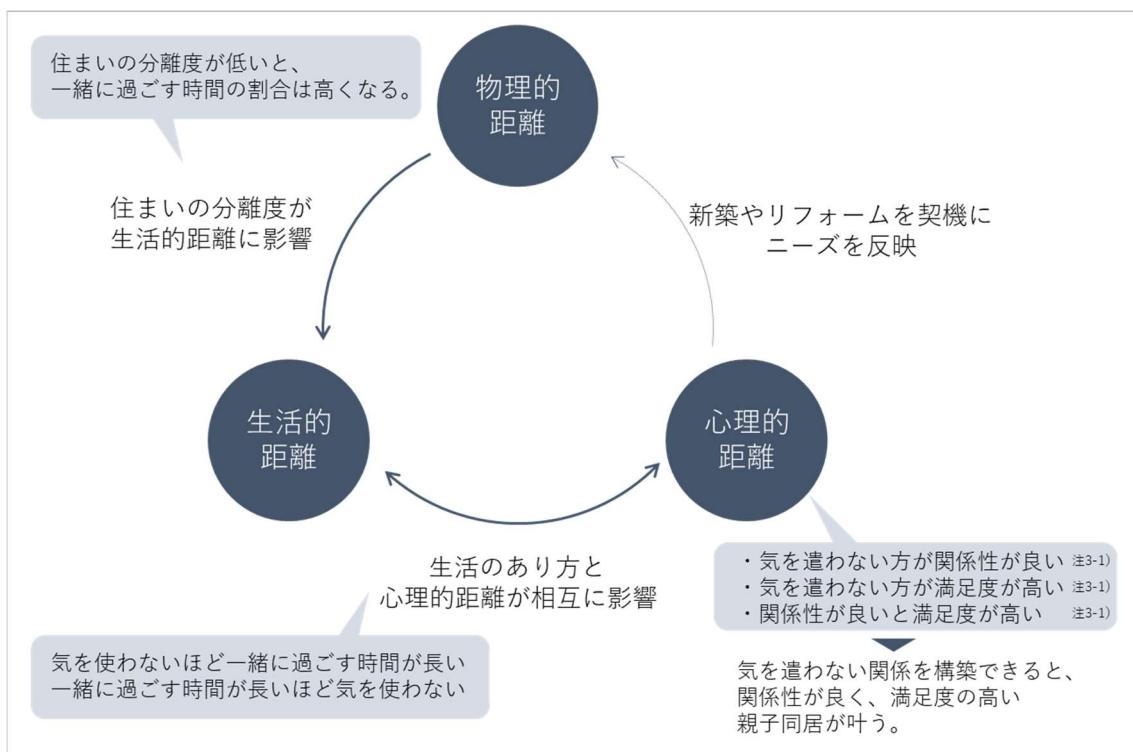


図3-2 物理的距離・生活的距離・心理的距離の関係の整理

#### 4. 親子・末子年齢別の心理的距離、生活的距離の実態と関連性

本項では、心理的距離と生活的距離についてライフステージ別、つまり末子年齢別の世帯間の距離について考察する。3項で示したように心理的距離・生活的距離は物理的距離の影響を受ける。そのため、本章では物理的距離の影響を除くため、対象を完全共用型の二世帯住宅に居住するファミリー世帯 (N=432) とする。

完全共用型の二世帯住宅居住者（表3-10）は分析対象のうち65.0%を占め、住まいの分離度の分布において、末子年齢による明確な差は見られなかった。各世帯カテゴリーにおける対象者数は表3-10の通りである。親世帯\_大学生、社会人はサンプル数が少ないので、結果の解釈には注意が必要である。

表3-10 家族形態別住まいの分離度

		完全共用	部分共用	完全分離	合計
全体	N	432	172	61	665
	%	65.0%	25.9%	9.2%	100.0%
子世帯	未就学	N 71	27	10	108
		% 65.7%	25.0%	9.3%	100.0%
	小中高	N 63	37	7	107
		% 58.9%	34.6%	6.5%	100.0%
	大学生、社会人	N 130	63	18	211
		% 61.6%	29.9%	8.5%	100.0%
親世帯	未就学	N 75	21	12	108
		% 69.4%	19.4%	11.1%	100.0%
	小中高	N 74	23	12	109
		% 67.9%	21.1%	11.0%	100.0%
	大学生、社会人	N 19	1	2	22
		% 86.4%	4.5%	9.1%	100.0%

■ 完全共用型の二世帯住宅居住者

## 4-1. 心理的距離；気遣いの程度とタイミング

### (1) 親世帯と子世帯の心理的距離の差

同居世帯に対する気遣いの程度（図3-3）について、「気を遣う」「やや気を遣う」と回答する割合は、未就学では親世帯、子世帯ともに約5割である。子世帯は末子が小学生以上になつても回答割合は約5割のままだが、親世帯は末子が小中高で33.8%と気遣いの程度が減少している。親世帯と子世帯で有意差は見られなかつたが、未就学（ $\chi^2(3)=6.856$ ,  $p=0.077$ ）、小中高（ $\chi^2(3)=7.781$ ,  $p=0.051$ ）で気遣いの程度に差が生まれる傾向が見られた。子世帯の方が気遣いの程度が高く、子どもの生活変化が大きい末子が小中高の時期は子世帯が特に気を遣つておつり、子世帯と親世帯で気遣いの程度の差が広がる。

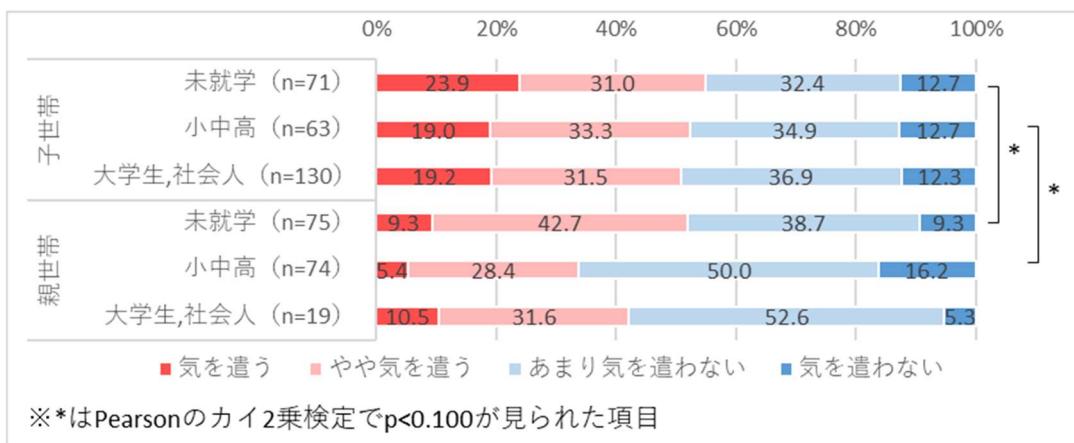


図3-3 同居世帯に対する気遣いの程度

同居世帯に気を遣う背景には、生活時間のずれ、同居世帯に影響する音、世帯の独立性、対外的な対応、共用部の専有利用があると考え、それぞれに関連するタイミングを列挙し、気を遣うタイミングとして問うた。同居世帯に気を遣うタイミング（図3-4）について、親世帯・子世帯ともに「来客があるとき」「入浴するとき」の回答が多く、2割を超える。いずれもプライバシーにかかわる内容であり、生活空間を同じくする完全共用特有の項目であると考えられる。親世帯と子世帯のポイント差を見ると、親世帯より子世帯の方が回答割合が高いものが多い。子世帯の方が気を使つているとするタイミングの項目数は、13項目のうち未就学で11項目、小中高で10項目、大学生・社会人で9項目であった。

以下に、子世帯の方が気を遣つている項目について述べる。末子年齢別に親子間を見ると、未就学では「遅く帰宅するとき」「けんかするとき」「子が騒ぐとき」「自分の世帯だけで寛ぎたいとき」「来客があるとき」「荷物が届くとき」で、親世帯\_未就学より10Pt以上高く、「子が騒ぐとき」「来客があるとき」「荷物が届くとき」では有意差（ $p<0.050$ ）がみられた。末子が未就学の時期には幅広い内容で気を遣つておつり、特に子どもが発生させる音、対外的な対応について気を遣つている様子が伺える。対外的な対応は、来客時は親世帯の居場所が

制限される、荷物が届く前に行っていた行為を中断して荷物を受け取ったり、荷物を受け取れるようにスケジュールを調整したりする、といったように親世帯の行動を制限することにもつながるだろう。小中高では、「遅く帰宅するとき」「子が騒ぐとき」「自分の世帯だけで出かけるとき」で子世帯の回答割合が親世帯より 10Pt 以上高く、「遅く帰宅するとき」「自分の世帯だけで出かけるとき」は親世帯と子世帯で有意差 ( $p<0.050$ ) がみられた。子世帯の方が生活時間のずれを感じて自世帯の独立性を求めるようになり、親世帯と行動を別にする際に気を遣っていると推察される。大学生、社会人では「遅く帰宅するとき」「自分の世帯だけで出かけるとき」「入浴するとき」で子世帯の回答割合が親世帯より 10Pt 以上高い。生活時間のずれや在宅時間の減少、入浴時間が遅くなることで親世帯が就寝前の身支度をする時間帯に水廻りを専有するなどによる気遣いなどが発生していると考えられる。

一方、親世帯の方が子世帯よりも気を遣うタイミングとして、有意差は確認できなかつたものの、10Pt 以上回答割合に差がある項目は大学生、社会人で「けんかするとき」「来客があるとき」である。5Pt 以上回答割合に差があったのは未就学で「同居世帯が寝ている時間帯に起きているとき」、小中高で「同居世帯側のエリアに入るとき」「入浴するとき」であった。未就学では生活時間のずれからおこる孫の睡眠を妨げるような音の発生につながること、小中高では同居世帯のプライバシーを考慮した世帯の独立性の侵食につながることに気を遣っていると考えられる。

以上のことから、親世帯よりも子世帯の方が気を遣うことが多く、親世帯と子世帯は互いに気を遣うタイミングが異なることが確認された。

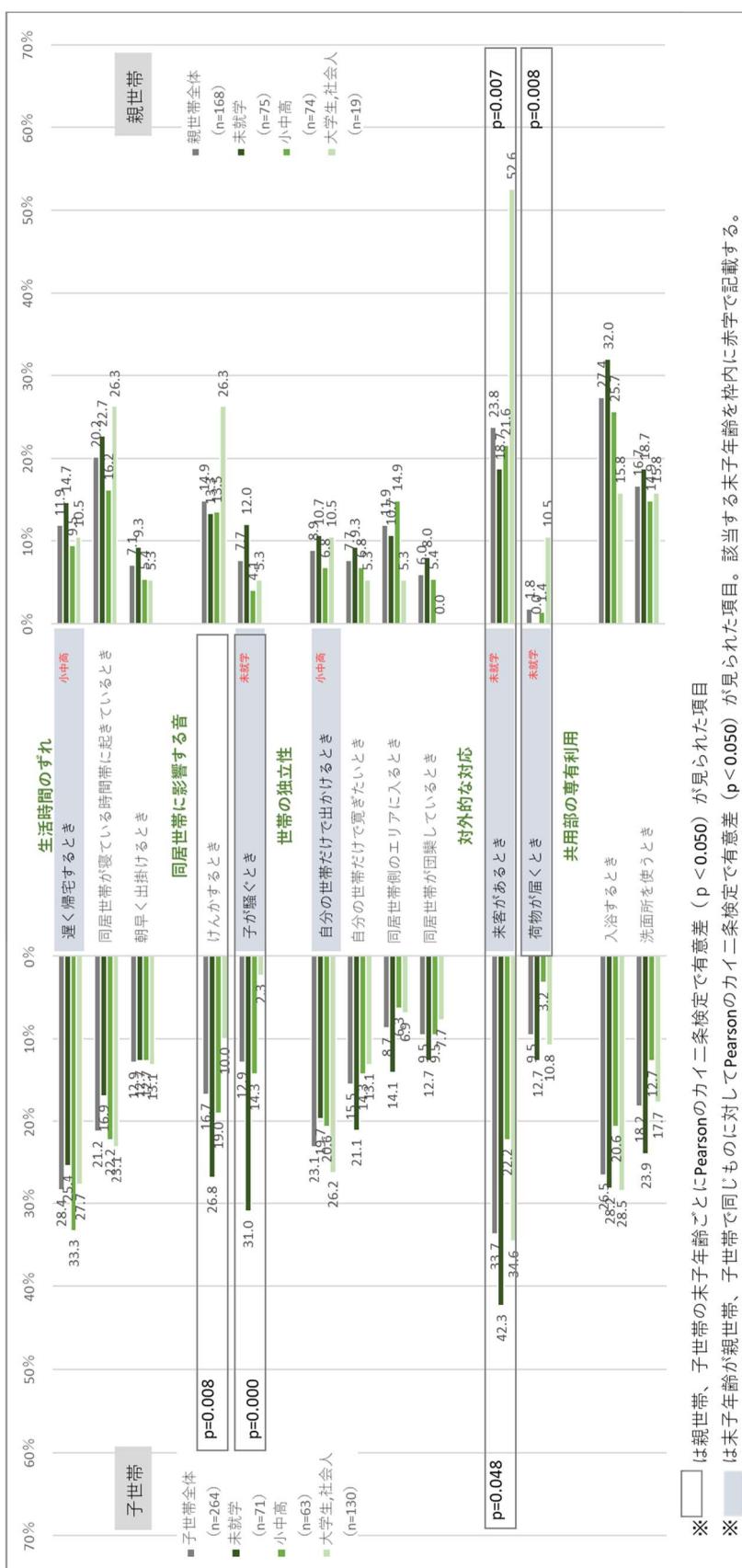


図 3-4 同居世帯に気を遣うタイミング

※  は親世帯、子世帯の末子年齢ごとにPearsonのカイ二乗検定で有意差 ( $p < 0.050$ ) が見られた項目  
※  は末子年齢が親世帯、子世帯で同じものに対してPearsonのカイ二乗検定で有意差 ( $p < 0.050$ ) が見られた項目

## (2) 末子年齢による心理的距離の変化

同居世帯に気を使うタイミング（図3-4）について親世帯・子世帯ともに「来客があるとき」「入浴するとき」の回答が多く、2割を超える。いずれもプライバシーにかかわる内容であり、生活空間を同じくする完全共用特有の項目であると考えられる。

親世帯・子世帯それぞれで末子年齢別に差が見られた項目を取り上げる。

子世帯において末子年齢ごとに差があった項目は「同居世帯が寝ている時間帯に起きているとき」「自分の世帯だけで出かけるとき」で末子年齢が高くなるほど回答割合が高くなる。子世帯は末子年齢が上がり、外出機会が増えると、生活時間のずれが発生し、自世帯の独立性が必要となる場面が増加することで気を遣っている。一方、「けんかするとき」「子が騒ぐとき」「自分の世帯だけで寛ぎたいとき」「同居世帯が団欒しているとき」は末子年齢が高くなるほど回答割合が低くなる。「けんかするとき」「子が騒ぐとき」は子世帯の末子年齢別に有意差（ $p<0.050$ ）が見られた。末子年齢が低いうちには、同居世帯に直接関係のない音を発生させることに気を遣っていると考えられる。「来客があるとき」は末子年齢ごとに差がみられ、小中高で有意（ $p<0.050$ ）に低い。その要因として、未就学は親世帯のサポートを得ている時期であり生活的距離が近いこと、大学生、社会人では大人の来客増加による共用部占有などから親世帯の行動が制限されることなどが推察され、親世帯には直接関係のない子世帯の出来事により親世帯の日常生活が制限される、同居世帯の行動を制限する事象に関して気遣いが発生していると考えられる。

親世帯では、末子年齢が上がるほど「来客があるとき」「荷物が届くとき」の回答割合が高くなり、親世帯において末子年齢別で有意差（ $p<0.050$ ）が見られた。孫の成長による家庭訪問や孫の友人などの大人の来客頻度増加や子世帯が代わりに親世帯宛の荷物を受け取ることなどが理由として考えられる。末子年齢が下がるほど「同居世帯が団欒しているとき」「入浴するとき」の回答割合が高くなる。これらは、同居世帯の独立性や共用部の使用に関する項目である。子どもが小さいうちには、親世帯が子世帯をサポートするなど一緒にいる時間が長いからこそ、子世帯にとっての家族の形成期に自世帯だけの時間をとれるように気遣っているのではないだろうか。孫が成長し、同居家族が大人のみの構成になると家庭内で気を遣うタイミングが減少し、同居世帯の行動を制限する事象である対外的対応に気を遣うタイミングが増加しているといえよう。

## 4-2. 生活的距離；一緒に過ごす時間の割合や生活行為の共同度

### (1) 親世帯と子世帯の生活的距離の差

同居世帯と一緒にいる時間の割合（図3-5）の現状について、「いつも一緒にいる」と回答したのは、親世帯で5割前後、子世帯で4割程度である。親世帯と子世帯で差が見られ、小中高では有意差があった ( $\chi^2(4)=11.913$ ,  $p=0.018$ )。その背景として、親世帯と子世帯で一緒に判断基準が異なることや、回答者が同一の住まいに居住する親世帯と子世帯でないことが一因として考えられる。

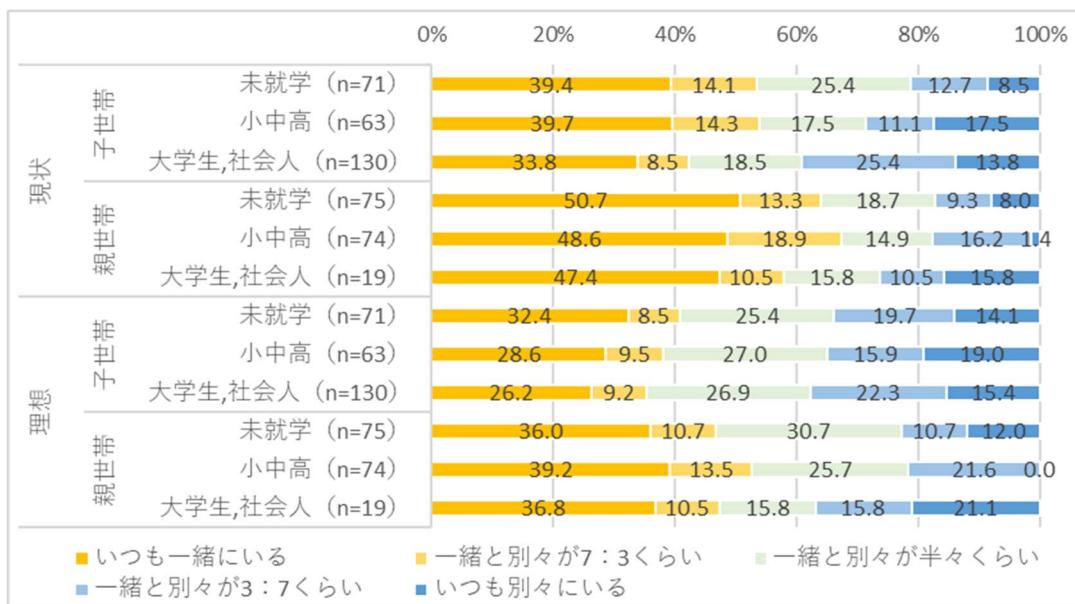


図3-5 同居世帯と一緒にいる時間の割合（現状と理想）

現状と一緒に過ごす時間に満足しているのかを確認するため、現状と一緒に過ごす程度別に現状と理想の差（図3-6）をみる。親世帯と子世帯で差は見られず、「一緒に別々が半々くらい」で理想と現状が一致している割合が最も高く8割超、「一緒に別々が7:3くらい」で最も低く半数程度である。「いつも一緒にいる」で現状と理想が一致している割合は74.4%と、「一緒に別々が7:3くらい」と回答した世帯ほど低くない。いつも一緒にいたいという強い要望がない場合は、一緒に別々を半々以下にすることで、自世帯の時間も持ちつつ、同居世帯との時間も持てるちょうど良い配分になるといえよう。

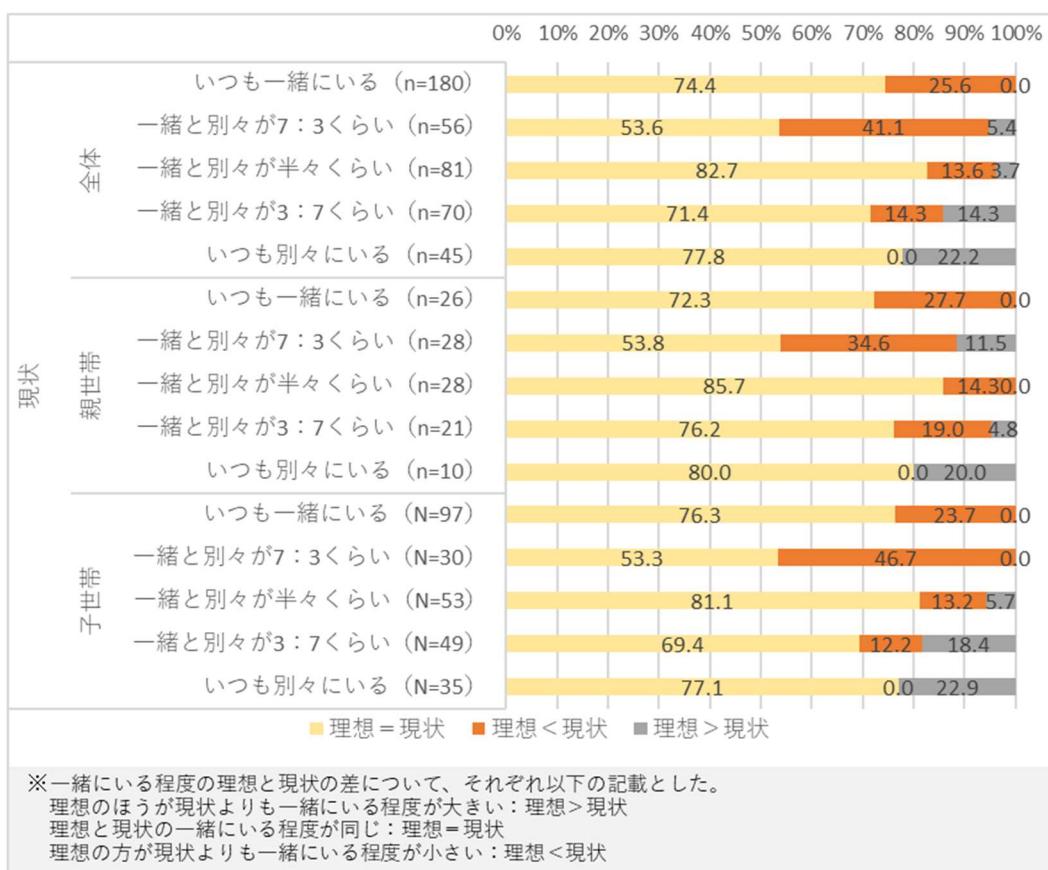


図 3-6 同居世帯と一緒にいる時間の現状と理想の差

同居世帯と一緒にいるときに一緒にしている行為（図3-7）についてみると、「食事をする」「テレビや映画を見る」が多く、どの世帯カテゴリーでも半数を超えている。親世帯と子世帯は食事やテレビを見るといったリビング空間を中心とした行為で交流していると考えられる。なお、一緒にしている行為であるのに親世帯と子世帯の回答に差がみられる背景には、両世帯の行為に対する認識や解釈の違いに加え、本調査の回答者が一対の同居世帯でないことがある。

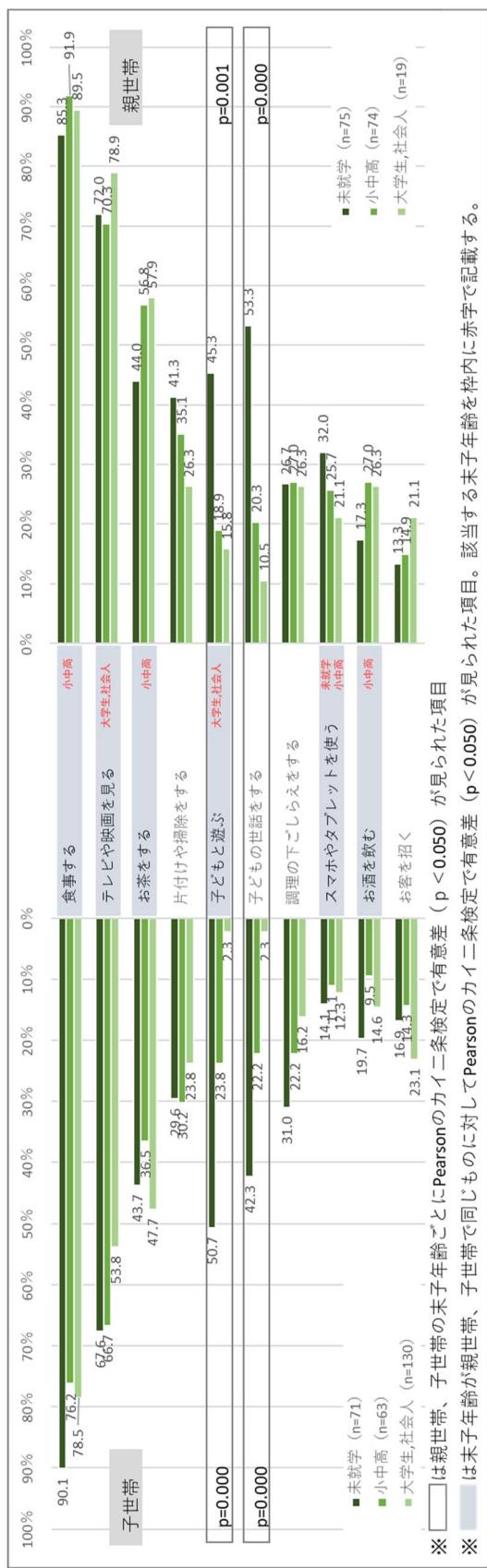


図 3-7 同居世帯と一緒にしている行為

## （2）末子年齢による生活的距離の変化

同居世帯と一緒にいる時間の割合（図3-5）の現状を子世帯の末子年齢別にみると、「いつも一緒にいる」は子世帯では、未就学、小中高は約4割で差がないが、大学生、社会人になると減少し、33.8%である。親世帯を末子年齢別にみたが、いずれも有意差（ $p < 0.050$ ）は見られなかった。その背景として、後述するように、親世帯と子世帯は大半が食事を一緒に摂っていることが挙げられる。孫の成長による生活時間のずれがあっても、食事の時間を起点とする一緒にいる時間に大きな変化が現れていないと推察される。

同居世帯と一緒にいるときに一緒にしている行為（図3-7）について親世帯・子世帯それぞれを末子年齢別にみると、親世帯、子世帯ともに末子年齢が低いほど「子どもと遊ぶ」「子どもの世話をする」の回答割合が高く、有意差（ $p < 0.050$ ）がみられた。子どものお世話に関する内容は末子年齢による影響を受ける項目であることがいえる。孫は、小さいほど、特に未就学の間は親世帯と子世帯と一緒にする行為の中心的存在であると言えよう。

## 5. 生活シーンから見る生活的距離と心理的距離

生活的距離と心理的距離の関係について、インタビュー調査結果をもとに、生活シーンにおける行為と気持ちから考察を行う。

生活的距離と心理的距離の関係は、空間の共用と生活行為の共同の際に表出しやすいと考えられる。そこで、生活的距離と心理的距離の調整が成功している場面と失敗している場面に着目する。そのため、まず、完全共用型の二世帯住宅に居住する No. 1~4 を対象に、5-1 で共用空間の使用実態、5-2 で生活行為の共同化による転換について述べる。No. 1~4 の心理的距離と生活的距離に関わる内容を表 3-11 に示す<sup>注3-2)</sup>。気遣いに関する発言は全ての対象者で見られたが、No. 4 は気を遣うことがなく、No. 1~3 で程度は異なるが気遣いがある。No. 3 のように円滑に生活を送るうえで必要なものとして気遣いを捉えている例もある。

「食事する」、「テレビや映画を見る」は全世帯が一緒に行っているが、「子どもと遊ぶ」「子どもの世話をする」といった子どもとの交流に関する内容は孫の年齢が小さいほど一緒にされており、アンケートに見られる一般的な層であると捉えられる。4-2 (2) にて述べた傾向と同様、リビング空間を中心とする交流はライフステージに関係なく見られ、末子年齢が小さいほど子どもを中心とした交流が多い。続いて、ライフステージによる生活的距離と心理的距離それぞれの経年変化は、子世帯の末子年齢が大きい場合に確認できると言えよう。そのため、子世帯の末子年齢が中学生以上である No. 1, 5, 6 を対象に、5-3 でライフステージによる交流の変化について述べる。なお、5-1 以降は、「」内は回答者の発言の要約を示す。また、回答者が親世帯、子世帯いずれかなのかを分かりやすくするために、子世帯の場合は回答 ID に下線を引く。

表 3-11 心理的距離と生活的距離

No.	気遣いに関する発言	一緒にいるときに一緒にしている行為				
		食事する	テレビや映画を見る	片付けや掃除をする	子どもと遊ぶ	子どもの世話をする
1	・同居にあたり嫁姑でどうしても遠慮することはあるが、これだけはやめてほしいということはちゃんと言ってねと親世帯妻から言った。 ・多少の我慢はあるが、お互い譲り合うので我慢できていると思う。	○	○	○		
2	・子世帯妻は自分の両親のため、二世帯でなく自分の家族の感覚。 ・親世帯夫婦は子世帯夫に気を遣っている。	○	○			○
3	・赤の他人なので遠慮がないうまくいかない。	○	○		○	○
4	・お互い気を遣わないし波長が合う。 ・互いに遠慮をしないが、嫌な感じもない。	○	○		○	○

### 注釈

注 3-2) アンケートの内容と関連した内容から心理的距離、生活的距離に関わる内容を提示している。  
　　インタビューの聴取内容はアンケートと完全に一致はしておらず、正確な位置づけは難しい。

## 5-1. 共用空間における空間使用の実態

完全共用型の二世帯住宅に居住する No. 1~4 を対象に、親世帯と子世帯の共用部使用について、生活の中心となるリビング空間の使用に着目する。リビング空間の使用について、親世帯と子世帯が互いの世帯に配慮して使用している実態が分かりやすい時間差利用について述べる。

親世帯と子世帯でリビング空間を時間差で使用している様子は 4 事例全てで見られた(表 3-12)。子世帯のみがリビングを使用するタイミングとして、親世帯入浴後(4 事例中 3 事例)、子世帯起床から子世帯外出まで(4 事例中 2 事例)の 2 パターンが確認され、親世帯のみがリビングを使用するタイミングは、子世帯が不在にしている日中が主であった。親世帯と子世帯が生活行為を一緒にしている帰宅後～夕食のタイミングでは、両世帯が同時にリビング空間を使用している。夕食後は、「子世帯と孫はリビングでゆっくりとテレビを見て、ゆっくり食べて、寝る用意をするが、親世帯妻は自室でテレビを見ることが多い(No. 1)」、「(親世帯は) リビングには食事を終えて、お風呂に入るまではいる(No. 3)」、「(親世帯は) お風呂を上がったらすぐに自室に戻るようにしている(No. 4)」といったように親世帯は入浴後自室で過ごして子世帯にリビング空間を明け渡しており、子世帯は自由にリビング空間を使っている。朝食時は、「朝は子世帯が出てから親世帯妻が起きてくる(No. 1)」、「親世帯が起きるのが遅く、朝は子世帯がメイン使用(No. 2)」といったように、外出時間が早い子世帯がリビング空間を先に使用し、親世帯は子世帯が出かけた後にリビング空間を使用している。これらは、親世帯と子世帯の生活時間のずれにより生じている側面がある。

一方で、リビングを子世帯に明け渡している親世帯は、理由として「私がいたら話せないことがあるかもしれない」、「その方が良い(No. 4)」と述べており、子世帯だけの時間を確保できるように配慮している結果でもある。「親世帯は朝起きているが、子世帯が外出してからリビングを使用するようにしている(No. 1)」のように、親世帯の配慮は子世帯も気づいており、感謝している様子も見られた。自世帯のみの時間を持つことに対して、空間を占有できるように配慮しあう状況から、同じ空間でそれぞれの世帯が自分の時間を過ごして良いという認識が乏しく、同じ空間にいるときは一緒に過ごすべきであるという意識が垣間見られた。それぞれが同居世帯を別世帯と認識し、世帯としての時間が持てる、互いの生活を邪魔しないように気遣いから行動を決めており、心理的距離に合わせて生活的距離を調整しているといえよう。

親世帯が自室にいる間の子世帯のリビング空間の使用においては、「(親世帯妻の部屋がリビングの隣にあるため) リビングの光と音が親世帯妻の部屋や子世帯が寝ているロフトに漏れるため、11 時には消灯するようにしている(No. 1)」、「親世帯が寝ている間に、2 階で騒がしくないようにしている(No. 2)」といったように、生活時間のずれが親世帯の生活リズムを崩すことのないように子世帯が気遣っている様子が伺えた。別の空間で過ごしているときも同居世帯の存在を常に感じていると考えられる。

生活行為が別々になるタイミングで親世帯と子世帯はリビング空間を譲り合いながら生

活していることが分かった。その際、親世帯は子世帯が自世帯のみの時間を持つように、子世帯は親世帯の生活リズムを崩さないように気遣いあっている。互いに気遣いの内容を共有しているわけではないが、同居世帯の行動を暗黙のルールとして感じ取っており、配慮に気づきながら感謝している様子も見られた。完全共用では寝室以外の生活空間を一緒にしているため、自分の世帯だけの団欒の時間を持つことが難しくなっており、自覚している気遣いの程度によらず、空間を一緒にする故に新たな気遣いが発生している様子が伺えた。住まいの分離度を低くする場合は、生活行為ごとに空間を区切ってそれぞれに過ごせる空間提案もしくは、同一空間内においても個別の行為が行える空間提案が重要であろう。

表 3-12 親世帯と子世帯のリビング空間の時間差使用状況

No.	世帯区分	親世帯と子世帯の時間差使用		理由	リビング使用時のルール
		有無	タイミング		
1	子世帯	有	子世帯起床から子世帯外出まで	親世帯: 自室にいる 子世帯: 朝食準備、朝食、外出準備	子世帯の食事準備など に対する親世帯の気遣い
			親世帯入浴後	親世帯: 自室でTVを見る 子世帯: ゆっくりTVを見る、 食事を食べる、寝る準備など	生活時間の違い リビングの光と音が 親世帯の自室に漏れるため、 23時には消灯する。
2	子世帯	有	子世帯起床から子世帯外出まで	親世帯: 自室にいる 子世帯: 朝食準備、朝食、外出準備	生活時間の違い 親世帯が寝ている時間帯に 騒がしくしない
3	親世帯	有	親世帯入浴後	親世帯: 自室にいる 子世帯: 把握なし	生活時間の違い -
4	親世帯	有	親世帯入浴後	親世帯: 自室にいる 子世帯: 把握なし	子世帯の世帯内の会話に対する 親世帯の気遣い -

## 5-2. 生活行為が一緒になることによる軋轢の可能性

完全共用型の二世帯住宅に居住する No. 1~4 でみると、すべての事例で調理や掃除、洗濯といった家事や育児を分担しながら行っている（表 3-13）。家事育児の軋轢について、「子世帯妻とはお互い気を遣わないし波長が合う。お互いに遠慮をしないが、嫌な感じもしない。（No. 4）」と問題を感じていない例もある。一方、「子世帯は親世帯妻に気を遣って、でしゃばらないように平日に料理をしないなど配慮しているように感じる（No. 3）」のように、現状、問題には発展していないものの、互いの取り組み方をうかがいながら生活的距離を調整している例がみられた。また、「台所に女が 2 人立つと大変だからと言われ、食事作りは子世帯妻の仕事になった。やってくれても良いのにと思った（No. 1）」「洗濯物と一緒に洗っても良いか聞いたら、お願ひしますと言われた。もしいやだと言われていたら一緒に住んでいないかもしれない（No. 3）」のように、家事分担における価値観の違いが軋轢となり、心理的距離が広がる契機となることが確認された。

同居開始時から現在の暮らし方に至るまでに、同居世帯と生活的距離を調整していると考えられる。いずれの事例も食事やくつろぎの時間を共有していることから、完全共用型の二世帯住宅では、別世帯の暮らしを同一世帯として受け入れ合う必要がある。食事作りや洗濯の運用に関わる家事分担における価値観のすり合わせなど、生活的距離の調整が失敗すると同居する親世帯と子世帯の互いの価値観の違いが表出し、軋轢を生む可能性がある。食事づくりや洗濯などに関わる生活的距離の親世帯・子世帯の考え方について、同居を計画する初期段階からすり合わせを行う必要があるだろう。

表 3-13 親世帯と子世帯の家事育児分担と軋轢

No.	世帯区分	続柄	親世帯と子世帯の家事育児分担				家事育児に関する軋轢	
			家事			育児サポート	有無	内容
			炊事	掃除	洗濯			
1	子世帯	息子世帯	△	○	×	○	有	・親世帯の子育てに対する口出し ・親世帯の食の好き嫌い ・子世帯外出中に親世帯が掃除する
2	子世帯	娘世帯	▲	△	×	○	無	・2世帯ではなく1つの家族 ・自世帯の家事は自分でする
3	親世帯	息子世帯	○	△	▲	○	有	・親世帯が料理の主導権を握るため、 子世帯は平日料理をしない ・洗濯物を一緒に回す
4	親世帯	娘世帯	○	○	▲	○	無	・互いに遠慮も気遣いもしない ・波長が合う

※家事…○:親世帯と子世帯で協力、▲:親世帯が主として実施、△:子世帯が主として実施  
×:各世帯で実施

### 5-3. ライフステージによる親世帯と子世帯の交流の変化

完全共用に限らず子世帯の末子年齢が中学生以上である No. 1, 5, 6 を対象にライフステージによる親世帯と子世帯の交流の変化についてみる（表 3-14）。

いずれの事例も孫が小さいときに親世帯が子世帯の子育てをサポートしていた。「親世帯は孫が小さい頃は仲が良く、親世帯と孫が2人で出かけることもあった（No. 1）」、「子世帯妻が働いていた時は、親世帯妻に孫の食事をお願いしたり、子世帯夫婦も親世帯側で食べる事があった（No. 6）」などの孫のお世話や、「子どもが小さい頃は先輩ママとして助言してもらってありがとうございました（No. 1）」のように孫に関わる内容のコミュニケーションがあった。完全分離である No. 5において現在の暮らしは、「最近は親世帯との交流がなく、完全別居という感じがする」など、孫の成長により親世帯と子世帯の交流が希薄になっている事例も確認された。

孫が成長することで、孫の自立が進んだり、在宅時間が短くなったりするため、親世帯と子世帯の孫を中心としたコミュニケーションが希薄化していくと推察される。特に完全分離の場合は別居しているような感覚になっており、完全共用の場合でも生活の単位が分かることで、同居世帯との一体感が薄れていくと考えられる。

表 3-14 孫を介した親世帯と子世帯の交流

No.	住まいの分離度	世帯区分	最年少の孫の年齢	孫を介した親世帯と子世帯の交流	
				小さいころ	現在
1	完全共用	子世帯	中学生	・親世帯と孫が一緒に出掛ける ・孫の食事サポート ・子育て相談	・家族行事のみ
5	完全分離	子世帯	大学生	・週に1回一緒にご飯を食べる (孫が小学生の時は毎週、 孫が中学生以上になると減少)	・月に1回、親世帯から 孫にお小遣いを渡す ・孫の誕生日に外食
6	完全分離	子世帯	大学生	・親世帯妻が孫の食事を用意	・家族行事のみ

## 6. まとめ

本章では、同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離に着目し、世帯間の距離を構成する心理的距離、生活的距離、物理的距離の概念と関係性を整理した後、親世帯と子世帯それぞれからみた世帯間の距離の差とライフステージによる世帯間の距離の変化に着目し、現状や理想について考察を行った。以下にその結果をまとめる。

- 1) 世帯間の距離の構成は、物理的距離が生活的距離に影響し、生活的距離と心理的距離は互いに影響しあっている。心理的距離と物理的距離の直接的な関連性は観測されなかったが、物理的距離は生活的距離を通して心理的距離に影響を与える可能性がある。
- 2) 心理的距離を気遣いの程度でみると、末子年齢が未就学の場合は、親世帯も子世帯も同程度であるが、孫の末子年齢が上がるほど親世帯の気遣いの程度が減り、親世帯と子世帯それぞれの気遣いの程度に差が見られる。気遣いの内容もライフステージごとに異なっており、末子が小さいうちは子どもや世帯の独立性に関する内容、末子が大きくなると生活リズムの差や対外的な対応に関する内容である。
- 3) 生活的距離を生活行為の共同度でみると、末子年齢が高くなるほど同居世帯と一緒に過ごす時間の割合は減少傾向である。親世帯と子世帯は孫を中心として暮らしを共有しており、親世帯と子世帯が一緒にしている行為は末子年齢により異なるが、孫の成長とともに一緒にしている行為が減少する。
- 4) 心理的距離と生活的距離の関係について、生活シーンにおける行為と気持ちからみると、共用空間であるリビング空間は親世帯と子世帯が時間差で使用するなど、互いの世帯を尊重して生活している。「同じ空間にいる=同じ生活・行動をする」という意識があり、自由に過ごして良いという認識が希薄であると推察される。完全共用型の二世帯住宅では、同居する親世帯と子世帯の間に軋轢が生じないように、家事や育児の分担により生活的距離を調整していることが分かった。ライフステージ別の親世帯と子世帯の交流では、孫の成長とともにコミュニケーションが希薄になり、生活的距離が広がることで、同居世帯との一体感が薄れしていくと考えられる。

親世帯と子世帯が同居する二世帯住宅に対する提案として、住まいの計画時に、ライフステージによって変化する心理的距離や生活的距離の変化を予測し、生活的距離に合わせて生活空間を小分けにできる工夫を施すことなどがある。具体的に言うと、大空間を可動間仕切で仕切るなどの柔軟性のある空間設計を行う提案や、物理的距離が近い場合でも家具配置などで互いの気配を感じにくい提案などである。

## 第4章

### 同居する親世帯と子世帯の収納・物品の共用による 相互扶助・交流

---

1. はじめに
2. 研究方法
3. 収納の共用
4. 物品の共用
5. まとめ



## 1. はじめに

親子同居においては、空間や物品を共用すること、生活行為を共同することも相互扶助と捉えることができよう。

本章では、親子同居世帯の相互扶助として、収納と物品の共用に着目する。なぜなら、これらは空間の有効活用や物品の所有の効率化により親子同居の利点を増幅する可能性があり、かつ、交流を伴うであろう点も意義があると筆者は考えているためである。

本章では、親子同居世帯における収納や物品の共用、および、それに起因する交流の実態を明らかにすることを目的とする。それは、相互扶助と交流の円滑化に寄与する収納計画についての基礎的知見となると考えられる。

## 2. 研究方法

収納場所や収納内部の使われ方、物品の共用とそれに伴う交流について詳細に把握するため、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、親世帯と子世帯の住居内の空間の空間の共用度や子世帯の家族形態による割り付けを行い、それぞれの影響を加味した分析ができるように計画した。

### 2-1. インタビュー調査概要

調査対象は、戸建て二世帯住宅にて親世帯もしくは子世帯と同居しており、親世帯から見て孫がいる、同居目的が親の介護や経済的依存でないことを満たす全国の女性（N=9）である。親世帯と子世帯の交流は女性を中心として行われることが多いため、相互扶助・交流の中心となり、詳細を把握していると考えられる女性を対象とした。相互扶助や交流の内容や程度は、ライフステージにより異なるため、研究の第一歩として、親世帯から見て子世帯に孫がいる親子同居の二世帯住宅居住者を対象とした。また、親世帯と子世帯が各自独立した生活を営める状態での収納や物品の共用を聴取するため、経済的依存や介護を同居目的としている場合<sup>注4-1)</sup>は対象外とした。対象者の抽出は、事前アンケート回答者<sup>注4-2)</sup>のうち、同居世帯と共に用している物品が多い人を優先し、空間の共用度や孫の年齢がばらけるよう優先順位付けした上で、自宅の間取り図や収納内部の写真提供とオンラインインタビューの調査協力が得られた人で行った。調査内容は、住居内の専用・共用エリアの区分と収納や居室の使い方、親子同居の交流、物品と収納の共用、親子同居における収納の満足度である。調査期間は2021年6月である。感染症対策の観点からWeb会議システムを利用したオンライン形式でインタビューを実施した。事前に自宅の間取り、共用する収納や共用する物品のある収納内部の写真を取得することで、自宅の様子の把握に努めた。

調査対象者のプロフィールを表4-1に示す。空間の共用度は、住居内の親世帯と子世帯の共用エリア（以下、共用エリア）の多寡に応じて分類し、「完全共用」（完共1～3）、「部分共用」（部共1～4）、「完全分離」（完分1～2）とした。親子区分は、回答者が二世帯住宅内で親世帯、子世帯いずれであるかを示す。回答者が親世帯、子世帯のいずれであるかを分かりやすくするために、親世帯を対象とした事例は、IDに下線を引くこととする。

---

#### 注釈

注4-1) 親世帯と子世帯が同居を開始・継続する理由に「経済的な理由で（経済的に依存しており生活費など援助してもらうため）」「介護のため（現在介護中、もしくは介護してもらっている）」を挙げたどうかで判断。

注4-2) 事前アンケートは調査会社モニター登録のある既婚女性を対象に、2021年5月12日～2021年5月17日に実施した。

表 4-1 対象者プロファイル

ID	属性	居住地	年齢	区分	空間の共用度		計画上の占有エリア			同居の実態			相互扶助			相互扶助と交流の状況		
					共用エリア	共用エリアの収納	子世帯	親世帯	親子区分	同居世帯	家族構成	※被訪者から見た経歴	同居年数	家事※1	分担	サポート	孫の世話	生活サポート
完共1	愛知県	46	完全 共用	寝室以外すべて	寝室以外の収納	すべての収納	2階個室	1階個室 屋外物置	子世帯	妻の親世帯	親世帯:父、母 子世帯:夫、本人、 長女(13歳)、長男(10歳)	8年目	○			○		声掛けや会話※4
完共2	広島県	71	完全 共用	寝室・個室以外すべて	寝室・個室以外	すべての収納	1階寝室 2階寝室	1階寝室 2階寝室離れ	親世帯	娘世帯	親世帯:夫、本人、 子世帯:娘、娘の夫、孫(長男・16 歳)、孫(長女・14歳)	14年目	○	○		○		
完共3	広島県	62	完全 共用	寝室以外すべて	寝室以外の収納	すべての収納	1階寝室 2階寝室	2階寝室	親世帯	娘世帯	親世帯:夫、本人、 子世帯:娘、娘の夫※単身赴任、 孫(長女・3歳)、 孫(長男・1歳)	5年目	○	○		○		
部共1	神奈川県	36	部分 共用	玄関・玄関ホール	玄関(靴箱)	1階フロア(靴箱) 1階 階段下収納	1階フロア	2.3階フロア	子世帯	夫の親世帯	親世帯:父、母 子世帯:夫、本人、長男(4歳)	13年目	○			○		
部共2	東京都	59	部分 共用	玄関・玄関ホール	玄関(靴箱)	3階フロア	1.2階フロア	親世帯	息子世帯	息子世帯	親世帯:夫、本人、三男(25歳) 子世帯:息子(息子の妻、 孫(長男・3歳)、 孫(長女・2歳)、 孫(次男・0歳)	4年目	○	○		○		
部共3	宮城県	48	部分 共用	玄関・玄関ホール	玄関(靴箱)	2階フロア	1階フロア	子世帯	夫の親世帯	親世帯:父、母 子世帯:夫、本人、長男(16歳)、 長女(15歳)	12年目	○			○			
部共4	兵庫県	69	部分 共用	玄関・玄関ホール	玄関(靴箱)	1階 LDK 1階 LDK 1階 洗面室 1階 トイレ	2階フロア 1階個室 1階個室 1階 階段下収納	1階個室 屋外物置	親世帯	娘世帯	親世帯:夫、本人、 子世帯:娘、娘の夫、孫(長女・14 歳)、孫(長男・12歳)	15年目	○			○		
完分1	栃木県	46	完全 分離	なし	※1階玄関にコネクティングアリ	-	1階フロア	1.2階フロア 離れ	子世帯	夫の親世帯	親世帯:父、母 子世帯:夫、本人、長女(10歳)	14年目	○			○		
完分2	愛媛県	37	完全 分離	なし	※1階玄関にコネクティングアリ	-	1階フロア	2.3階フロア	子世帯	夫の親世帯	親世帯:父、本人、長男(14歳)、 長女(13歳)	16年目	○	○		○		

※1:相互扶助の家事は、家事行為において親世帯と子世帯で分担が決まっているものを分担、不定期に起る事象に応じたものをサポートとした。

※2:生活サポートは、誕生日やホームパーティなどイベントごとの交流を指す。

※3:イベントは、誕生日やホームパーティなどイベントごとの交流を指す。

※4:声掛けや会話は、顔を合わせた時や相手世帯を訪れた際の声掛けや会話を指す。

## 2-2. 本章の構成

本章の構成は以下の通りである。本項では、研究方法、調査概要を示す。3項では収納の共用に着目し、収納内部の領域分けやその経年による変化などを把握し、収納の場所や共用のされ方、共用に起因する交流について明らかにする。4項では、物品の共用に着目し、共用する物品の内容、物品の受け渡し方法と収納場所を見ることで、物品を起点とした交流について述べる。5項ではまとめとして、収納や物品の共用による相互扶助や共用に起因する交流についてまとめ、二世帯住宅の相互扶助や交流を促進する収納を計画する上での配慮点について述べる。

### 3. 収納の共用

本項では、親世帯と子世帯の収納の共用に着目する。調査事例において、共用される収納は、共用エリア、専用エリアの両者に位置するものが確認された。共用エリアにある収納は親世帯と子世帯の共用が前提で計画されていると考えられるが、収納の仕方や収納内部の領域分けについては、同居の過程で調整が行われる部分である。専用エリアにある収納を一部共用する場合は、相手世帯に専用エリアを借りる場所借りとして捉えられる。場所借りは、収納場所の不足を補うような相互扶助や、場所借りを通した交流にもつながるものと筆者は考えている。

#### 3-1. 共用エリアにある収納

共用エリアにある共用する収納であっても、収納内部では親世帯と子世帯の領域分けがされていると考えられる。共用エリア内の収納の領域分けについて、共用エリアのある完共1～3、部共1～4に着目し、収納内部の使われ方について、同居開始時からの変化を侵食と融通に分けてみる。本報では、相手世帯に断りなく自世帯の使用する領域を拡大する場合を侵食、両世帯合意の上領域の変更を行った場合を融通として扱う。具体的には、収納領域の変更に対して具体的な断りがなかった旨の発言があった場合に侵食、両世帯の合意が明確に確認できた場合に融通として判断した。

共用エリアにある収納について、収納内部の領域分けと同居開始時からの領域の変化の有無について表4-2に示す。共用エリアにある収納で内部に世帯ごとの領域分けがある収納は、7事例中6事例と、ほとんどの事例で見られた。完全共用、部分共用とともに、玄関の靴箱内で世帯ごとの領域分けがある。靴箱内の領域分けは、収納がある場所別に分けているもの（完共1,2,部共3）、棚の位置別に分けているもの（完共3,部共1,2）があった。靴箱のように棚や扉で収納場所が区切られているものは、領域分けがしやすいと考えられる。共用エリアにある収納内部の領域分けについて、同居開始時から変化があったのは、収納内部で世帯ごとの領域分けがある6事例中3事例で、侵食によるものがほとんどである。いずれも完全共用の事例であり、孫の成長とともに子世帯の所有物が増えて子世帯の収納が不足し、同居開始時に親世帯が専用していた領域を侵食している。「窓際の靴箱は両親の靴を入れていたが、一番下の段に子どもの靴が侵入している。（完共1）」「いつの間にか親世帯の物が無くなった。娘がギューギューにしまう癖があり、一緒にしまうとしわだらけになってしまうので、親世帯の物は保護した。（完共2）」のように、領域の侵食は徐々に発生しており、収納物量増加による収納不足が明らかになるまで問題として認識されにくい。侵食を受ける世帯は、服のしわが発生するなど収納物を適切に収納できないことから、収納物の移動を余儀なくされている。完全共用では、親世帯と子世帯の生活エリアの区分がないことで、共用エリアの収納についてもエリア分けの意識が薄く、侵食が起こっていると考えられる。

表4-2 共用エリアにある収納と同居開始時からのゾーニングの変化

ID	共用エリアの収納				同居開始時からの収納内部の領域の変化					
	収納のある場所	収納の内容	有無	領域分け	侵食／融通		所有世帯		内容	時間経過による変化
					有無	侵食	融通	所有世帯		
完共1	玄関(靴箱)	靴箱	有	場所別にエリア決め ※親世帯:玄関左手の靴箱 子世帯:玄関右手の靴箱	有	○		子世帯	子世帯の靴	孫の成長とともに 親世帯エリアを侵食
完共2	玄関(靴箱)	靴箱	有	場所別にエリア決め ※親世帯:高い場所(吊り戸) 子世帯:低い場所(腰高以下)	有	○		子世帯	子世帯の靴	孫の成長とともに 親世帯エリアを侵食 ※親世帯は自分の靴を別の場所に移動
	納戸(棚)	棚	有	収納家具別にエリア決め ※親世帯:ステールラック、本棚、たんす 子世帯:ステールラック、たんす	有	○		子世帯	子世帯の服	子世帯の服が増え 親世帯エリアを侵食 ※親世帯は自分の服を別の場所に移動
完共3	玄関(靴箱)	靴箱	有	棚の位置別にエリア決め ※天井高の靴箱のうち、 親世帯:下部の一部 子世帯:親世帯使用エリア以外すべて	有	○		子世帯	子世帯の靴	孫の成長とともに 親世帯エリアを侵食
	2階納戸	納戸室内	有	収納家具や配置別にエリア決め ※親世帯:たんす	有		○	子世帯	孫が使わなくなった 服やベビー用品	子世帯に確認しながら親世帯が整理 ※親世帯収納場所を縮小して子世帯に収納場所を提供。
部共1	玄関(靴箱)	靴箱	有	棚の位置別にエリア決め ※親世帯:靴箱のうち右側 子世帯:靴箱のうち左側	無	-	-	-	-	-
部共2	玄関(靴箱)	靴箱	有	棚の位置別にエリア決め ※親世帯:高い場所 子世帯:低い場所	無	-	-	-	-	-
部共3	玄関(靴箱)	靴箱	有	場所別にエリア決め ※親世帯と子世帯で 同サイズのものをそれぞれ使用	無	-	-	-	-	-
部共4	玄関(靴箱)	靴箱	無	-	-	-	-	-	-	-

### 3-2. 専用エリア内にある収納

親世帯もしくは子世帯の専用エリア内にある収納の中に、相手世帯が使用する収納があることが確認された。ここでは、その内容について、使用の状態が定常的なものなのか一時的なものなのかに着目し整理する。本章では、物品の所有世帯が収納物を自世帯エリアに移動させる目途がついていないものを定常的なもの、目途が立っているものを一時的なものとして捉えることとする。また、収納を使用する世帯にとって収納位置が相手世帯の専用エリアを通過するか否かが収納の利用しやすさに関わると考えた。そこで、共用する収納が共用エリアに隣接する空間内に位置する場合を隣接、それ以外を飛び地と定義し、共用エリアとの位置関係を把握した。

#### 3-2-1. 一時的な収納の使用

親世帯もしくは子世帯の専用エリア内にあって、同居世帯と共に用する収納について表4-3にまとめる。一時的なものは9事例中2事例でみられた。一時的なものは、部分共用の事例で見られ、両事例とも自世帯冷蔵庫に入りきらなかったものを相手世帯の冷蔵庫に入れる(部共1,3)というものである。「親世帯の冷蔵庫に入らなかったものが入っていることがある。私は毎日買い物に行くので冷蔵庫がスカスカなのだが、義母はそれを知っている。(部共1)」「冷蔵庫を借りるときに義母がいれば言うが、いなければ入れておいて後で会ったときに直接言う。(部共3)」のように、相手世帯の収納に余裕があることを知っており、互いに声掛けをしながら収納を共用していることがわかる。収納の共用は親世帯、子世帯それぞれの専用エリアで見られ、親子いずれかのエリアに固定することなく収納の共用が可能であることが示唆される。また、一時的に共用収納として使用される冷蔵庫はいずれも共用エリアと隣接する空間に設置されている(図4-1)<sup>注4-3)</sup>。玄関から自世帯の専用エリアに至る動線に近い位置に冷蔵庫があることでアクセスしやすく、共用されやすくなっていると考えられる。一時的な収納の共用は、食材のような使用期限のあるもので見られ、期限付きで

あることが一時的な共用につながった背景のひとつと考えられる。一時的な収納の使用は場所の余裕を共用する場所借りとして相互扶助にもつながっているといえる。

表 4-3 専用エリア内にある同居世帯が使用する収納

ID	専用エリア内の収納の共用				場所	共用エリアとの位置関係	共用する収納の内容		経緯や時間経過による変化			
	有無	使用期間	エリア専用世帯	侵食／融通			収納物					
							侵食	融通				
完共1	有	○	親世帯	○	屋外物置	○	子世帯	同居開始時に家に入らなかった子世帯のもの	同居年数経過とともに減少			
完共2	無	-	-	-	-	-	-	-	-			
完共3	有	○	親世帯	○	離れ	○	子世帯	同居開始時に家に入らなかった子世帯のもの	変化なし			
		○	子世帯	○	子世帯寝室の収納	○	親世帯	来客用布団	変化なし ※元来専用の部屋に子世帯が居住			
部共1	有	○	子世帯	○	納戸	○	親世帯	親世帯が置いていた荷物	同居前から親世帯が置いたものに減少			
		○	子世帯	○	和室	○	親世帯	親世帯所有の布団	同居前から親世帯が収納、変化なし			
		○	子世帯	○	冷蔵庫	○	親世帯	親世帯冷蔵庫に入りきらなかったもの	-			
部共2	有	○	親世帯	○	廊下収納	○	子世帯	子どもの洋服	親世帯から提供			
		○	親世帯	○	客間	○	子世帯	子どもの遊び道具	親世帯から提供			
部共3	有	○	親世帯	○	階段下収納	○	子世帯	仕事道具	※親世帯がフレームとして利用できるよう 一時的に貸出し、共用エリアとなった客間に隣接			
		○	親世帯	○	冷蔵庫	○	子世帯	子世帯冷蔵庫に入りきらなかったもの	親世帯収納を活用			
部共4	有	○	親世帯	○	屋外物置	○	子世帯	子世帯のアウトドア用品	親世帯エリアを主張したが、 子世帯が侵食			
完分1	有	○	親世帯	○	離れ	○	子世帯	子どもが小さいときに使っていたもの	家の中に入りきらなくなり移動			
完分2	有	○	子世帯	○	3階フロア	○	親世帯	親世帯の洋服や鞄、布団	同居開始時から収納されている ※新築して同居開始			

※共用エリアとの位置関係は、共用する収納が共用する空間と隣接する空間内に位置する場合は「隣接」、それ以外を「飛び地」と判断した。

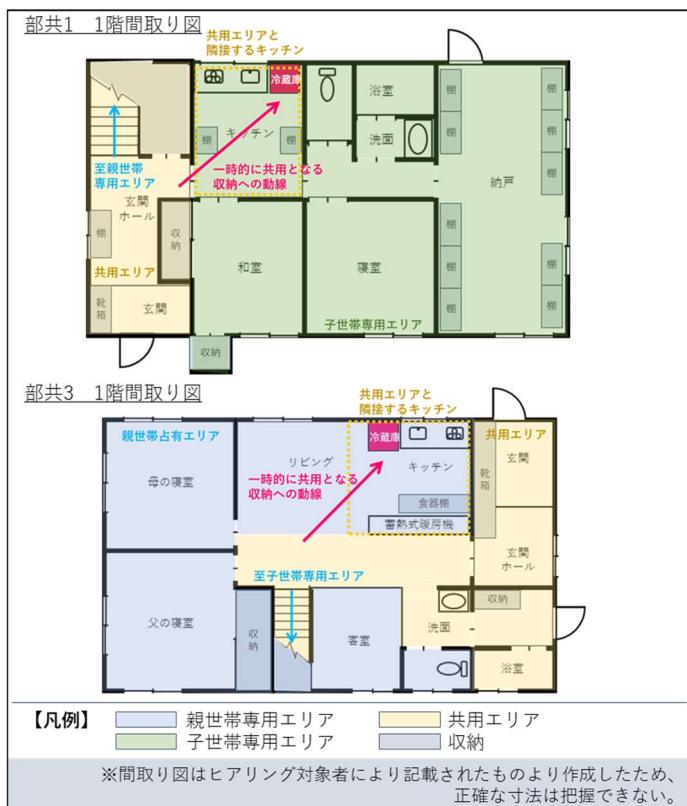


図 4-1 共用エリアに隣接する空間にある収納の一時的な共用

### 注釈

注 4-3) 冷蔵庫の共用が生じていない事例（部共2、完分1, 2）では、共用エリアから冷蔵庫へアクセスする際に、相手世帯専用エリア内の洗面空間やリビング空間など、キッチンとは用途の異なる室を通過する必要がある。

### 3-2-2. 定常的な収納の使用

定常的な収納の使用は、9事例中8事例で見られ、8事例中7事例で子世帯の所有物が孫の成長とともに増えて子世帯の収納場所が不足し、子世帯が親世帯のエリアを使用するようになったものである。場所不足を考えて親世帯が子世帯に収納場所を融通する（完共3, 部共2, 完分1）、子世帯が親世帯の収納を徐々に侵食する（完共1, 部共3, 4）などである。親世帯が子世帯の収納を侵食している事例は本調査では確認できず、同居開始時から親世帯が収納していたものがそのままになっているため、融通と捉えられる。

親世帯が子世帯に収納場所を融通している例では、「1階階段下の収納の中がからっぽだったので、子どもが増えてきたときに、好きに使ってと貸した。（部共2）」「家の中に収納を作ったつもりだったが、子どもができるとものが多くなってきた。離れがあるので、物置としてそこに置かせてもらっている。（完分1）」のように孫が生まれ、成長する過程で子世帯のものが増えている。親世帯と子世帯の会話により共用する収納が決まっており、合意のもと共用が進んでいる様子がうかがえた。いずれの事例も共用エリアと隣接した位置の収納を利用しておらず、収納のスムーズな共用につながっている。

一方、子世帯が親世帯の収納を徐々に侵食する事例では、「本当はコンテナを借り入れようと思ったが、借りるお金がもったいないので物置にバーッと詰めた。（完分1）」と自世帯の判断のみで相手世帯の専用する収納を使用したり、「ここは「親世帯の物置だよ」と言っているが、占領されている。（部共4）」のように専用する世帯の認識と異なる収納の使用があり、話し合いによる解決が難航している様子がうかがえる。一度侵食が起こると、状態の回復が難しいと考えられるため、計画時に侵食の起こらない工夫が望まれる。

子世帯が親世帯に収納場所を融通している2事例（部共1, 完分2）では、同居開始時から親世帯が子世帯エリア内の収納を使用しており、実態として、子世帯エリア内の収納空間に親世帯エリアが飛び地的に存在している（図4-2）。いずれも同居開始時から親世帯が収納を使用しているが、「私が頻繁に整理を強いるのも嫌だと思うので、5年くらい経ったらまた言おうと思っている。（部共1）」「屋根裏の物入れを作ったが、私達の居住スペースに作ってしまったのでうまく機能していない。（完分2）」のように、子世帯は親世帯の収納物の扱いに苦慮しており、収納物の移動を試みている。同居開始時に共用エリアとして計画されていた可能性もあるが、飛び地的な共用収納はうまく機能しないことがうかがえる。同居開始時に専用エリア内で相手世帯専用エリアや共用エリアと接する部分から離れた場所の収納を計画する際は、当該エリアを専用する世帯のみの使用を考えた収納として計画することが好ましい。

定常的な収納の使用のうち、親世帯が子世帯に収納場所を融通するものは、子世帯の生活空間を補う場所借りとして相互扶助につながっており、その過程で交流が発生しているといえる。一方で、子世帯が親世帯の収納を徐々に侵食する場合は、子世帯が一方的に収納を使用しており、親世帯との合意がとられておらず、侵食の起こらない工夫が求められる。本調査事例において親世帯が子世帯エリア内の収納を使用している事例は侵食ではないもの

の、当該収納が親世帯エリアから遠い位置に飛び地的に存在している。子世帯エリア内で飛び地にある収納を親世帯が定的に使用する場合は、親世帯が収納物を活用できぬいうえに、子世帯は親世帯の収納物の移動が図れず収納が活用できていないことからも、飛び地にある収納は解決すべき課題といえる。



図 4-2 子世帯エリア内に飛び地的に存在する親世帯の収納エリア

## 4. 物品の共用

本章では、親世帯と子世帯が共用する物品に着目し、物品に起因する相互扶助や交流、交流の起点となりうる受け渡しについて述べる。物品の共用<sup>注 4-4)</sup>は、親世帯と子世帯が共同で所有する物品と、親世帯と子世帯が各々で所有する物品に分けて考察する。親世帯と子世帯が各々で所有する物品については、受け渡し方法を対面・非対面で整理したうえで、物品の収納場所もあわせて考察する。

### 4-1. 親世帯と子世帯が共同で所有する物品

親世帯と子世帯が共同で所有する物品がある場合は、物品に関連する生活行為を親世帯と子世帯が共同で営んでいると考えられる。親世帯と子世帯が共同で所有する物品<sup>注 4-5)</sup>は、完全共用である完共 1~3 で見られ、個人所有のもの、使用頻度の低いもの以外はほとんどを共同で所有していた。「洗濯担当は父なので、父に言われたタイミングで私がドラッグストアで洗剤を買ってきて補充している。(完共 1)」「キッチンの食品ストック類は私が管理しているが、娘も自分が食べたい物品とかを買ってきて入れている。(完共 3)」のように、洗剤や食品ストックを共同で所有し、生活行為を共同で運営している。前者からは、共同所有の物品の管理に関する交流が生じていることが確認された。表 1 に示すように、完共 1, 3 は一体的に生活しており、物品の収納についても領域分けがなく、共同で所有かつ共用する物品の種類も多いといえる。それが、物品の貸し借りやそれに伴う交流が生じていない背景にあると推察される。

### 4-2. 親世帯と子世帯が各々で所有する物品

親世帯と子世帯が各々で所有する物品の共用は、物品を貸し借りすることで新たに購入・収納する手間がかからないため、空間・経済面での有効活用につながり、ものの持ち方や使い方における相互扶助につながっていると考えられる。

親世帯と子世帯が各々で所有する物品の共用（表 4-4）は 9 事例中 5 事例で見られた。調味料や食品といった生活用品（部共 2, 3、完分 2）や礼服や工具など使用頻度の低いもの（完共 2, 部共 2, 完分 1~2）の貸し借りなどである。生活用品の貸し借りは、「調味料をちょっとくださいと言われることがある。子どもが小さくてそれだけのために買い物に行くのが大変だと思うので、貸し借りしている。（部共 2）」「卵が足りないときは取りに行ったり、持っていったりする（完分 2）」のように、互いに補い合う認識がある。使用頻度の低いも

---

#### 注釈

注 4-4) 共用する物品は、その所有形態に着目すると共同・個別の区分が存在する。共同で所有する物品は共用が前提とされ、実際に共用されるものが多いと考えられる。一方、各々で所有する物品は個別で使用することが前提であるが、一部相手世帯との共用が発生しているものがある。本報では、所有形態によらず共用される物品を対象とする。

注 4-5) インタビュー時に、共用を前提として購入・管理している旨の発言があった物品は、親世帯と子世帯が共同で所有する物品と判断した。

の貸し借りは二つの世帯でそれぞれ所有するよりも片方の世帯が所有する物品を共用することを選択している結果であると考えられる。

表4-4 親世帯と子世帯が各々で所有する物品の共用と収納場所、受け渡し方法

ID	物品の共用の有無	内容	共用する物品						物品の受け渡し	
			持ち主		収納場所				対面の有無	
			親世帯	子世帯	親世帯エリア	子世帯エリア	共用エリア	場所	対面	非対面
完共1	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
完共2	有	礼服用鞄	○	○				親世帯寝室の収納	○	親世帯に依頼して受け取る
		脚立・三脚	○				○	納戸	○	子世帯が勝手に持つて行く
		特別な集まり用の衣類	○	○				子世帯寝室の収納	○	子世帯に依頼して受け取る
完共3	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
部共1	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		工具類	○	●				1階納戸	○	親世帯に依頼して受け取る
部共2	有	調味料	○	●				2階キッチン	○	親世帯に依頼して受け取る
		来客用布団	○	●				1階個室の収納	○	親世帯に依頼して受け取る
		エコバッグ	○	○				1階ミニキッチン	○	自由に使う
		子ども用のお菓子やジュース	○	○				1階ミニキッチン	○	ミニキッチンの冷蔵庫に補充し、子世帯が自由に取る
		マスク	○				○	1階玄関	○	共用部(玄関)に置く
		孫の服		○	●		○	3階洋室	○	親世帯が勝手に持つて行く
		家庭菜園の野菜	○				○	屋外(玄関前)	○	子世帯が自由に取る
		子世帯用の食器、箸、ホットプレート		○	●			2階キッチン	○	親世帯から声掛けがあり、子世帯が持参する
		※一緒に食事をするときのみ								
部共4	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-
完分1	有	カ一用品・工具・軽トラック	○				○	車庫兼倉庫	○	親世帯に場所を聞いて子世帯が持つて行く
		調味料	○	●				1階キッチン	○	互いに声掛けする
		軽トラック	○				○	車庫兼倉庫	○	事前に借りる旨許可を取る
		圧力なべ、そばざる		○	●			2階キッチン	○	親世帯から依頼があり、子世帯が持つて行く
		調味料	○		●			2階キッチン	○	互いに声掛けする
完分2	有	礼服	○	●				不明	○	親世帯に依頼して受け取る
		卵	○	●				1階キッチン	○	子世帯が勝手に持つて行き、事後報告する
		調味料、花器、すり鉢などの古い家庭用品	○	○				玄関近くの収納	○	親世帯に場所を聞いて子世帯が持つて行く
		卵	○	●				2階キッチン	○	声掛けあり、直接受け渡し

※保管場所の親世帯エリア、子世帯エリアの記号は、共用エリアと隣接する空間の収納は○、共用エリアと隣接していない空間(飛び地)の収納は●とする。

#### 4-3. 親世帯と子世帯が各々で所有する物品の受け渡し

物品の受け渡しに際して発生する会話は、交流につながると考えられる。親世帯と子世帯が各々で所有する物品の共用のある5事例の受け渡し方法について、対面の有無により交流や収納の実態が異なると考えられるため、対面か非対面かで整理した(表4-4)。受け渡し方法は対面、非対面双方が、5事例すべてでみられた。

対面での受け渡しが行われる物品は礼服や工具などの使用頻度が低いものが中心であり、いずれの場合も親世帯もしくは子世帯が相手世帯に依頼して受け取っている。親世帯と子世帯の交流は、物品の提供依頼と受け渡しの場面で発生しているといえる。該当する物品の収納場所は、部分共用、完全分離の事例(部共2,3、完分1,2)では、飛び地か、物品を借りる側が把握していない位置である。完全共用(完共2)では、共用エリアに隣接する空間ではあるが、完全共用で唯一のエリア分けのある寝室内部に収納されており、アクセスしにくいと考えられる。共用する物品が相手世帯の専用エリア内に収納されており、勝手に持つていきにくいことが、受け渡し方法を対面とする一因であると考えられる。また、使用頻度が低いため、共用しやすい位置に収納する意識がないと推察される。

非対面での物品の受け渡しは、自由に使用して良いものとして事前に物品の場所を伝える方法(部共2,3)、物品の場所を把握していて使用の許可を得る方法(完分1,2)が見られた。

自由に使用して良いものとして事前に場所を伝える方法では、「(子世帯エリアは3階のため、)玄関まで来てエコバックを忘れたら面倒だから、(共用エリアである1階玄関横にある親世帯専用エリアであるミニキッチンに置いてあるエコバックを)お嫁さんも自由に使っていいと言っている。(部共2)」「(共用エリアである玄関前の)家庭菜園で育てているレタスを「勝手に取ってもいいんだから」と言われているので、娘のお弁当用にもらった(部共3)」のように、物品の場所を共用エリアや共用エリアと隣接する場所に設定することで、相手世帯がアクセスしやすいように工夫している様子も伺えた。物品の受け渡し時点での交流は見られないが、前後の調整や声掛けによる交流が確認できた。物品の場所を把握して使用の許可を取る方法では、「工具やカー用品を借りるときは、貸してくださいと話してから使うようにしている。(完分1)」「調味料や花器を借りるときは、収納の場所を聞いて出す。(完分2)」のように、物品を使用するタイミングに合わせて許可や場所の確認を行うための会話があるため、物品を起点とした交流が発生しているといえる。

親世帯と子世帯が各自で所有している物品は、貸し借りといった相互扶助や物品の受け渡しに伴う交流につながると考えられる。

## 5. まとめ

収納や物品の共用における親世帯と子世帯の相互扶助の実態と、共用により発生する交流が明らかになった。以下に知見を示す。

収納の共用：共用エリアにある共用する収納は収納内部で親世帯と子世帯のエリア分けが確認できたが、完全共用の場合は相手世帯の領域を侵食する傾向がある。専用エリア内にある共用する収納は、収納量の不足が起こると相手世帯の収納の侵食につながることが確認された。相手世帯の専用エリア内に飛び地的に自世帯の収納エリアを確保した場合は収納を活用しきれていない。収納場所の融通は一時的、定常的双方の場合でみられ、共用エリアや相手世帯の専用エリアに隣接する空間にある収納で、収納空間に余裕がある場合に活用されやすく、収納の共有自体が相互扶助になっている。

物品の共用：親世帯と子世帯が共同で所有する物品は一体的に生活している完全共用で見られ、共同所有の物品の管理に関する交流が生じている。親世帯と子世帯が各自で所有している物品の共用は、生活用品や使用頻度の低い物品の貸し借りで見られた。物品の受け渡しが対面の場合は、相手世帯に依頼して受け取っており、交流につながっている。非対面の場合は、物品の受け渡し時点での交流は見られないが、前後の調整や声掛けによる交流が確認できた。

以上のことから、収納や物品の共用は、共用自体が相互扶助であり、特に物品の共用では共用を起点とした親世帯と子世帯の交流につながっていることが確認できた。収納の共用は、限られた空間の有効活用につながっている。物品の共用は、同一の物品を双方の世帯で所有する必要がなくなるため、所有や管理の負荷が軽減されており、物品の貸し借りに伴う会話の機会を創出している。一方で、収納領域の侵食や定常的に共用する収納の位置が飛び地になっていることは解決すべき課題となっていることが分かった。親世帯と子世帯の収納や物品の共用のためには、収納場所の提案が重要であると考えられる。

二世帯住宅を計画する際は、基本的なゾーニングに加えて、収納や物品の共用を見据えた収納場所のゾーニングが必要といえよう。孫の成長により子世帯の収納が不足するため、子世帯の収納量の増加を見据えた収納計画が必要である。完全共用や部分共用の共用エリアの収納では、子世帯が親世帯の収納を侵食しないよう、明確に領域分けした収納を計画することが必要である。親世帯もしくは子世帯の専用エリアにおいては、相手世帯の飛び地的な収納がない計画とし、互いの世帯の収納量の余裕を融通できるような専用と共用の切り替えができる収納は、共用エリアもしくは共用エリアや相手世帯の専用エリアと隣接する空間に計画すると良いだろう。



## 第5章

### 結論

---

1. 各章で得られた知見
2. 多世帯居住のための住宅計画に向けた提言
3. 多世帯居住検討のためのフローの提案
4. 今後の課題



## 1. 各章で得られた知見

本研究では、多世帯居住開始時にあらかじめ予想することが難しい、暮らしの変化や相手世帯との関係性の変化に対し、物理的距離の差やライフステージによる変化について把握することで多世帯居住を検討する生活者に必要な知見を創出することを目的としている。多世帯居住のうち、親子同居に着目し、物理的距離の違いによる暮らし方の差や親子同居の実態を把握することで、多世帯居住を検討する世帯が相手世帯との関係性や続柄により適切な物理的距離が選択できるような知見を創出することを試みた。

以下に各章で明らかになったことをまとめる。

### 1-1. 第2章で得られた知見

第2章では、同居・隣居・近居における居住開始時のエリア選択と提案世帯、居住時の相互扶助・交流、将来に対する見通しとその理由について同居・隣居・近居の差が明らかになった。

#### 1) 居住開始時のエリア選択と提案世帯

親子居住の場合は親世帯が住んでいるエリアを中心として子世帯が転居して近くに住むことが主である。物理的距離選択時に提案があったか否かで見ると、同居や近居では子世帯による提案が多く、隣居では親世帯と子世帯の提案が同程度であった。隣居を子世帯が提案した場合は、子世帯の住んでいるエリアを選択する傾向があり、子世帯による呼び寄せの可能性が見られた。

#### 2) 居住時の相互交流・扶助

物理的距離が近い方が日常行為を共有している傾向にあるが、隣居は同居や近居よりも独立性が高く、近居はイベントを中心とした交流が比較的多い傾向が確認された。隣居は近居よりも介護想定をしていることから、イベントとして現れない、隣人としての距離感での見守りや生活サポートを行っていると推察される。

#### 3) 将来に対する見通しとその理由

同居・隣居・近居すべてで、今の距離感での暮らしをできる限り長く続ける想定であり、多世帯居住は継続性があることを望まれている。

今の距離感をできる限り長く続ける理由は物理的距離により異なり、同居は関係が良好な間、隣居と近居では転居理由がないことが挙げられる。隣居は持家が多いことからも世帯間の関係性に依らず、現在の住宅に永住する想定である。

上記内容のうち、時間距離別に見られた特徴を図5-1に示す。同居と近居は子世帯提案により子世帯が転居しているが、隣居の子世帯が親世帯を呼び寄せる場合のみ親世帯の転居が発生している。住宅取得パターンは、回答者の属性から筆者が考察したものであるが、隣居は1棟新築する必要があることからも、住宅取得のハードルが高いと考えられる。同居の場合でも核家族向け住宅である親世帯宅同居と新築二世帯住宅の選択肢が存在し、住居取得のハードルの高低にも選択肢がある。近居は賃貸住宅の活用が可能なため、住居取得のハードルは低いといえる。

		同居	隣居	近居		
居住開始時の エリア選択と 提案世帯	転居の 検討	提案の有無	子世帯→親世帯	親世帯→子世帯	子世帯→親世帯	子世帯→親世帯
		土地条件	親世帯居住エリア	親世帯居住エリア	子世帯居住エリア	親世帯居住エリア
		転居世帯	子世帯	子世帯	親世帯	子世帯
	住居取得バターン	親世帯宅同居	親世帯敷地内・隣地隣居	新規住宅地購入新築	賃貸住宅	
		親世帯住居建て替え 新築二世帯住宅				
	居住時の相互交流・扶助	日常行為を共有	独立性が高い（隣人としての見守り・サポート）	独立性が高い（隣人としての見守り・サポート）	イベント系交流	
将来に対する 見通し	介護想定	あり／相談済み	あり／相談なし	あり／相談なし	なし／相談なし	
	継続性	関係性が良好な間は継続	継続	継続	転居の可能性あり	

図5-1 多世帯居住に伴う条件の物理的距離別の特徴

上記の同居・隣居・近居の差を踏まえ、それぞれの住居取得や暮らし方の特徴を述べる。

### a) 同居

日常的な交流があり、世帯間の関係性が最も重要な住まい方である。生活を共用する程度が高いため、介護まで見据えた長期居住を検討する必要がある。

### b) 隣居

土地取得など、エリア選択の制約が大きいが、物理的距離が近くありながら、親世帯と子世帯の独立した住まい方が可能である。相互扶助を見据えつつ、相手世帯と一定の距離を保ちながら居住したい場合に適している。

### c) 近居

賃貸住宅での実現が可能なため、親世帯・子世帯ともに負担が少なく始められる住まい方である。子世帯サポートやイベント的な交流を期待する場合に適している。

## 1-2. 3章で得られた知見

第3章では、同居する親世帯と子世帯の世帯間の距離に着目し、世帯間の距離を構成する心理的距離、生活的距離、物理的距離の概念と関係性を整理したのち、親世帯と子世帯それ

それから見た世帯間の距離の差と、ライフステージによる世帯間の距離の変化を把握した。

### 1) 世帯間の距離と間取り

親世帯と子世帯の世帯間の距離を物理的距離、生活的距離、心理的距離でみると、3者が相互に関係していることが分かった。物理的距離が生活的距離に影響を及ぼしていることから、親子同居する場合の住居の間取りは、生活的距離を定義する重要な要素であることが分かる。

生活的距離と心理的距離は互いに影響し合っていることから、心理的距離と物理的距離は生活的距離を通して相互に影響を与えている。親子同居する場合の住居の間取りは一度入居した後は変更が難しいため、心理的距離に合わせた生活的距離を想定し、間取りの計画を進める必要があり、そのためには親世帯と子世帯の会話や設計者によるヒアリングが重要となる。

また、共用空間で過ごす際には、「同じ空間にいる=同じ生活・行動をする」という意識があり、自由に過ごしてよいという認識が希薄であると考えられる。同じ空間内にいることがストレスとならないように、同じ空間内でも互いの様子が気にならない広さの確保や同じ空間であっても領域分けがされているような場の提案が必要であると考えられる。

### 2) ライフステージによる変化

孫の末子年齢により、心理的距離や生活的距離の変化が見られた。心理的距離で見ると、末子年齢が未就学の場合は、親世帯も子世帯も同程度気遣いをしているが、孫の成長に伴い、親世帯の気遣いが減り、相対的に親世帯の気遣いが減少する。気遣いの内容では、末子が小さいうちは子どもや世帯の独立性に関する内容、孫が成長すると、生活リズムの差や対外的な対応に関する内容である。生活的距離で見ると、孫を中心とした交流が発生しており、孫の年齢が高くなるほど暮らしを一緒にする程度が減少し、生活的距離が遠くなる。

孫の成長に伴い、生活的距離が大きく変化している。孫中心の交流を想定し、孫の成長とともに生活的距離を調整できる仕掛けが必要であると考えられる。

一方、心理的距離には親子でずれが生じている。心理的距離の捉え方が異なると、相手世帯と踏み込んで良い生活的距離の捉え方にもずれが生じ、世帯間の距離を侵害されたと感じる側の世帯が生じると、同居の継続に対する課題となると考えられる。心理的距離を遠く捉えている子世帯を基準として、心理的距離に沿った生活的距離を実現する間取りの提案が必要である。

### 1－3. 4章で得られた知見

4章では、収納や物品の共用における親世帯と子世帯の相互扶助の実態と、共用により発生する交流を明らかにした。

### 1) 収納の共用の可能性と課題

収納の共用において、親世帯と子世帯双方の合意の上で収納領域が決定している“融通”は、収納を共用することで互いの収納物量の変化を許容する受け皿となる可能性を感じられた。“融通”を図る収納は、共用エリアや相手世帯の専用エリアに隣接する空間にある収納で、収納空間に余裕がある場合に活用されやすい。

一方で、親世帯と子世帯双方の合意が取れずに収納領域を変更している“侵食”は課題である。共用エリア内の共用する収納は、収納量の不足が起こると相手世帯の収納の侵食につながっている。

### 2) 物品の共用と共用に伴う交流

親世帯と子世帯が共同で所有する物品は一体的に生活している完全共用で見られた。親世帯と子世帯が各自で所有する物品の共用は、生活用品や使用頻度の低い物品の貸し借りで見られた。

親世帯と子世帯が物品を共用することで、物品の管理や受け渡しによる交流につながっている。物品の受け渡しが対面の場合は、物品を受け渡す際に会話が発生しており、非対面の場合は、前後の調整や声掛けが交流につながっている。

間取り検討時に収納計画も同時にゾーニングすることで、動線と量を確保できれば、融通しやすく、侵食の起こりにくい収納計画を叶えることができるだろう。生活用品の受け渡し場所や使用頻度の低い物品の貸し借りに便利な収納など、世帯間を行き来する物品についても着目して収納計画を検討する必要があるといえる。

## 2. 多世帯居住のための住宅計画に向けた提言

同居・隣居・近居といった物理的距離の差による、親子居住の実態の差が把握できた。同居に関しては深掘りを行い、ライフステージによる世帯間の距離の変化や、親世帯・子世帯それぞれから見た世帯間の距離の差、収納や物品の共用の実態が把握できた。また、親子居住の利点である交流や相互扶助の発生も確認できた。

親子居住開始前の物理的距離の選択は特に重要であり、親子居住開始後の親世帯と子世帯の暮らし方や関係性に影響を及ぼすことが分かった。いずれの物理的距離を選択するとしても、親世帯と子世帯の交流・相互扶助を最大化するために、核家族世帯向け住宅とは異なる特徴を持った住宅計画が必要であるといえる。

物理的距離の選択、住居設計時に検討すべき間取りの条件について以下に示す。

### 2-1. 同居・隣居・近居の選択

同居・隣居・近居の選択においては、当事者の置かれた状況により住居取得の段階で選択肢がある程度限られることが分かる。選択肢に影響を与える要素として、土地の制限と費用負担が挙げられる。

#### 1) 土地の制限

隣居の場合は土地の制限が大きく、親世帯や子世帯が2棟の建築が可能な敷地や隣接する敷地を所有・入手していない場合には実現できない。一方で、同居は親世帯宅同居、近居は時間距離30分以内の賃貸住宅が選択肢としてあり、実現しやすい。

#### 2) 費用負担

同居の親世帯宅同居や近居の賃貸住宅活用は費用負担が少なく始められるが、核家族向けの間取りであることが想定され、親子居住に対応できていない可能性もある。特に、同居の親世帯宅同居は核家族向けの住宅で親世帯と子世帯が同居することが多いと考えられるため、完全共用の同居であることを前提に関係性を構築していく必要がある。住居が対応していない分、暮らしの運用であらゆる調整が必要になるだろう。

同居の新築親世帯住居建て替え新築二世帯住宅や隣居では、住居を新築することから費用負担が大きい。一方で、親子居住に対応した住居をゼロから計画することができるため、本研究にて得られた知見を活用し、世帯間の距離を考えた、ライフステージによる変化を許容できる柔軟性のある住宅の計画が望ましい。

### 2-2. 住居取得・計画時に検討すべき間取りの条件

物理的距離により世帯間の距離や親世帯と子世帯の交流・相互扶助の実態が異なるため、同居・隣居・近居で検討すべき間取りの条件が異なる。同居・隣居・近居それについて、

検討すべき間取りの条件を述べる。

### 1) 同居

同居は最も物理的距離が近く、世帯間の距離を大切にすべき居住形態である。親世帯と子世帯でライフステージにより心理的距離に差が生まれるため、心理的距離を感じている方の世帯に合わせた計画が必要である。住まいの分離度別に検討すべき間取りの条件を記載する。

完全共用：基本的な生活が常に一緒になることから、親世帯と子世帯が同じ空間で過ごすことが多い。そのため、「一緒にいる=一緒にする」という意識でいると、唯一の分離空間である自室に滞在しなければならない時間が発生するなど、生活に制限がかかっている。充実した自室や、居所が複数ある、別のことをしていても気にならないLDK空間の計画が望まれる。

部分共用：一緒にそれぞれのグラデーションが一番作りやすい住まいの分離度である。生活的距離はライフステージにより異なるため、共用空間と専用空間のエリアが柔軟に変化させられるような間取りを選択すると良い。

完全分離：基本的な生活は別々になっており、日常生活の独立性が最も高い。ただし、同一棟に居住し、限られた面積の中で親世帯と子世帯がやりくりしていく上では、物品や収納の共用を見据えた共用の収納などの計画があつても良いだろう。また、物品の受け渡しに対して最も調整が必要になる住まいの分離度であるため、物品の受け渡し場所を設定しておくことも一案である。

### 2) 隣居

隣居は別住戸となるため、同居よりも物理的距離が確保しやすく、親世帯と子世帯のプライバシーが保ちやすい。一方で、同居と類似する近さがあることで互いの交流や相互扶助が容易に図れると考えられる。

実態としても、隣人としての見守りがあると推察される。一緒に時間を作る工夫をするよりも、さりげない寄り添いの形で交流や相互扶助を図れる計画が必要であろう。住居同士の窓の位置をずらすなど別住戸としてのプライバシーに配慮しつつ、庭を共用するなど、親世帯と子世帯の交流のマグネットとなる仕掛けを敷地内に計画すると良いだろう。

介護想定がされていることから、介護期の相互扶助を想定して、親世帯住戸は介護室へのアクセスを玄関以外からも確保しておくことは利便性向上の面で有効であるといえる。

### 3) 近居

近居は物理的距離が最も遠く、各住戸の独立性が高いがゆえに、交流や相互扶助の際には互いの住戸への行き来が必要となる。親世帯と子世帯はイベント的な交流が主であり、介護

想定がされていないことから、LDK 空間のような公的な空間に交流の場が計画されている住戸を選択する必要があるだろう。特に LD に関しては、居住世帯のみの時と相手世帯が訪問した際の人数変化に対応する必要があり、一定の柔軟性が必要となる。LDK 空間とプライベート空間が明確に分離されていることも、相手世帯訪問に対する心理的ハードルを下げる上で有効だろう。

### 3. 多世帯居住の住宅計画のためのフローの提案

親子居住において、物理的距選択と住宅設計の二段階に分けて、親世帯と子世帯の世帯間の距離を鑑みた計画フローを提案したい。検討のフローがあることで、親子居住を検討している生活者が自身の状況を分析する際の端緒となり、自身の状況に合わせた親子居住を考える土台になると筆者は考える。

親子居住開始に向けた住宅計画に際して、大まかなフローを図5-2に示す。親子居住開始に向けて、親世帯もしくは子世帯からの提案がまずは必要である。いずれかの世帯が提案することで、親世帯と子世帯、それぞれが望む親子居住の姿をすり合わせ、共有することができる。親子居住の理想像を共有することで、その後の計画が円滑に進みやすくなるだろう。その後、親世帯と子世帯の物理的距離の選択肢を整理し、物理的距離を選択したうえで、住宅設計、親子居住開始に至る。フローのうち、生活者自身での選択が難しく知見が必要であると考えられる、「選択肢の整理」「同居・隣居・近居の物理的距離の選択」は物理的距離選択のフロー、「住宅設計」は住宅設計のフローで後述する。

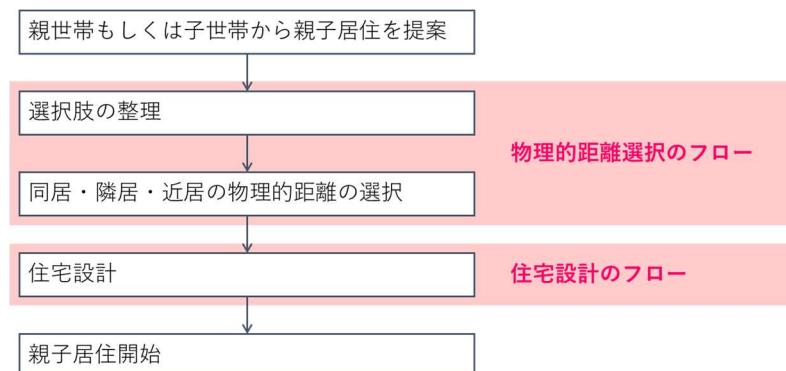


図5-2 親子居住提案から開始の大まかなフロー

### 3-1. 物理的距離選択のフロー

親子居住の物理的距離選択に対しては土地の制限、費用負担による検討フローを図5-3に示す。「同居検討フロー」「隣居検討フロー」「近居検討フロー」の各開始地点からフローの確認を実施することで、複数の選択肢を得ることができるだろう。いずれの親子居住の形態にもたどり着かなかった場合は、残念ながら、親子居住の選択肢がないといえる。

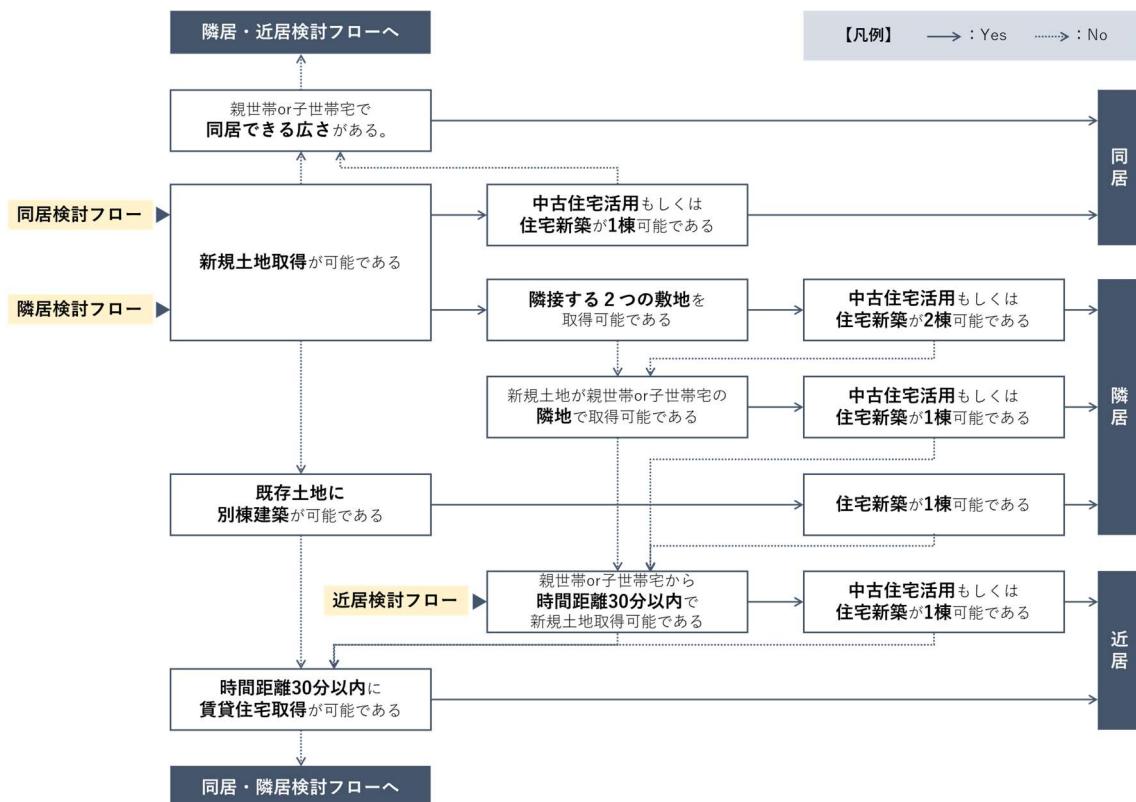


図5-3 土地の制限・費用負担による物理的距離選択肢整理のフロー

物理的距離の選択肢が複数残った場合は、図5-4に示すフローにより、適切な物理的距離をさらに検討されたい。これらの情報をもとに、自身の状況に合わせた選択肢を精査し、親子居住の検討に役立ててほしい。

隣居と近居は別居であるがゆえに、核家族世帯向けの住宅で良いと考えられるかもしれないが、親子居住による交流や相互扶助を想定すると、住宅内でも親世帯と子世帯の世帯間の距離を調整できる間取りの工夫を検討すべき事項があることが分かる。隣居では敷地内共用空間の確保の有無を、近居では時間距離に加えて、共用空間と個室の関係性を検討する必要がある。

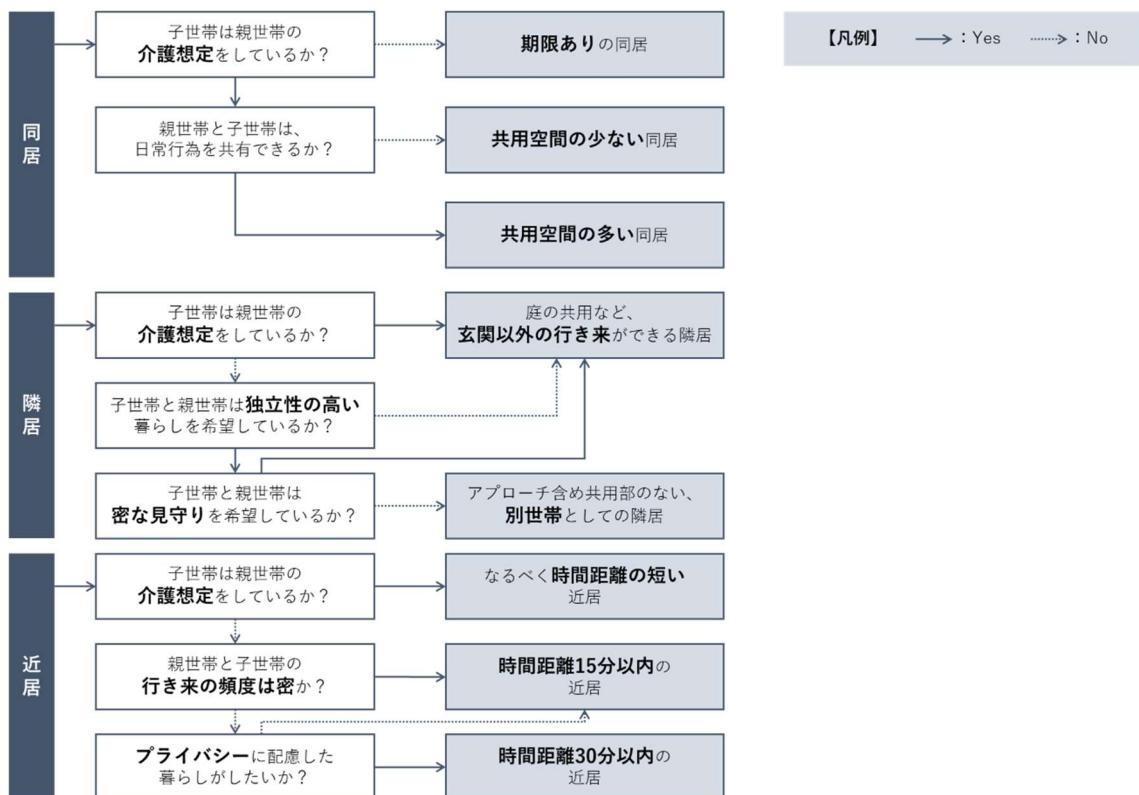


図 5-4 適切な物理的距離選択のフロー

### 3-2. 住宅設計のフロー

選択した物理的距離により異なるが、ここでは詳細な研究が進められている同居を取り挙げる。住宅設計の際に重視すべき項目として快適性や効率性に関わる設備的な内容等も考えられるが、ここでは、親世帯と子世帯の世帯間の距離に着目し、住まいの分離度を検討するフローを提案する（図 5-5）。加えて、住まいの分離度との関連が深く、住宅設計時に同時に検討する必要がある、物品や収納の共用を踏まえた収納ゾーニングを検討する際のフローを住まいの分離度別に提案する（図 5-6）。

住まいの分離度を検討するフローは、子世帯の子の有無や年齢により推奨する距離感が異なることをベースに、生活的距離を左右する物理的距離として住まいの分離度を示すものである。子世帯の子の末子年齢を基準として用いているが、子どもの成長に伴いフローの結果は異なるため、現在の子世帯の子の成長にも対応できるように先を見据えた可変性のある住宅を計画することもポイントである。柱壁のない大空間が確保できれば、必要に応じて壁を立てたり家具を移動したりでき、可変性が確保できるだろう。子世帯の子が成長した場合の暮らしについても想像しながらフローの回答を進めることが望まれる。

収納ゾーニングを検討する際のフローは、各世帯が所有する物品の共用から、住まいの分

離度別に提案するものである。物品の共用は、日用品、使用頻度の低い物品で発生するため、双方を考えて必要な収納を明らかにしてほしい。

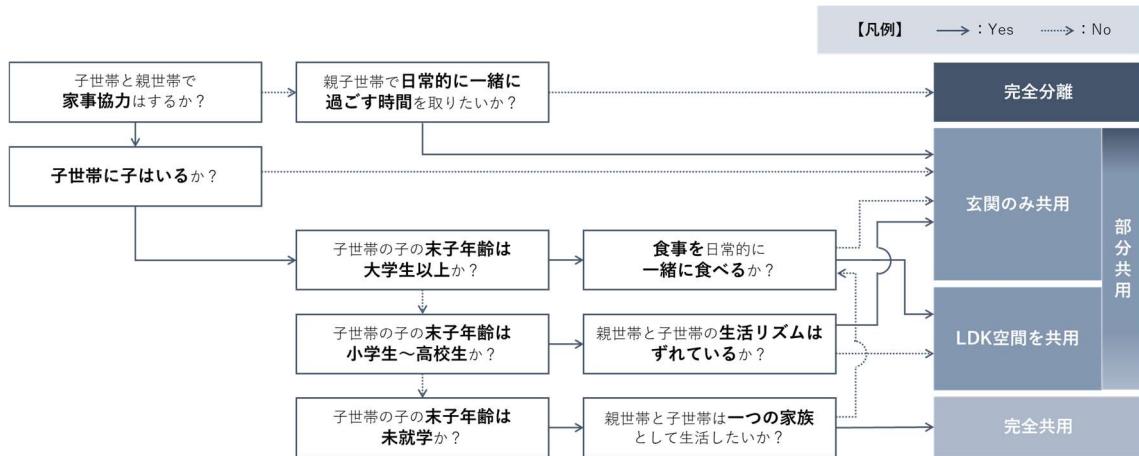


図 5-5 同居における空間の分離度検討のフロー

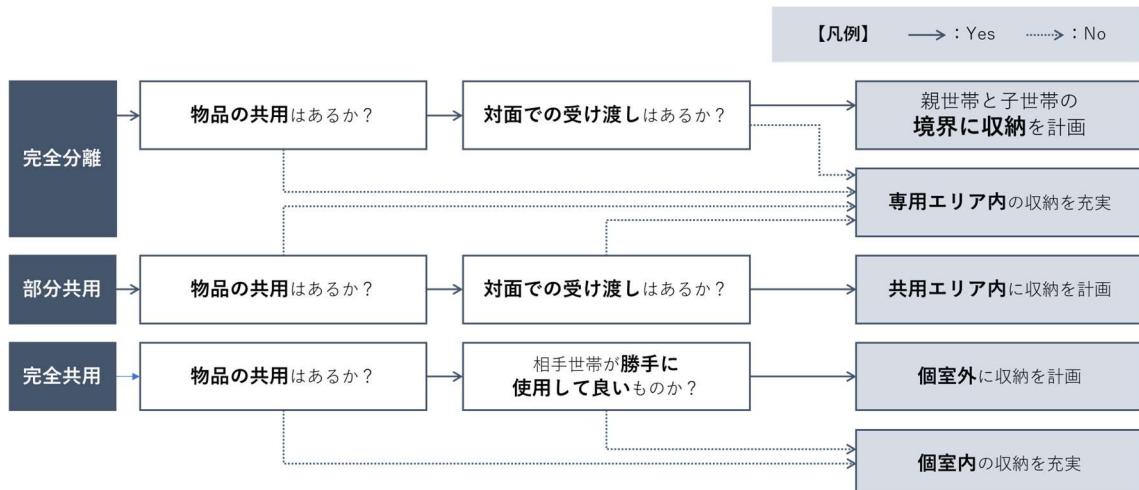


図 5-6 住まいの分離度別、物品の共用に着目した収納ゾーニング検討のフロー

続いて、収納の共用から、住まいの分離度別に提案する（図 5-7）。収納を専用エリア内、専用エリアもしくは共用エリアとの境界部、共用エリアのいずれの場所に検討すべきかを示す。いずれの場合も、飛び地的に相手世帯の収納を計画することは避けるべきである。

以上に示した住宅計画のフローは、生活者が自身の住宅を検討する際のヒントとなり、設計者がヒアリングを行う際のヒントとなる点では有効であると筆者は考えている。

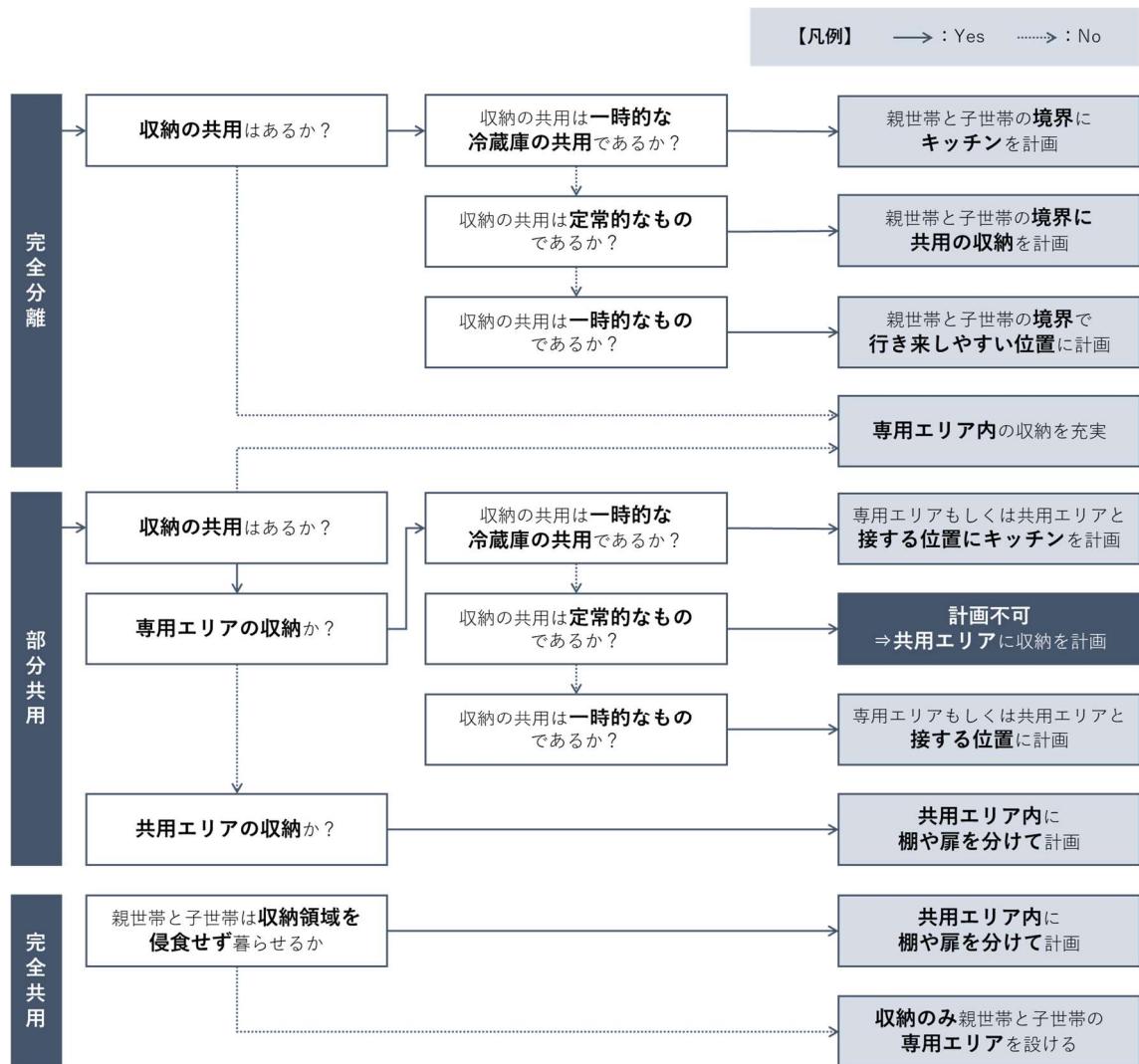


図 5-6 住まいの分離度別、収納の共用に着目した収納ゾーニング検討のフロー

隣居・近居に対する住宅計画については、より詳細な研究をしたうえでフローの提案をすべきであるが、現状考えられる世帯間の距離の調整に関わる視点を以下に示す。

隣居では、窓の配置や玄関の位置など、親世帯と子世帯の隣人としての距離感を調整する手段が複数考えられる。

近居では、敷地内の駐車場や駐輪場、住居内の玄関の広さやリビングとプライベートな居室の切り分けなど、近しい間柄の来客に対応できる条件があるか否かは重視すべき事項であると考えられる。

#### 4. 今後の課題

本研究では、親世帯と子世帯の世帯間の距離を軸に研究を進め、物理的距離別の住まい方の差や、同居においては、ライフステージによる差や物品や収納の共用の実態を明らかにした。さらに、相互扶助・交流の視点で暮らしの価値が明らかになった。そのうえで、親子居住の際の物理的距離の選択、住居設計時に検討すべき項目についてまとめた。

今後の課題について、以下にまとめる。

- 1) 同居・隣居・近居の特徴や注意点を示したが、住居の取得方法や親世帯と子世帯の交流など、詳細な住まい方については言及できていない。同居、隣居、近居を区分した比較研究がさらに必要であるといえよう。親世帯、子世帯それぞれの認識や子世帯の家族形態による差について詳細に見ることや、隣居における屋外での交流や声掛け等の関わりの実態を把握して提案することは今後の課題である。
- 2) 気遣いの程度と一緒に過ごす時間の割合を軸に世帯間の距離をみることでライフステージによる変化を把握したが、世帯間の距離の良否については言及できていない。世帯間の距離は近いほど良いという一軸で評価できるものではないと考えられるため、世帯間の距離の評価方法について検討を進めることは今後の課題である。他にも、心理的距離・生活的距離と詳細な間取りとの関係性を明らかにすることや、実際に同居している親子世帯双方から見た世帯間の距離を把握すること、親子同居開始後の家族形態変化による世帯間の距離への影響を把握すること、親世帯・子世帯の就業状況による世帯間の距離の差を把握することなどが挙げられる。
- 3) 収納と物品の共用による相互扶助や交流から収納を確保する場所について提案した。より多いサンプル数で詳細なライフステージや親世帯と子世帯の世帯間の距離についての考察を行うこと、共用する収納の設計について提案することは、今後の課題である。

本研究を皮切りに、上記課題に対する追加研究を行ったうえで、適切な住宅計画手法を確立していくことや、新築注文住宅以外の住居形態に向けた住宅提案をまとめること、生活者に対し、多世帯居住検討のための知見を発信していくことは、今後筆者が継続して取り組むべき課題である。



## 謝辞、研究業績

---



## 謝辞

本研究は、筆者がハウスメーカーの業務の中で取り組んでいるテーマである多世帯居住に端を発し、親世帯と子世帯の関係性に着目して取り組んだテーマである。

本研究を進めるにあたり、大阪大学 伊丹絵美子准教授には、論文の構成に始まり、論理的飛躍のない研究の表現方法について丁寧にご指導いただきました。業務として培ってきた企画的要素を入れ込みそうになるところをご指摘いただき、研究者としての視野を広げる機会をいただきました。深謝いたします。

大阪大学 横田隆司教授、には副査としてご助言をいただくとともに、ドクターゼミにて研究の進め方や発表方法について多角的な視点からご指導いただきました。ここに深謝いたします。

大阪大学 阿部浩和教授、並びに、木多道宏教授には、副査としてご助言をいただくとともに、本論文の細部にわたりご指導をいただき、改めて研究を振り返りより深く理解する機会をいただきました。ここに深謝の意を表します。

研究室においては、ドクターゼミにて大阪大学 青木嵩助教には、大変参考になる資料や研究方法に対するご指摘、研究内容に対する学術的フィードバックをいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

また、業務の中で博士後期課程に取り組むことを応援いただき、社内調整など尽力いただきました積水ハウス株式会社 河崎由美子氏、沢辺泰代氏に、そして業務との両立に対して配慮と応援をいただきました積水ハウス株式会社 住生活研究所の皆様に感謝申し上げます。

最後に、筆者の挑戦を常に励まし見守ってくれた家族に、心から感謝の意を捧げます。

2023年12月 平岡千穂

## 研究業績

### 1. 査読付き学術論文

1. 平岡千穂、近藤雅之、彌重功、伊丹絵美子：多世帯で集まって暮らす住まい方についての研究（その1）：二世帯住宅における親子別・ライフステージ別に見た世帯間の距離、日本建築学会計画系論文集、88巻、803号、pp. 35-44、2023年1月
2. 平岡千穂、伊丹絵美子：親子同居の二世帯住宅における収納・物品の共用による相互扶助・交流、日本建築学会技術報告集、第74号、（2024年2月号掲載決定）

### 2. 査読付きに準ずる学術論文

1. 平岡千穂、近藤雅之、彌重功、伊丹絵美子：二世帯同居家族における暮らしの実態と意識に関する調査—親世帯と子世帯の適切な距離感と住まい方について—、日本建築学会第15回住宅系研究報告会発表論文、pp. 192-201、2020年12月

### 3. 口頭発表

#### 3-1. 日本建築学会

1. 王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、彌重功：近居の親子世帯のライフスタイルに関する研究-つながり居住による行き来の実態について-, 日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、pp. 437-440、2019年6月
2. 王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、彌重功：子育て視点から見た近居親子世帯のライフスタイル(1)つながり居住による行き来の実態について、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築計画、pp. 1119-1120、2019年7月
3. 小伊藤亜希子、王飛雪、平岡千穂、彌重功：子育て視点から見た近居親子世帯のライフスタイル(2)つながり居住による相互サポートの実態について、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築計画、pp. 1121-1122、2019年7月
4. 平岡千穂、彌重功、王飛雪、小伊藤亜希子：子育て視点から見た近居親子世帯のライフスタイル(3)つながり居住のきっかけと住意識について、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築計画、pp. 1123-1124、2019年7月
5. 王飛雪、白井友崇、藤本真凜、王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之：子育て中の子世帯と近居する親世帯のライフスタイル（その1）-生活協同化の実態について-, 日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、pp. 385-388、2020年6月
6. 藤本真凜、白井友崇、王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之：子育て中の子世帯と近居する親世帯のライフスタイル（その2）-住空間と住まい方の特徴-, 日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、pp. 389-392、2020年6月
7. 是永美樹、彌重功、服部正子、平岡千穂、中村孝之：「開く住まい」をはじめる目的とプログラムの関係性～「開く住まい」に関する研究-その1-～、日本建築学会大会学術

講演集, 建築計画, pp89-90, 2020年9月

8. 彌重功、是永美樹、服部正子、平岡千穂、中村孝之:「聞く住まい」の訪問調査及び分析 「聞く住まい」に関する研究-その2-, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp91-92, 2020年9月
9. 王飛雪、白井友崇、藤本真凜、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之:子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査(その1) ー子世帯との行き来と交流ー, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 47-48, 2020年9月
10. 藤本真凜、白井友崇、王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之:子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査(その2) 親世帯の家で子世帯が過ごす空間, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 49-50, 2020年9月
11. 平岡千穂、近藤雅之、白井友崇、藤本真凜、王飛雪、小伊藤亜希子:子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査(その3) 親世帯にある子世帯および孫の物, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 65-66, 2020年9月
12. 白井友崇、藤本真凜、王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之:子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査(その4) 生活共同化における親世帯の負担と意識, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 67-68, 2020年9月
13. 王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、近藤雅之:続柄からみた近居する親子世帯の生活共同化, 日本建築学会大会学術講演集, 建築社会システム, pp. 181-182, 2021年7月
14. 平岡千穂、近藤雅之:多世帯居住としての同居・隣居・近居の住まい方についての研究(その1) 親世帯と子世帯の隣居と同居・近居における実態とその差, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 735-736, 2022年7月
15. 近藤雅之、平岡千穂:多世帯居住としての同居・隣居・近居の住まい方についての研究(その2) 隣居・近居における親世帯と子世帯の交流に関する緊急事態宣言前後の比較, 日本建築学会大会学術講演集, 建築計画, pp. 737-738, 2022年7月
16. 平岡千穂、山崎美波、近藤雅之、王飛雪、小伊藤亜希子:高齢者サポートの視点から見た近居親子世帯のライフスタイル その1:行き来やサポートに対する時間距離の影響についての考察, 日本建築学会大会学術講演集, 建築社会システム, pp. 277-278, 2023年9月
17. 近藤雅之、山崎美波、平岡千穂、王飛雪、小伊藤亜希子:高齢者サポートの視点から見た近居親子世帯のライフスタイル その2:家族介護における近居世帯の役割, 日本建築学会大会学術講演集, 建築社会システム, pp. 279-280, 2023年9月
18. 王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、山崎美波、近藤雅之:高齢者サポートの視点から見た近居親子世帯のライフスタイル その3:サポートの担い手とジェンダーの違い, 日本建築学会大会学術講演集, 建築社会システム, pp. 281-282, 2023年9月

### 3-2. 日本インテリア学会

1. 服部正子、平岡千穂、河崎由美子：住まいの掃除に関する実態調査（その1） LDの掃除実態についての考察，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 15-16，2015年10月
2. 平岡千穂、服部正子、河崎由美子：住まいの掃除に関する実態調査（その2） 掃除を主に担当している女性を対象としたクラスター分析，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 17-18，2015年10月
3. 服部正子、平岡千穂、河崎由美子、沢辺泰代：住まいの衣家事に関する実態調査（その1） 夫婦の働き方別や属性別の衣家事空間についての考察，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 1-2，2016年10月
4. 平岡千穂、服部正子、河崎由美子、沢辺泰代：住まいの衣家事に関する実態調査（その2） 衣家事クラスターによる空間提案，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 3-4，2016年10月
5. 平岡千穂、服部正子、河崎由美子：掃除道具収納に関するオンラインコミュニティ調査，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 21-22，2017年10月
6. 河崎由美子、平岡千穂、服部正子：住まいの浴生活に関する研究（その1） 入浴に関わる生活実態・ニーズ定量調査，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 17-18，2018年10月
7. 平岡千穂、服部正子、河崎由美子：住まいの浴生活に関する研究（その2） 洗面室と浴室の面積比の違いに関する空間体験による印象評価実験，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 19-20，2018年10月
8. 彌重功、沢辺泰代、河崎由美子、平岡千穂：働き方に関する生活実態調査（その1） 働き方の実態について，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 53-54，2018年10月
9. 沢辺泰代、彌重功、河崎由美子、平岡千穂：働き方に関する生活実態調査（その2） 働き方の実態について，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 55-56，2018年10月
10. 平岡千穂、河崎由美子：二世帯同居家族に関する実態調査 暮らしの実態と意識に関するアンケート調査，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 49-50，2019年10月
11. 平岡千穂、河崎由美子：暮らしの中の幸せ調査，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 21-22，2020年10月
12. 太田聰、山崎美波、平岡千穂、沢辺泰代：暮らし価値観とインテリアの関係性についての研究 その1 インテリア関心度とインテリア価値観の考察，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 87-88，2021年10月
13. 山崎美波、平岡千穂、太田聰、沢辺泰代：暮らし価値観とインテリアの関係性についての研究 その2 インテリア関心度と住まいの暮らしの価値観の考察，日本インテリア学会研究発表梗概集，pp. 89-90，2021年10月
14. 平岡千穂、津江大志、山崎美波、服部正子、河崎由美子：緊急事態宣言下における在宅ワークに関する調査 その1 在宅ワークの普及と専業主婦世帯についての考察，日

日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 55-56, 2021年10月

15. 河崎由美子、津江大志、山崎美波、平岡千穂、服部正子：緊急事態宣言下における在宅ワークに関する調査 その2 共働き世帯における在宅ワークについての考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 57-58, 2021年10月
16. 津江大志、山崎美波、平岡千穂、服部正子、河崎由美子：緊急事態宣言下における在宅ワークに関する調査 その3 子育て世帯における在宅ワークについての考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 59-60, 2021年10月
17. 山崎美波、太田聰、平岡千穂：自宅のトイレ空間に関する実態調査 その1 トイレのニオイ対策とトイレ空間の満足度に関する考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 49-50, 2022年10月
18. 太田聰、山崎美波、平岡千穂：自宅のトイレ空間に関する実態調査 その2 トイレの関連の収納物と収納についての考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 51-52, 2022年10月
19. 平岡千穂、近藤雅之、河崎由美子：自宅における防災に関する調査 コロナ禍での防災意識変化と防災行為についての考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 67-68, 2022年10月
20. 近藤雅之、河崎由美子、平岡千穂：住宅の寝室における夏季の環境調整に関する実態, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 57-58, 2022年10月
21. 平岡千穂、慎彩実、近藤雅之：自宅における防災に関する調査（その2）自宅での防災に関するコロナ禍の影響と在宅避難ニーズについての考察, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 9-10, 2023年10月
22. 濑戸千裕、平岡千穂、慎彩実、近藤雅之：子ども巣立ち後の子供部屋活用に関する調査 一子ども巣立ち後の子供部屋の片づけ状況に着目して一, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 3-4, 2023年10月
23. 近藤雅之、瀬戸千裕、慎彩実、平岡千穂：住宅の玄関における濡れた雨具の置き方に関する実態, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 17-18, 2023年10月
24. 慎彩実、瀬戸千裕、平岡千穂、近藤雅之：家庭内におけるコロナ禍前後の調理・買い物行動の変化 男女の調理頻度の差異から見る調理空間の関する課題, 日本インテリア学会研究発表梗概集, pp. 11-12, 2023年10月

### 3-3. 日本家政学会

1. 王飛雪、小伊藤亜希子、平岡千穂、河崎由美子：近居の親子世帯のライフスタイルに関する研究(1)つながり居住によるコミュニケーションの実態について, 第71回大会研究発表, 2019年5月
2. 平岡千穂、河崎由美子、王飛雪、小伊藤亜希子：近居の親子世帯のライフスタイルに関する研究(2)つながり居住による相互サポートの実態について, 第71回大会研究発表,

2019年5月

3. 河崎由美子、平岡千穂、王飛雪、小伊藤亜希子：近居の親子世帯のライフスタイルに関する研究(3)つながり居住に対する満足度と意識について、第71回大会研究発表、2019年5月

## 付録

---

付録 1) 親子同居者を対象とした Web アンケート 調査票 SCR 調査・本調査

付録 2) 親子隣居・近居者を対象とした Web アンケート 調査票 SCR 調査・本調査

調査概要	※案件コード自動入力																
<table border="1"> <thead> <tr> <th>設問番号</th> <th>設問内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>回答者条件 : 全員</td> <td>表示形式 : ラジオボタン</td> </tr> <tr> <td>Q1 SA Q</td> <td>あなたの性別をお答えください。 1. 男性 2. 女性</td> </tr> <tr> <td>回答者条件 : 全員</td> <td>あなたの年齢をお答えください。 1. <input type="text"/> 歳</td> </tr> <tr> <td>回答者条件 : 全員</td> <td>表示形式 : ラジオボタン</td> </tr> <tr> <td>Q3 SA Q</td> <td>婚姻の状況を教えて下さい。 1. 未婚 2. 既婚 3. 離別・死別</td> </tr> <tr> <td>回答者条件 : 全員</td> <td>あなたは現在、何人の方と同居していますか。 ※1~99の範囲でお答えください。 1. あなたを含めて <input type="text"/> 人</td> </tr> <tr> <td>回答者条件 : Q4の選択肢全ての合計&gt;=2</td> <td>現在、あなたと同居している方を以下からすべてお選びください。 ※ご自身は除いてお考え下さい。 1. 配偶者 2. 自分の父親 3. 自分の母親 4. 配偶者の父親 5. 配偶者の母親 6. 未就学の子ども 7. 小学生～高校生の子ども 8. 大学生～それ以上の学生の子ども 9. 社会人の年齢にあたる子ども(働いている) 10. 社会人の年齢にあたる子ども(働いていない) 11. 子どもの配偶者 12. 自分の祖父 13. 自分の祖母 14. 配偶者の祖父 15. 配偶者の祖母 16. 未就学の孫</td> </tr> </tbody> </table>		設問番号	設問内容	回答者条件 : 全員	表示形式 : ラジオボタン	Q1 SA Q	あなたの性別をお答えください。 1. 男性 2. 女性	回答者条件 : 全員	あなたの年齢をお答えください。 1. <input type="text"/> 歳	回答者条件 : 全員	表示形式 : ラジオボタン	Q3 SA Q	婚姻の状況を教えて下さい。 1. 未婚 2. 既婚 3. 離別・死別	回答者条件 : 全員	あなたは現在、何人の方と同居していますか。 ※1~99の範囲でお答えください。 1. あなたを含めて <input type="text"/> 人	回答者条件 : Q4の選択肢全ての合計>=2	現在、あなたと同居している方を以下からすべてお選びください。 ※ご自身は除いてお考え下さい。 1. 配偶者 2. 自分の父親 3. 自分の母親 4. 配偶者の父親 5. 配偶者の母親 6. 未就学の子ども 7. 小学生～高校生の子ども 8. 大学生～それ以上の学生の子ども 9. 社会人の年齢にあたる子ども(働いている) 10. 社会人の年齢にあたる子ども(働いていない) 11. 子どもの配偶者 12. 自分の祖父 13. 自分の祖母 14. 配偶者の祖父 15. 配偶者の祖母 16. 未就学の孫
設問番号	設問内容																
回答者条件 : 全員	表示形式 : ラジオボタン																
Q1 SA Q	あなたの性別をお答えください。 1. 男性 2. 女性																
回答者条件 : 全員	あなたの年齢をお答えください。 1. <input type="text"/> 歳																
回答者条件 : 全員	表示形式 : ラジオボタン																
Q3 SA Q	婚姻の状況を教えて下さい。 1. 未婚 2. 既婚 3. 離別・死別																
回答者条件 : 全員	あなたは現在、何人の方と同居していますか。 ※1~99の範囲でお答えください。 1. あなたを含めて <input type="text"/> 人																
回答者条件 : Q4の選択肢全ての合計>=2	現在、あなたと同居している方を以下からすべてお選びください。 ※ご自身は除いてお考え下さい。 1. 配偶者 2. 自分の父親 3. 自分の母親 4. 配偶者の父親 5. 配偶者の母親 6. 未就学の子ども 7. 小学生～高校生の子ども 8. 大学生～それ以上の学生の子ども 9. 社会人の年齢にあたる子ども(働いている) 10. 社会人の年齢にあたる子ども(働いていない) 11. 子どもの配偶者 12. 自分の祖父 13. 自分の祖母 14. 配偶者の祖父 15. 配偶者の祖母 16. 未就学の孫																

17. 小学生～高校生の孫  
 18. 大学生～それ以上の学生の孫  
 19. 社会人の年齢にあたる孫(働いている)  
 20. 社会人の年齢にあたる孫(働いていない)  
 21. 兄弟・姉妹  
 22. 叔父・叔母  
 23. 上記以外の親族  
 24. 親族以外の友人・知人  
 25. 未婚の恋人・パートナー  
 26. その他

回答者条件：全員  
 表示形式：ラジオボタン

Q6

あなたの住まいでは、何世帯の方とお住まいになっていますか。  
 三世代同居や独立した子ども(扶養を外れた子)については、それぞれの世帯としてお考えください。

例1：両親と扶養に入っている子ども1人の同居の場合…1世帯  
 例2：両親と扶養を外れた子ども1人の同居の場合…2世帯  
 例3：両親と扶養を外れた子ども2人の同居の場合…3世帯  
 例4：両親と自分の世帯と扶養を外れた兄弟ひとりとの同居の場合…3世帯  
 例5：両親(祖父母)世帯と自分の世帯、扶養を外れた子どもの世帯の同居の場合…3世帯

1. あなたご自身の世帯のみ  
 2. 2世帯  
 3. 3世帯  
 4. 4世帯  
 5. 5世帯  
 6. 6世帯以上

回答者条件：全員  
 表示形式：ラジオボタン

Q7

あなたと同居しているのは、どの世帯ですか。自分から見た統計でお答えください。

※1つの世帯ごとにお答えください。  
 ※関係性の近い世帯からお答えください。

===== 項目 =====

1. ご自身の世帯を除く1世帯目  
 2. ご自身の世帯を除く2世帯目  
 3. ご自身の世帯を除く3世帯目  
 4. ご自身の世帯を除く4世帯目

===== 選択肢 =====

1. 親世帯(自分の親世帯)  
 2. 親世帯(配偶者の親世帯)  
 3. 子世帯(息子世帯)  
 4. 子世帯(娘世帯)  
 5. 兄弟姉妹の世帯  
 6. 祖父母の世帯  
 7. その他親族の世帯   
 8. 親族以外の世帯(パートナー)  
 9. 親族以外の世帯(パートナー以外)  
 10. その他

回答者条件：Q6の選択肢「2.2世帯」～「6.6世帯以上」の中でいずれかを選択した  
 表示形式：ラジオボタン

Q8

現在、あなたと同居されている方のうち、各世帯の構成として、あてはまる方をそれぞれお選びください。

※あなたご自身からみた統計でお答え下さい。

===== 項目 =====

1. あなたご自身の世帯  
 2. 【 %%#Q7{1}%%】ご自身の世帯を除く1世帯目  
 3. 【 %%#Q7{2}%%】ご自身の世帯を除く2世帯目  
 4. 【 %%#Q7{3}%%】ご自身の世帯を除く3世帯目  
 5. 【 %%#Q7{4}%%】ご自身の世帯を除く4世帯目

=====選択肢=====

1. 自分ひとり  
 2. 配偶者  
 3. 自分の父親  
 4. 自分の母親  
 5. 配偶者の父親  
 6. 配偶者の母親  
 7. 未就学の子ども  
 8. 小学生～高校生の子ども  
 9. 大学生～それ以上の学生の子ども  
 10. 社会人の年齢にあたる子ども(働いている)  
 11. 社会人の年齢にあたる子ども(働いていない)  
 12. 子どもの配偶者  
 13. 自分の祖父  
 14. 自分の祖母  
 15. 配偶者の祖父  
 16. 配偶者の祖母  
 17. 未就学の孫  
 18. 小学生～高校生の孫  
 19. 大学生～それ以上の学生の孫  
 20. 社会人の年齢にあたる孫(働いている)  
 21. 社会人の年齢にあたる孫(働いていない)  
 22. 兄弟・姉妹  
 23. 板父・板母  
 24. 上記以外の親族  
 25. 親族以外の友人・知人  
 26. 未嫁の恋人・パートナー  
 27. その他 54% Q5[26]5%

回答者条件 : Q6の選択肢【2.2世帯】～【6.6世帯以上】の中でいざれかを選択した  
 表示形式 : ラジオボタン

**Q9**  
SA B

同居を提案したのはどちらからですか。

1. 自分側から提案した  
 2. 相手側から提案があった  
 3. どちらともなく・自然に  
 4. もともと一緒に住んでいた  
 5. その他

回答者条件 : Q6の選択肢【2.2世帯】～【6.6世帯以上】の中でいざれかを選択した  
 表示形式 : ラジオボタン

**Q10**  
SA B

同居している世帯との交流(顔を見たり、会話)の頻度はいかがですか。最も近い物を選んでください。

1. 毎日複数回  
 2. ほぼ毎日  
 3. 週4～5回  
 4. 週2～3回  
 5. 週1回  
 6. 月に2回以上  
 7. 月に1回以上  
 8. 3ヶ月に1回以上  
 9. 半年に1回以上  
 10. 半年に1回未満

続・お住まいに関するアンケート

アンケートにアクセスしていただき、ありがとうございます。

このアンケートは先日お送りした「お住まいに関するアンケート」で、同居をしている  
どにお答えの方へご案内しております。

また、アンケートであなたご自身やあなたのご家族についてお伺いする場合があります。

ご協力いただける場合は「開始」ボタンを押し、回答を開始してください。

注意事項

回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。

-----<改ページ>-----

F1 あなたの性別をお答えください。

- 男性  
 女性

F2 あなたの年齢をお答えください。

歳

-----<改ページ>-----

■ご自宅について教えてください。

Q1 あなたのお住まいの住居形態を教えてください。

- 持家／一戸建て（注文住宅）  
 持家／一戸建て（建売住宅）  
 持家／一戸建て（中古住宅／間取り変更なし）  
 持家／一戸建て（中古住宅／間取り変更あり）  
 持家／集合住宅（マンションなど／新築）  
 持家／集合住宅（マンションなど／中古）  
 持家／集合住宅（マンションなど／リノベーション）  
 賃貸／一戸建て  
 賃貸／集合住宅（マンション・アパート・公団・公社など）  
 賃貸／集合住宅（社宅・寮など）  
 その他

-----<改ページ>-----

**Q2** 住まいについて、同居している世帯との空間・設備の共用の度合いはどのようにになっていますか。  
以下の内、最も近い物を選んでください。

- 完全共用：寝室以外は全て共用
- 部分共用：水廻りや玄関、リビングなど、各々専有している空間・設備がある
- 完全分離：空間・設備を各々の世帯が専有しており、共用部分がない  
(※コネクティングドア等で一部繋がっているものも含みます)

-----<改ページ>-----

**Q3** 今のお住まいの築年数を教えてください。

- 1年未満
- 1年以上3年未満
- 3年以上5年未満
- 5年以上10年未満
- 10年以上15年未満
- 15年以上
- わからない

-----<改ページ>-----

**Q4** あなたのお住まいの延床面積を教えてください。  
※同居世帯のエリアの広さも含めた延べ床面積をお答えください。

※「m<sup>2</sup>」は「平方メートル」です。

- 40m<sup>2</sup>未満 (約12坪未満)
- 40～50m<sup>2</sup>未満 (約12～15坪)
- 50～60m<sup>2</sup>未満 (約15～18坪)
- 60～70m<sup>2</sup>未満 (約18～21坪)
- 70～80m<sup>2</sup>未満 (約21～24坪)
- 80～90m<sup>2</sup>未満 (約24～27坪)
- 90～100m<sup>2</sup>未満 (約27～30坪)
- 100～120m<sup>2</sup>未満 (約30～36坪)
- 120～150m<sup>2</sup>未満 (約36～45坪)
- 150～200m<sup>2</sup>未満 (約45～60坪)
- 200m<sup>2</sup>以上 (約60坪以上)
- わからない

-----<改ページ>-----

**Q5** あなたのお住まいのリビングの広さを教えてください。  
※自分の世帯のリビングと同居世帯のリビングが共用の場合、同居している世帯では「該当する部屋はない」を選んでください。

1/2

自分の世帯

- 6畳未満（約10平方メートル未満）
- 6~8畳未満（約10~13平方メートル）
- 8~12畳未満（約13~20平方メートル）
- 12~16畳未満（約20~26平方メートル）
- 16~20畳未満（約26~33平方メートル）
- 20畳（約33平方メートル）以上
- わからない
- 該当する部屋はない

次を表示

-----<改ページ>-----

■同居の暮らしについて教えてください。

**Q6** 今の同居の暮らしは、何年目ですか。  
※複数同居世帯がある場合には、最初に同居を始めた時期からお考えください。

- 1年未満
- 1年以上3年未満
- 3年以上5年未満
- 5年以上10年未満
- 10年以上15年未満
- 15年以上

-----<改ページ>-----

**Q7** 同居世帯の世帯主の年齢を教えてください。  
※複数同居世帯がある場合には、最も関係が近い世帯の世帯主の年齢をお教えてください。

- 24歳以下
- 25~29歳以下
- 30~34歳以下
- 35~39歳以下
- 40~44歳以下
- 45~49歳以下
- 50~54歳以下
- 55~59歳以下
- 60~64歳以下
- 65~69歳以下

- 70~74歳以下  
 75歳以上

-----<改ページ>-----

**Q8 同居を始めるにあたり、地域はどのように選びましたか。**

- 自分が住んでいるエリア  
 同居世帯が住んでいるエリア  
 自分も同居世帯も住んでいるエリア  
 新しくエリアを選んだ  
 その他

-----<改ページ>-----

**Q9 選んだエリアは、あなたもしくは同居世帯の地元ですか。**

- 自分の地元  
 自分の配偶者の地元  
 自分と配偶者の地元  
 同居世帯の地元  
 自分・同居世帯の双方の地元  
 自分の配偶者・同居世帯の双方の地元  
 自分・自分の配偶者・同居世帯すべての地元  
 誰の地元でもない

-----<改ページ>-----

**Q10 今の住まいは、どのように確保されましたか。**

- 自分もしくは同居世帯が元々住んでいた家（リフォーム等なし）  
 自分もしくは同居世帯が元々住んでいた家（リフォーム等実施）  
 自分もしくは同居世帯が元々住んでいた土地に家を建て直した  
 新たな土地に注文住宅を新築した  
 新たな土地で建売住宅を購入した  
 中古住宅を購入した（リフォーム等なし）  
 中古住宅を購入した（リフォーム等実施）  
 賃貸住宅を借りた  
 その他

-----<改ページ>-----

Q11 あなたが、同居すること(同居を続けること)を決めた理由を教えてください。

- 子育てのため
- 介護のため
- 老後の生活を見越して
- 経済的な理由で(生活費節約のため)
- 経済的な理由で(住宅取得費を分担するため)
- 家を継ぐため
- その他

-----<改ページ>-----

Q12 今の同居は今後どのくらい続ける予定ですか。

- 1年未満
- 1年以上3年未満
- 3年以上5年未満
- 5年以上10年未満
- 10年以上15年未満
- 15年以上
- 期間は分からないが、出来る限り長く
- 期間は分からないが、出来る限り短く

-----<改ページ>-----

Q13 前問で「~~Q12~~」とお答えになった、その理由を教えてください。

- 子育てが落ち着くまで
- 認が生きている間は
- 自世帯が経済的に安定するまで
- 同居世帯が経済的に安定するまで
- 子が結婚するまで
- 同居世帯との関係が良好な間は
- その他

-----<改ページ>-----

Q14 同居を始める際、親の介護をする、もしくはご自身や配偶者の介護をしてもらう想定でしたか。  
また、その考え方について、同居世帯と話をしていますか。

- 想定しており、話していた
- 想定していたが、結していなかった

- 想定しておらず、話していなかった  
 想定していないが、話していた

-----<改ページ>-----

**Q15** 現在お住まいの家をどう受け継いでいきたいですか。

- 血縁で受け継いでいってほしい  
 転売など、他のオーナーに受け継いでいってほしい  
 受け継いでいくことは考えていない  
 その他

-----<改ページ>-----

**Q16** 同居世帯との交流について、行き来はどのようにしていますか(現状)。また、したいですか(理想)。

1/2

現状

- 自分が同居世帯の方へ行くのみ  
 同居世帯が来ることもあるが、主に、自分が同居世帯の方へ行く  
 互いに同じくらい行き来している  
 自分が行くこともあるが、主に、同居世帯が自分の方へ来る  
 同居世帯が自分の方へ来るのみ  
 共用部で会うのみ（互いのエリアに出入りしない）

次を表示

-----<改ページ>-----

**Q17** 同居の暮らしについて、同居世帯とどの程度一緒に過ごしていますか(現状)。また、過ごしたいですか(理想)。

1/2

現状

- いつも一緒にいる  
 一緒に別々が7:3くらい  
 一緒に別々が半々くらい  
 一緒に別々が3:7くらい  
 いつも別々にいる

次を表示

-----<改ページ>-----

Q18 同居世帯と一緒にいる時で、食事以外の時間はどう過ごすのが理想ですか。

- みんなが集まって同じこと（TV、映画鑑賞等をする）をして過ごす
- みんなが一緒に居て、それぞれが好きな事をしながら過ごす
- 別々の場所で、それぞれが好きな事をして過ごす

-----<改ページ>-----

Q19 同居世帯と一緒にいる時に、一緒にしていること、それぞれしていることを教えてください。

1/2

一緒にしていること

- |  |  |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> テレビや映画を見る       | <input type="checkbox"/> スマホやタブレットを使う                |
| <input type="checkbox"/> 食事する            | <input type="checkbox"/> PCを使う                       |
| <input type="checkbox"/> お茶をする           | <input type="checkbox"/> 絵画する                        |
| <input type="checkbox"/> お酒を飲む           | <input type="checkbox"/> 音楽を聞く                       |
| <input type="checkbox"/> ゲームをする          | <input type="checkbox"/> 楽器を演奏する                     |
| <input type="checkbox"/> 子どもと遊ぶ          | <input type="checkbox"/> 創作系の趣味をする                   |
| <input type="checkbox"/> 子どもの世話をする       | <input type="checkbox"/> 運動や体操をする                    |
| <input type="checkbox"/> 子どもと寝起きをする      | <input type="checkbox"/> お客様を招く                      |
| <input type="checkbox"/> 子どもと一緒に読書や勉強をする | <input type="checkbox"/> 調理の下ごしらえをする                 |
| <input type="checkbox"/> ペットと遊ぶ          | <input type="checkbox"/> 片付けや掃除をする                   |
| <input type="checkbox"/> 仮眠する            | <input type="checkbox"/> その他<br><input type="text"/> |
| <input type="checkbox"/> 勉強する            | <input type="checkbox"/> 同居世帯と過ごすシーンはない              |
| <input type="checkbox"/> 仕事をする           | <input type="checkbox"/> この中にはない                     |
| <input type="checkbox"/> 化粧をする           |  |

次を表示

-----<改ページ>-----

Q20 あなたは、同居世帯にどのくらい気を遣いますか。

気を遣う

やや  
気を遣う

あまり  
気を遣わない

気を遣わない

----<改ページ>-----

Q21 どういう時に、同居世帯に気を遣いますか。

- |   |  |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 同居世帯が団欝しているとき        | <input type="checkbox"/> 家事をするとき（分担など） |
| <input type="checkbox"/> 同居世帯側のエリアに入るとき       | <input type="checkbox"/> 入浴するとき        |
| <input type="checkbox"/> 自分の世帯だけで寛ぎたいとき       | <input type="checkbox"/> 洗面所を使うとき      |
| <input type="checkbox"/> 自分の世帯だけで出掛けれるとき      | <input type="checkbox"/> 来客があるとき       |
| <input type="checkbox"/> 外出するとき               | <input type="checkbox"/> けんかするとき       |
| <input type="checkbox"/> 朝早く出掛けれるとき           | <input type="checkbox"/> 子が騒ぐとき        |
| <input type="checkbox"/> 遅く帰宅するとき             | <input type="checkbox"/> 荷物が届くとき       |
| <input type="checkbox"/> 同居世帯が寝ている時間帯に起きているとき | <input type="checkbox"/> その他<br>_____  |

----<改ページ>-----

Q22 同居世帯と合わないと思うことはありますか。

1/7

食材・食品に関する衛生観

ある

まあある

あまりない

ない

----<改ページ>-----

■同居の暮らしの満足度について教えてください。

Q23 同居している世帯との関係性はいかがですか。

良い

まあ良い

あまり良くない

良くない

----<改ページ>-----

Q24 同居の暮らし方に満足していますか。

1/2

あなた

満足している

まあ  
満足している

あまり  
満足していない

満足していない

-----<改ページ>-----

Q25 住宅選びが自由だとしたら、現在同居している世帯との暮らしで理想的な住まい方はどれですか。

1/2

あなたの考え方

- 同居（完全共用）
- 同居（部分共用）
- 同居（完全分離）
- 隣居（隣り合う敷地の家に住むこと）
- 近居（時間距離（交通手段に問わらず住宅間の行き来にかかる時間）が15分以内に住むこと）
- 近居（時間距離（交通手段に問わらず住宅間の行き来にかかる時間）が15分を超えて30分以内に住むこと）
- 遠居（時間距離（交通手段に問わらず住宅間の行き来にかかる時間）が30分を超えて、1時間以内に住むこと）
- 遠居（時間距離（交通手段に問わらず住宅間の行き来にかかる時間）が1時間を超えるところに住むこと）
- わからない

次を表示

-----<改ページ>-----

Q26 現在同居している世帯との暮らしについて、理想的な住まいとして「**Q25**」をお選びになった理由をなるべく具体的にお教えてください。

-----

^

▼

-----<改ページ>-----

■あなたの性格・価値観について教えてください。

Q27 同居世帯がいなくなった場合、空いた空間を賃貸住宅や民泊などに活用したいと思いますか。

- そう思う
- まあそう思う
- どちらともいえない
- あまりそう思わない
- そう思わない

-----<改ページ>-----

Q28 前問で「**Q27**」とお答えになった、その理由を教えてください。

-----<改ページ>-----

-----<改ページ>-----

**Q29** あなたの性格・価値観に当てはまるものをお選びください。

1/38

今の住まいに幸せを感じている

そう思う まあ どちらともいえない あまり そう思わない

-----<改ページ>-----

【条件】  
FILE\_Q5の選択肢『1』を選択した

**Q30** あなたの配偶者の性格・価値観に当てはまるものをお選びください。

1/38

今の住まいに幸せを感じている

そう思う まあ どちらともいえない あまり そう思わない

-----<改ページ>-----

設問番号	回答形式 (記入必須)	設問本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	表示条件 (記入必須)	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	選択肢番号 (小見出し)	ランダマイズ 対象
[1] Q1 性別	設問本文			あなたの性別をお答えください。	ALL			
			1 男性					
			2 女性					
[1] Q2 年齢	設問本文			あなたの年齢をお答えください。	ALL			
			1 ( ) 歳					
改 1 Q3 SA	設問本文			婚姻の状況をお答えください。	ALL			
			1 未婚					
			2 既婚					
			3 離・死別					
改 1 Q4 SA	設問本文			親世帯や子世帯、その他親族世帯と同居していますか。	ALL			
			1 同居している					
			2 同居していない					
改 1 Q5 SA	設問本文			親世帯や子世帯、その他親族世帯で最も近くにお住いの方についてお知らせください。	ALL			
			1 親世帯(自分の親世帯)					
			2 親世帯(配偶者の親世帯)					
			3 子世帯(息子世帯)					
			4 子世帯(娘世帯)					
			5 兄弟姉妹の世帯					
			6 祖父母の世帯					
			7 その他親族の世帯(具体的に )					
			8 親族はない					
改 1 Q6 SAマトリクス	設問本文	ループ(表題)		世帯の住居形態についてお知らせください。	ALL			
		(1) ご自身						
		(2) 最も近くに住んでいる〇〇(Q5の回答を引用)						
		選択肢(表題)	小見出し【持家・一戸建て】				ランダマイズ不可	
			1 法文住宅					
			2 建売住宅					
			3 中古					
			4 リバーモーション					
			小見出し【持家・集合住宅】					
			5 新築(マンションなど)					
			6 中古(マンションなど)					
			7 リバーモーション(マンションなど)					
			小見出し【賃貸】					
			8 一戸建て					
			9 集合住宅(マンション・アパート・公園・公社など)					
			10 集合住宅(社宅・寮など)					
			小見出し【その他】					
			11 その他(具体的に )					

カクント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説明 (マトリクス 問本文 表題)	選択肢 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	～ 体験 年齢	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	～ 年齢 年齢	～ 年齢 年齢	ランダマイズ 対応
	改									
1	Q7 SA	設問本文			最も近くに住んでいる〇〇(Q5の回答を引用)は、あなたの自宅からどれくらいの距離にお住まいですか?時間距離(は、交通手段に問わらずかかる時間)でお答えください。		ALL			
					1 同棲一戸建て内で完全にエリアを分けている		表頭が1-4,8,11で Q6(1)の回答と Q6(2)の回答が同じ場合のみ表示			
					2 同じマンション等集合住宅の隣室		Q6(1)=5-7,9,10 かつQ6(2)=5-7,9,10の場合のみ表示			
					3 同じマンション等集合住宅の隣室以外		Q6(1)=5-7,9,10 かつQ6(2)=5-7,9,10の場合のみ表示			
					4 同じ敷地内の別棟一戸建て		Q6(1)=1-4,6かつ Q6(2)=1-4,6の場合のみ表示			
					5隣接した敷地の別棟一戸建て		Q6(1)=1-4,6かつ Q6(2)=1-4,6の場合のみ表示			
					6 時間距離15分以内					
					7 時間距離30分以内					
					8 時間距離60分以内					
					9 時間距離60分超					
	改									
1	Q8 SAマトリクス	設問本文	ループ(表題)		家族構成についてお知らせください。		ALL			
					(1)ご自身					
					(2)最も近くに住んでいる〇〇(Q5の回答を引用)					
			選択肢(表題)		1 単身					ランダマイズ不要
					2 夫婦		Q8-1でQ3=1,3は エラー			
					3 親と子(末子が未就学)					
					4 親と子(末子が小学生)					
					5 親と子(末子が中学生)					
					6 親と子(末子が高校生)					
					7 親と子(末子が大学生以上)					
					8 その他(具体的に)					

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	調問本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	～必 ず 採 用 時 間	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	～必 ず 選 択 時 間	～必 ず 採 用 時 間	ラン ダマイ ズ
	改									
1	Q9	SA	設問本文		最も近くに住んでいる〇〇(Q5の回答を引用)との交流 (顔を見たり、会話など)の頻度について、最も近いものをお 知らせください。		ALL			
				1 毎日複数回						
				2 ほぼ毎日						
				3 週4～5回						
				4 週2～3回						
				5 週1回						
				6 月に2回以上						
				7 月に1回以上						
				8 3ヶ月に1回以上						
				9 半年に1回以上						
				10 半年に1回未満						

カ ク タ ント	設 問 番 号	回答形式 (記入必須)	設 問 本文 (マ トリク ス)	選 択 肢 (小 字 出 し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必 ず 選 択 す る 用	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	必 ず 選 択 す る 用
			設問補足文		あなたは、先日のお問合せで、○○(SCR5の回答)が○○(SCR7の回答)にお住まいだとご回答になられました。			
1	Q1	SA	設問本文		現在お住まいのご自身の家について、築年数をお知らせください。	ALL		
				1 1年未満 2 1~3年未満 3 3~5年未満 4 5~10年未満 5 10~15年未満 6 15年以上				
			改					
1	Q2	SA	設問本文		現在お住まいのご自身の家について、延床面積をお知らせください。	ALL		
				1 40平方m未満(約12坪未満) 2 40~50平方m未満(約12~15坪未満) 3 50~60平方m未満(約15~18坪未満) 4 60~70平方m未満(約18~21坪未満) 5 70~80平方m未満(約21~24坪未満) 6 80~90平方m未満(約24~27坪未満) 7 90~100平方m未満(約27~30坪未満) 8 100~120平方m未満(約30~36坪未満) 9 120~150平方m未満(約36~45坪未満) 10 150~200平方m未満(約45~60坪未満) 11 200平方m以上(約60坪以上) 12 不明・わからない				
			改					
1	Q3	SAマトリクス	設問本文		リビングの広さをお知らせください ※一体となっている場合のタイニングや間コーナーもリビングに含めて下さい。	ALL		
				ルーム(赤枠) (1)ご自身の世帯 (2)最も近くに住んでいる○○(SCR5の回答を引用)				
				調野様(赤枠) 1 6畳未満(約10平方m未満) 2 6~8畳未満(約10~13平方m未満) 3 8~12畳未満(約13~20平方m未満) 4 12~16畳未満(約20~26平方m未満) 5 16~20畳未満(約26~33平方m未満) 6 20畳以上(約33平方m以上) 7 不明・わからない 8 該当する部屋はない				
			改					
1	Q4	SA	設問本文		隣居している○○(SCR5の回答を引用)との住まいについて、当たるまるのをお知らせください。	SCR7=4,5		
				1 敷地が一体になっている 2 敷地の一部が繋がっている 3 敷地が柵等で区切られている 4 その他(具体的に )				
			改					
1	Q5	MA	設問本文		隣居している○○(SCR5の回答を引用)と共にしている部分をすべてお知らせください。	SCR7=2,4,5		
				1 アプローチ(道路～玄関までの通路) 2 庭 3 テラス 4 バルコニー 5 駐車スペース 6 駐輪スペース 7 倉庫・物置き 8 郵便ポスト 9 その他(具体的に )				

## 付録2) 親子隣居・近居者を対象としたWebアンケート 調査票 本調査

カ ー ト ン ク ロ ー ド	設 問 番 号	回答形式 (記入必須)	(マ ル ト リ ク ス) 英 文 本 文 (英 文 翻 訳)	(小 見 出し 号) 英 文 本 文 (英 文 翻 訳)	設問文・選択肢 (記入必須)	(必 要 性 有 り) 英 文 本 文 (英 文 翻 訳)	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	(必 要 性 有 り) 英 文 本 文 (英 文 翻 訳)
		改						
1	Q6	SA	設問本文		隣居している〇〇(SCR5の回答を引用)と行き来について、お知らせください。		SCR7=2,4,5	
					1 一度道路／共用廊下に出て 2 自宅玄関から敷地内を通って、隣居世帯の玄関へ 3 自宅玄関から敷地内を通って、隣居世帯の玄関以外の出 入り口△ 4 自宅玄関以外の出入り口から敷地内を通って、隣居世帯の 玄関へ 5 自宅玄関以外の出入り口から敷地内を通って、隣居世帯の 玄関以外の出入り口△ 6 その他 (具体的に )			
		改						
1	Q7	MA	設問本文		隣居している〇〇(SCR5の回答を引用)と住まいの計画で工夫をしたことについて、すべてお知らせください。		SCR7=2,4,5	
					1 お互いのプライバシーが保たれる 2 行き来がしやすい 3 お互いのスペースを使いやすい 4 それが立派な一軒家になる 5 片方が空き家になつた場合転売しやすい 6 その他 (具体的に )		SCR7=4,5のみ表示	
		改						
1	Q8	MA	設問本文		隣居している〇〇(SCR5の回答を引用)と住まいの計画で配慮をしたことについて、すべてお知らせください。		SCR7=2,4,5	
					1 生活ごみが見えないように配慮した 2 洗濯ものが見えないように配慮した 3 お互いの住まいの方向に窓を開けないようにした 4 生活音等が伝わりにくいよう配慮した 5 光が気にならないように配慮した 6 玄関の位置をそれぞれ離れるようにした 7 玄関の位置を近くに計画した 8 メインの庭を離して計画した 9 庭を共用できるようにした 10 倉庫を共用できるようにした 11 同じ感覚で行き来できるようなテラスまたは庭を計画した 12 その他 (具体的に )			
		改						
1	Q9	SA	設問補記文		ここからは、最も近くに住んでいる〇〇(SCR5の引用)との暮らしについて、お問い合わせいたします。		ALL	
					〇〇(SCR5の引用)の世帯主の年齢をお知らせください。			
					1 24歳以下 2 25~29歳以下 3 30~34歳以下 4 35~39歳以下 5 40~44歳以下 6 45~49歳以下 7 50~54歳以下 8 55~59歳以下 9 60~64歳以下 10 65~69歳以下 11 70~74歳以下 12 75歳以上			

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説明本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必 排 他	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	選 択 基 準	ラ ン ダ ム 定 義
	改 1 Q10 SA	説明本文			あなたの世帯と〇〇（SCR5の引用）が今の距離で暮らしか始めてからの年数をお知らせください。		ALL		
				1 1年未満					
				2 1年以上3年未満					
				3 3年以上5年未満					
				4 5年以上10年未満					
				5 10年以上15年未満					
				6 15年以上					
	改 1 Q11 SA	説明本文			今の距離での暮らしを始めるにあたり地域はどのように選びましたか。		ALL		
				1 自分が住んでいるエリア					
				2 〇〇（SCR5の引用）が住んでいるエリア					
				3 自分も〇〇（SCR5の引用）も住んでいるエリア					
				4 新しくエリアを選んだ					
				5 その他（具体的に ）					
	改 1 Q12 SA	説明本文			最も近くに住んでいる〇〇（SCR5の引用）と今の距離で住み始めた際、提案をしたのはどちらからでしょうか。		ALL		
				1 自世帯側から提案した					
				2 〇〇（SCR5の引用）側から提案があった					
				3 どううともなく・自然に					
				4 その他（具体的に ）					
	改 1 Q13 SA	説明本文			今あなたがお住いのエリアは、あなた、もしくは〇〇（SCR5の引用）の地元でしょうか。		ALL		
				1 自分の地元					
				2 自分の配偶者の地元					
				3 自分・配偶者の双方の地元					
				4 〇〇（SCR5の引用）の地元					
				5 自分・〇〇（SCR5の引用）の双方の地元					
				6 配偶者・〇〇（SCR5の引用）の双方の地元					
				7 自分・配偶者・〇〇（SCR5の引用）全員の地元					
				8 自分・配偶者・〇〇（SCR5の引用）のいづれも地元ではない					
	改 1 Q14 MA	説明本文			〇〇（SCR5の引用）と今の距離で住み始めた理由について、すべてお知らせください。		Q12=1,2		
				1 子育てのため					
				2 介護のため					
				3 老後の生活を見越して					
				4 家事を協力できるため					
				5 近くで生活した方が安心だから					
				6 近くで生活した方が楽しいから					
				7 経済的な理由で（生活費節約のため）					
				8 経済的な理由で（住宅取得費を分担するため）					
				9 仕事や勤務地の都合で					
				10 世帯を持った場所や実家が近かったため					
				11 土地や家があった（所有していた、購入した、建てた）ため					
				12 たまたま、偶然					
				13 その他（具体的に ）					
				14 特に理由はない		排他			

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説明本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必 排 他 候	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	必 排 他 候	ラ ン ダ ム 定 義
	改								
1	Q15	SA	説明本文		○○(SCR5の引用)と今の距離での暮らしは、今後どのくらい続ける予定でしょうか。	ALL			
				1 1年未満					
				2 1年以上3年未満					
				3 3年以上5年未満					
				4 5年以上10年未満					
				5 10年以上15年未満					
				6 15年以上					
				7 期間は分からぬが、出来る限り長く					
				8 期間は分からぬが、出来る限り短く					
	改								
1	Q16	MA	説明本文		○○(SCR5の引用)との暮らしを続ける予定は、○○(Q15の引用)とお答えになりましたが、その理由をお知らせください。	ALL			
				1 子育てが満ちきるまで					
				2 自分もしくは○○(SCR5の引用)が生きている間は					
				3 経済的に安定するまで					
				4 ○○(SCR5の引用)との関係が良好な間は					
				5 勤務地の都合に合わせて					
				6 家を移る予定があるから		カテゴリー7と同時選択不可			
				7 家を移る予定がないから		カテゴリー6と同時選択不可			
				8 その他(具体的に)					
	改								
1	Q17	SA	説明本文		○○(SCR5の引用)と今の距離での暮らしを始めた際、○○(SCR5の引用)もしくはご自身の介護をする想定でしたでしょうか。また、その考え方について○○(SCR5の引用)と話していますか。	ALL			
				1 想定していたし、話していた					
				2 想定していたが、話していなかった					
				3 想定していないが、話はしている					
				4 想定していないく、話もしていない					
	改								
1	Q18	SAマトリクス	説明本文		○○(SCR5の回答を引用)との行き来の頻度について緊急事態宣言発令前の状況をお知らせください。	ALL			
		ループ(表題)		(1) 自世帯の誰かが○○(SCR5の引用)に行く(実態)					
				(2) ○○(SCR5の引用)の誰かが自世帯に来る(実態)					
				(3) 自世帯の誰かが○○(SCR5の引用)に行く(理想)					
				(4) ○○(SCR5の引用)の誰かが自世帯に来る(理想)					
		選択肢(表題)		1 毎日複数回					
				2 ほぼ毎日					
				3 週3~4回					
				4 週1~2回					
				5 月に2~3回					
				6 月に1回					
				7 2~3ヶ月に1回					
				8 4~5ヶ月に1回					
				9 半年に1回以下					
				10 ほとんど行かない/来ない					

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	（マトリクス） 設問本文	（小見出し） 選択肢番号	設問文・選択肢 (記入必須)	（必 排他時）	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	（必 排他時）	（必 排他時）
	改								
1	Q19	SAマトリクス	設問本文		次に、 <u>壁紙貼替費用発生後の状況</u> についてお知らせください。	ALL			
			ループ（各側）		(1) 自世帯の誰かが〇〇（SCR5の引用）に行く（実態） (2) 〇〇（SCR5の引用）の誰かが自世帯に来る（実態） (3) 自世帯の誰かが〇〇（SCR5の引用）に行く（理想） (4) 〇〇（SCR5の引用）の誰かが自世帯に来る（理想）	Q18の回答を参考に引用			
			選択肢（表頭）		1 毎日複数回 2 ほぼ毎日 3 週3～4回 4 週1～2回 5 月に2～3回 6 月に1回 7 2～3カ月に1回 8 ほとんど行かない／来ない	Q18の回答を参考に引用			
	改								
1	Q20	MAマトリクス	設問本文		〇〇（SCR5の引用）との世帯間の行き来の交通手段について、すべてお知らせください	SCR7=3,6,7のみ表示			
			ループ（各側）		(1) 自世帯が最も近い〇〇（SCR5の回答を引用）に行く時 (2) 最も近い〇〇（SCR5の回答を引用）が自世帯に来る時				
			選択肢（表頭）		1 徒歩のみ 2 自転車 3 自家用車 4 バイク 5 電車 6 バス 7 タクシー 8 その他（具体的に）				
	改								
1	Q21	MA	設問本文		〇〇（SCR5の引用）との世帯間の行き来の目的について、すべてお知らせください	ALL			
					1 おしゃべり 2 相談 3 お互いの顔を見る 4 病と会う 5 家事支援 6 見守り 7 子育てサポート 8 食事 9 行事等のイベント 10 介護 11 ベットの世話 12 その他（具体的に）				
	改								
1	Q22	SA	設問本文		〇〇（SCR5の引用）との世帯間の連絡について、普段どの程度連絡を取っていますか。 実際に会うことを含まず、「連絡をとる」頻度をお知らせください。	ALL			
					1 毎日複数回 2 ほぼ毎日 3 週4～5回 4 週2～3回 5 週1回 6 月に2回以上 7 月に1回以上 8 3ヶ月に1回以上 9 半年に1回以上 10 半年以内未満 11 連絡は取らない				

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	（マトリクス） 調査本文	（小見出し） 選択肢番号	設問文・選択肢 (記入必須)	（必 排他時）	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	（必 排他時）	（必 選定マ タイズ）
	改								
1	Q23	MAマトリクス	調査本文		○○（SCRSの引用）との世帯間の連絡手段について、すべてお知らせください		ALL		
			ループ（各側）	(1)普段の連絡手段					
				(2)行き来の際の連絡手段					
			選択肢（表頭）	1 直接声をかける					
				2 電話する					
				3 LINEなどのSNSで連絡する					
				4 事前にスケジュールを伝える					
				5 その他（具体的に）					
				6 行き来はない		排他	Q23-1では非表示		
	改								
1	Q24	SAマトリクス	調査本文		○○（SCRSの引用）との世帯間の行き来についてお知らせください。		ALL		
			ループ（各側）	(1)緊急事態宣言発出前 <sub>の</sub> 状況					
				(2)緊急事態宣言発出後 <sub>の</sub> 状況					
			選択肢（表頭）	(3)理想（緊急事態宣言発出前 <sub>の</sub> ）					
				(4)理想（緊急事態宣言発出後 <sub>の</sub> ）					
				1 自分が相手方の方へ行くのみ					
				2 相手方が来ることもあるが、主に、自分が相手方の方へ行く					
				3 互いに同じくらい行き来している					
				4 自分が行くこともあるが、主に、相手方が自分の方へ来る					
				5 相手方が自分の方へ来るのみ					
				6 双方の自宅外で会うのみ（互いのエリアに出入りしない）					
	改								
1	Q25	MAマトリクス	調査本文		○○（SCRSの引用）からサポートを受けている／サポートしていることについてお知らせください。		ALL		
			ループ（各側）	(1)サポートを受けている（緊急事態宣言発出前 <sub>の</sub> ）					
				(2)サポートをしている（緊急事態宣言発出前 <sub>の</sub> ）					
			選択肢（表頭）	(3)サポートを受けている（緊急事態宣言発出後 <sub>の</sub> ）					
				(4)サポートをしている（緊急事態宣言発出後 <sub>の</sub> ）					
				1 食事（作る・片付ける等）					
				2 洗濯					
				3 掃除					
				4 買い物					
				5 荷物の受け取り					
				6 病気の時の看病・手当					
				7 病院等の送迎					
				8 ペットの世話					
				9 子どもの預かり					
				10 子どもの学校・保育所・習い事等の送迎					
				11 介護					
				12 介護・医療サービスの手配					
				13 その他（具体的に）					
				14 サポートはない		排他			

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	（マトリクス） 設問本文	（小見出し） 選択肢番号	設問文・選択肢 (記入必須)	（必 要性 度）	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	（必 要性 度）	（必 要性 度）
	改								
3	Q26	SAマトリクス	設問本文		緊急事態宣言発出前に、〇〇（SCR5の引用）からサポートを受けていた／していた頻度についてお知らせください。		Q25(1)(2)≠14		
			ループ（表頭）	(1) 食事（作る・片付ける等） (2) 洗濯 (3) 掃除 (4) 買い物 (5) 荷物の受け取り (6) 病気の時の看病・手当 (7) 病院等の送迎 (8) ベットの世話 (9) 子どもの預かり (10) 子どもの学校・保育所・習い事等の送迎 (11) 介護 (12) 介護・医療サービスの手配 (13) 〇〇(Q25-13を引用)					
			選択肢（表頭）	1 ほぼ毎日 2 週3～4回 3 週1～2回 4 月に2～3回 5 月に1回 6 2～3ヶ月に1回 7 4～5ヶ月に1回 8 半年に1回以下					
	改								
3	Q27	SAマトリクス	設問本文		緊急事態宣言発出後に、〇〇（SCR5の引用）からサポートを受けていた／していた頻度についてお知らせください。		Q25(3)(4)≠14		
			ループ（表頭）	(1) 食事（作る・片付ける等） (2) 洗濯 (3) 掫除 (4) 買い物 (5) 荷物の受け取り (6) 病気の時の看病・手当 (7) 病院等の送迎 (8) ベットの世話 (9) 子どもの預かり (10) 子どもの学校・保育所・習い事等の送迎 (11) 介護 (12) 介護・医療サービスの手配 (13) 〇〇(Q25-13を引用)					
			選択肢（表頭）	1 ほぼ毎日 2 週3～4回 3 週1～2回 4 月に2～3回 5 月に1回 6 2～3ヶ月に1回 7 ほとんどない					



カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説明本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必排他条件	質問・選択肢の表示条件 (記入必須)	選択肢番号	ランダマイズ
		改							
1	Q30	MA	説問本文		○○(SCR5の引用)との今の距離での暮らしについて、デメリットだと思うことを教えてください。	ALL			ランダム
				1 行き来が面倒					
				2 突然の訪問がある					
				3 相手世帯の訪問が多い					
				4 親戚付き合いが増える					
				5 手伝いを頼まれる					
				6 干渉される					
				7 プライバシーが守られない					
				8 子育てに口を出される					
				9 家事の仕方に口を出される					
				10 頼られすぎる					
				11 金銭面の負担が増える					
				12 サポートを求められる					
				13 すぐ物を借りに来る					
				14 出かけるときに気を遣う					
				15 その他(具体的に)					
		改							
1	Q31	SA	説問本文		普段の生活で、○○(SCR5の引用)に気を遣うことはありますか。	ALL			
				1 気を遣う					
				2 まあ気を遣う					
				3 あまり気を遣わない					
				4 気を遣わない					
		改							
1	Q32	MA	説問本文		同居ではなく、今の距離での暮らしを選んだ理由をお知らせください。	ALL			
				1 互いのプライバシーを尊重したいから					
				2 同居して衝突するのが嫌だから					
				3 生活リズムが違うから					
				4 生活習慣が違うから					
				5 頭痛が違うから					
				6 気を遣したくないから					
				7 お互いに独立した暮らしをしたいから					
				8 その他(具体的に)					
		改							
1	Q33	SA	説問本文	設問補足文	最も近い○○(SCR5の回答を引用)との暮らしの満足度についてお知らせください。				
					最も近い○○(SCR5の回答を引用)との関係性についてお知らせください。	ALL			
				1 とても良い					
				2 普通					
				3 どちらともいえない					
				4 あまり良くない					
				5 良くない					
		改							
1	Q34	SA	説問本文		最も近い○○(SCR5の回答を引用)との暮らしに満足していますか。	ALL			
				1 とても満足している					
				2 まあ満足している					
				3 どちらともいえない					
				4 あまり満足していない					
				5 満足していない					

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説問本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必 排 他 時	質問・選択肢の 表示条件 (記入必須)	選 択 基 準	必 排 他 時 マ イ ズ
1	Q35	SA	説問本文	1	住宅選びが自由だとした場合、最も近い〇〇(SCR5の回答を引用)との暮らしで理想的な住まいはどちらになりますか。	ALL			
				2	同居（完全共用：寝室以外は全て共用）				
				3	同居（部分共用：水廻りや玄関、リビングなど、各自専有している空間・設備がある）				
				4	同居（完全分離空間・設備を各自の世帯が専有しており、共用部分がない） ※コネクティングドア等で一部壁がついている物も含む				
				5	隣居（隣り合う敷地の家に住むこと）				
				6	近居（時間距離（交通手段に関わらず住宅間の行き来にかかる時間）が15分以内に住むこと）				
				7	近居（時間距離（交通手段に関わらず住宅間の行き来にかかる時間）が15分を超えること）				
				8	遠居（時間距離（交通手段に関わらず住宅間の行き来にかかる時間）が30分を超えること）				
1	Q36	FA（自由回答）	説問本文	1	理想的な住まいでお答えになった理由をなるべく具体的にお知らせください。	ALL			

カウント	設問番号	回答形式 (記入必須)	説明本文 (マトリクス)	選択肢番号 (小見出し)	設問文・選択肢 (記入必須)	必排他性	質問・選択肢の表示条件 (記入必須)	選択肢番号 (必排他性)	ランダム化マナ妹子
		設問本文			あなたの性格・価値観についてお知らせください。				
8	Q37	SAマトリクス	設問本文		あなたの性格や価値観について、どのように感じたかお知らせください。	ALL			G内ランダム
		ループ(表側)		(1)	今の住まいに幸せを感じている				住まいの幸せ
				(2)	住むほどに幸せを強く感じる				住まいの幸せ
				(3)	家にいると幸せを感じる				住まいの幸せ
				(4)	社交的な方だ				性格
				(5)	内向的な方だ				性格
				(6)	明るい方だ				性格
				(7)	家族や親しい友人というのが好きだ				性格
				(8)	人と仲良くなるのが得意だ				性格
				(9)	人に気を遣うのは苦ではない				性格
				(10)	人の世話をするのが好きだ				性格
				(11)	気が長い方だ				性格
				(12)	我慢強い方だ				性格
				(13)	現状に適応するのが得意だ				性格
				(14)	人と話すのが好きだ				性格
				(15)	親戚付き合いが得意だ				性格
				(16)	切り替えが得意な方だ				性格
				(17)	人に自分の物を触られるのは嫌だ				性格
				(18)	最小限のもので暮らしたい				性格
				(19)	キレイ好きだ				性格
				(20)	マイペースに暮らしたい				性格
				(21)	人の意見に流されやすい方だ				性格
				(22)	洗練されたインテリアに囲まれた暮らしがしたい				価値観
				(23)	仕事中心の暮らしがしたい				価値観
				(24)	趣味を楽しむ暮らしがしたい				価値観
				(25)	家庭などの暮らしき丁寧にしたい				価値観
				(26)	健康を心掛けた暮らしがしたい				価値観
				(27)	防災・防犯などの危機管理の行き届いた暮らしがしたい				価値観
				(28)	地域環境に配慮した暮らしがしたい				価値観
				(29)	夫婦や家族と過ごす時間を大切にした暮らしがしたい				価値観
				(30)	ペットとの共生を楽しむ暮らしがしたい				価値観
				(31)	新しい設備や先端の技術を取り入れた暮らしがしたい				価値観
				(32)	新しい商品が出たら試してみることが多い				価値観
				(33)	仲間との交流を楽しむ暮らしがしたい				価値観
				(34)	地域コミュニティにやじんした暮らしがしたい				価値観
				(35)	上質なものを手入れしながら長く使いたい				価値観
				(36)	家で過ごす時間が好きだ				価値観
				(37)	地方より都会で暮らしたい				価値観
				(38)	集合住宅よりも戸建住宅で暮らしたい				価値観
		選択肢(表側)		1	とてもそう思う				
				2	まあそう思う				
				3	どちらともいえない				
				4	あまりそう思わない				
				5	そう思わない				